

深淵卿に憑依しました

這いよる深淵より

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺はポニーテールが好きだ。長髪の人にはポニテにして?と懇願、短髪の人には髪を  
伸ばしてポニテにしてほしいと思う程に好きだ

しかし、人によつて合う髪型があるのだ。ポニテ以外を否定する気はない、でもまあ  
……ポニテの女の子かわいいよなあ

上記の男が『ありふれた職業で世界最強』の世界に憑依転生するお話です。

南雲君と一緒に奈落の底に落ちてしまう予定なので、そういうのが苦手な方はブラウ  
ザバック推奨

ヒロインは秉を予定しており、そのヒロインの中には皆大好きハウリアの厨二娘！こ

ここまで言えば誰に憑依するかわかるね？

シア、ティオ、愛子先生、園部、リリアーナもヒロインになるかも知れない

### 追記

新しく内容を少しリメイクして投稿することにしました。お気に入りをしている方々や評価して頂いた方々には申し訳ありませんが、この作品を未完とさせていただきます

勝手な事だと分かっていますが、読み直してみて少し話を飛ばし過ぎていたりしているので、新しくリメイクして出すことにしました。よければリメイクの方も見てくださいと嬉しいです。

リメイクは今日中には出すつもりでいます  
本当にすいません

# 目 次

奈落での再会と怪物たちの目覚め

62

第0章：物語はまだ始まつてすらないない  
神？（老人）とのあれこれ

八重櫻雲

新たなる武器と目覚めの深淵

ユエ

日常は唐突に終わりを迎へ、彼らは…：

封印部屋の化け物は沈み、少年は強さ  
を求める

最奥のガーディアン

決着

オスカーの住処

第二章

残念ウサギと苦労人浩介

シア・ハウリア

再会のハウリア

132 123 115

109 102 93

85

79 70

第一章：幕開け

異世界召喚

ステータスプレート

運命の日、前日

トラップ、それは絶望の始まりを告げ  
る○○○

ベヒモス

56 48

42 30 22

16

7

1

残念ウサミミ族——ハウリア——

フエアベルゲン——

ハウリア族強化の十日間——

兎人族ハウリアの……——

失敗は成長の元——

旅立ち——

ブルツクの町——

ギルドとマサカ（の宿）——

おいでませ～ライセン大迷宮！（1）

270

おいでませ～ライセン大迷宮！（2）

288

おいでませ～ライセン大迷宮！（3）

308

329

おいでませ～ライセン大迷宮！（4）

249 238 221 196 183 168 150 141



# 第0章：物語はまだ始まつてすらいない 神？（老人）とのあれこれ

「以上で説明は終わりじゃ」

俺は目の前の老人の言つたことを一応確認する

「えーと、俺死んだから異世界転生つてことで…k？」

「儂の10分にわたる説明が一言で訳されるとは……！」

そういう言い、わざとらしく目元に手をやりヨヨヨと悲しんでいるアピールをする老人  
……うわ、うぜえ……

「そういうのは良いんで、それで俺は一体どうすればいいんですかね？」

定番でいくと転生特典を選ぶんだろう。これが夢でもドッキリでもどっちでもいい。

面白そだから話を合わせることにしよう……俺の夢が叶うかもしれない

「お主の思つてる通りじやよ、特典は3つで行き先はランダムじやな……それより本当じゃからな？ 夢とかドツキリじやないからの？」

うん、言つてない筈の俺の心の声に答えてるのは神様特有の力かな？ プライバシーもクソもありやしないなあおい

「転生する世界の候補ってどのぐらいなんですか？」

ランダムって言われても候補が何個があるんじやないかなあと想い、質問してみたが案の定の答えが返ってきた

「『ありふれた職業で世界最強』『とある魔術の禁書目録』『転生したらスライムだつた件』『ハイスクールDXD』『fate zero』『ようこそ実力至上主義の教室へ』の……  
今回は6つじやな」

「(今回は?) その6つか~」

取り敢えず、その世界に行つたとしてのメリットを出そうか

『ありふれた職業で世界最強』なら、大好きなボニテ剣士の八重樫雲がいる。生でボニテ八重樫雲ちゃんを見てみたい。それと一緒に剣の稽古がしたい……斬り合いも良さげだし、欲を言えば付き合えれば最高だなあ

『どある魔術の禁書目録』は神裂火織の墮天使エロメイドが最高……いや、一番重要なのはボニテだけどな！ 胸も良いと思うけど……それと、是非とも剣の稽古をつけてもらいたい。魔術なしで純粋に斬り合つたりもしたいな……聖人つて言うぐらいだから面白そうだ

『転生したらスライムだつた件』は……見てないから分からん……俺的には別に行かなくていい世界だな

『ハイスクールDXD』は姫島朱乃さん目当てだな、話はよく分からぬけど……とにかくボニテでおつとりしてそうで可愛いぐらいだからなあ

『f a t e z e r o』は……間近で英靈の闘いが見たいな。聖杯戦争関わつたり、もしかしたらマスターになつたりして……何人か救いたい人いるし、まあ楽しそう

『ようこそ実力至上主義の教室へ』は軽井沢恵のボニテ姿をみたいなあ可愛いし、それか綾小路と組んで面白おかしく裏から指示出されて動いたりな。

えーと、なんか一通り習つてゐるんだつけ？ 格闘術とか？ 剣道はやつたことあんのかな？ 最後の辺りで裏切つたら面白そうだ

「……お主、ポニー・テールの娘つ子と会いたいとか、戦いたいとか……そんなことしか考えておらんのか？」

「いや、別に髪型なら一番ポニー・テールが好きつてだけで、それだけで判断してるわけでないですよ。人には人の髪型つてもんがあるわけですし？ 全人類女子がポニテだつたら変でしょ？ 僕は喜びますけどね？ 似合う似合わないがありますし……それに剣を使う漫画ばかり見てたからか、憧れて剣道とかやってましたからね。ついでに一通りの武術とか経験してみたり、合気道とか八極拳ね！」

「自分的好きなことは随分とよくつらつらと喋るもんじやなあ……お主」  
「まあ、好きなことには全力、興味ないことには不真面目に適当につてのが売りですからね」

「なんじやその売りは！ ……おつほん！ 所で特典はどうするのじや？」

「あ、んじやあ1つ目は転生先を『ありふれた職業で世界最強』にしてください」「え、それに特典使うの？」

驚いてか口調を崩しながら勿体なくない？ とか目で訴えてくるが無視するスル

## 5 神?（老人）とのあれこれ

「あ～なんだろうな……直感とか欲しいなあ」

「直感……とな？」

「困った時に解決策が急にひらめいたり、危険なことや危ない時、負の感情とか……そういうことを感知したり、的なアレ？」

「ほう…ほう、なんとなく分かったわい、儂が勝手にアレンジしておくとして……最後はどうするんじや？」

ん？ なんかニヤツとしたような……？ 気のせい…か？

「家の近くを剣道場とかまあ、そいつた道場があつて鍛練ができる場所にして」  
「ええ……」

老人は信じられないものを見たかのような目をする

「その反応は流石に酷いと思うんだが……」

なんなんだ一体、俺にどうしろと？ 無双はハジメ君がしてくれるとと思うんだけど……まあ、自分に出来る限りの事はするがな

「そ、うか……魔王の……ワンチャン」

なんだろ、う…………あまり聞こえないが嫌な予感しかしねえんだけど

「そんじや行つてくるのじゃ～！」

なんか企んでいるであろう笑顔でグツショブポーズをする老人に不信感を抱きながら俺の意識は落ちていった

# 八重櫻雲

この世界に転生して気が付いたことがある。

一つ、俺は普通の転生と違い、遠藤浩介君の肉体に憑依転生してしまったということ。  
神様が何か企んでいたようだが、遠藤への憑依この事だつたのかと仕方なく諦めたのだが……小さい頃から近くにいるのにも関わらず親が俺の事を見失つてしまい、置いていかれてしまつたり

、かくれんぼをすれば俺の事を忘れて友達が帰ってしまう程に（予想以上に）影が薄かつた。その日の夜中は当然、枕を濡らした。

そんな事より此方の方が重要で、神にお願いした特典で家の近くに剣道場が欲しいと言つたが、なんと……自分の家から歩つて数分の所に剣術道場があり、表札を見たところ……八重櫻とあり、なんと！この道場は八重櫻さんの家だつたのだ！！！

確かに俺は転生特典で近くに道場欲しいと言つたが、まさか八重櫻さん宅だとは思わなかつた。神があの時、ニヤついていたのは俺を遠藤君に憑依させ、八重櫻雲さんの家

の近くにしたことだつたようだ。（↑たぶん違う）

さて……小学生になり、まず驚いた事といえば八重樫零、天之河光輝、白崎香織、坂上龍太郎という豪華原作組メンバーと同級生だと言うことだ。

というか聞いてくれ、小学生の八重樫さんはボニテではなくボーアイツシユな髪型だというのにめちゃんこ可愛いかった。それはもうめっちゃ似合つてた！俺、短髪も良いかも……↓（しつかりしろ俺！）

親から許可をもらい、剣術道場に入門するようになると八重樫零さんと話す機会が少し増えた。最近は元気がなさそうなので、あれの時期なのだろう

そう……原作であつたように八重樫さんは天之河に好意を抱いている女子によるいじめを受けていたのだ。

天之河は顔が良い事や運動、勉強、なんでもできるので人気が高く、近くにいる女子を排除して自分がその間に入ろうとする女子が多かつたのだ。

八重樫さんはボーアイツシユな髪型と他の女子とは違う地味目な格好、剣術を習つてゐる。ということで標的になつてしまつたのだ。

そんな事をされば当然、八重樫さんは信頼のおける人物に守つてもらおうとする。

残念ながら、それは俺ではなく天之河だ。だが、助けを求められた天之河は関係者を集めて話し合いという形をとり、そんな事で解決するはずもなく……更に風当たりが強くなつた。それも天之河にバレないように巧妙さが増して……

可哀想だが、俺は何もできない……放置するしかないだろう。どうせ主人公南雲が後々なんとかするんだ。それまでの……辛抱

・・・・・うん、無理

そうは思つても好きな子を放置することなどできる筈もなく、翌日声をかけることにした

「八重樫さん、昨日の剣術に関して聞きたい事があるから一緒に帰らない?」

稽古の時などにはよく話すようになつたが、学校ではあまり話していない俺と帰ろうなんて言わっても了承してくれるわけないのでダメ元だが、何故かOKされてしまつた。

「それで昨日のつて？」

「実はさ――」

取り敢えず分からなかつた所を聞いている内に、なんて切り出そうかを考える  
どうしたもんだか、俺にできることと言えば最近買ったカメラ使つて八重樫さんが嫌  
がらせを受けているところを撮り、脅すことにより嫌がらせを無くすぐらいか……他に  
あるとすれば一緒に遊びにつれていつて元気付けるとか――その程度か……  
「遠藤君聞いてる?」

と、どうやら黙りこんでいたらしい

「ボ―としたけどちゃんと聞いてるよ。……それにしても八重樫さんは凄いよなあ 同い  
年とは思えないほど強いもんね」

「……4歳の時からやつてるから」

少しだけ表情が暗くなつた彼女の様子に、地雷踏んだ感があつたので話題をそらす

「え、えーと。八重樫さんつてゲームセンターとか娯楽施設行つたことある?」

「ゲームセンター? ……香織に誘われたけど、稽古あつたし、行つてない」「……」

八重樫さんは剣術の才能があるが、それだけでなく自分のやりたい事を犠牲にして努力した結果が今の強さに繋がつている。そりや強くなるわな

「よし、ゲームセンター行きましょ!」

さて、二つ目の案だ。息抜きに遊びに誘うとしよう

「——え?」

という事でやつて参りましたゲームセンターー！

稽古があると断ろうとした彼女を説得してなんとか連れてくることに成功した

「八重樫さんはなにや……る？」

意見を聞こうと後ろを振り向くと誰もいなかつた

あれ？ 帰つてしまわれた？ 泣いちやうよ俺？ と思つたがクレーンゲームのエリアにより、人形を眺めていた

「それ欲しいの？」

声をかけると、驚いたのかビクッとしたあとに赤面して手をわたわた動かして「ち、違うよ！」と頑張つて否定している  
え…………かわええ……

「こんな時のために戸惑っておいて良かつたわ」

この世界では俺の知つているようなゲームや漫画、アニメがなどが殆ど占めているので、買わなくとも内容は分かつていて。そのおかげで金を使わなくて済む、なので今の貯金はなんと4万円ほどあるのだ

クレーンゲームは下手なので苦戦して4000円使ってしまったが、無事にプレゼントすることができた。

その後はマリ〇カート、コインゲーム等をして、プリクラを撮つて終わつた

「あの……ごめんなさい遠藤君。お人形とストラップ取つて貰つちやつて……」「いつも八重櫻さんには剣術のアドバイスもらつてるし……その御返しだから気にしないでいいよ」

「あ……ありがとう」

一つ一つの動作すべてが可愛い、原作での凛とした表情も好きだが、この素顔もまた……ボニテのが似合つてるけど、短髪もまたいいかもな

「夕方まで遊んじやつたけど、怒られないのかな？」

「大丈夫だよ、約束する」

と言つたものの、八重櫻さんは家に近づくにつれて落ち着かない様子で、人形を抱き締める力が強くなつているのが分かる。

「おやおや遠藤君、稽古をさぼつて零とデートかい？」

門前には白髪に皺の深い顔立ちの八十代くらいに見える老人が立つてていた。この人は八重樫流の師範にして零さんの実の祖父だ

「デードではありませんよ師範、俺が無理を言つて付き合つてもらつたんです」

「ふむ、そうか……まあ、たまには息抜きも必要だらう  
零、楽しかったか？」

その問いに八重樫さんは少し戸惑つたが、祖父の優しげな表情で安心したのか「うん！」と笑顔で答えた

「遠藤君と話すことがあるから先に入つてなさい」

八重樫さんは此方をチラチラ見ながら家に入るのを戸惑つていたようだが、「また明日ね！」と声をかけると、笑顔で「じゃあね」と家中へと入つて行つた

「さて遠藤君、私が何を言いたいのか分かるかね？」

「電話をしなかつた事に關しては謝りますが、雲さんも女の子ですし可愛い物が欲しくなつたり友達と遊んだりしたいと思うんですよね……剣の才能があるのは分かっていますが、少し遊ぶ時間をあげても——」

「わかつておるわ。説得されたとはいえ、稽古を休んで息抜きに遊んでくれて嬉しかつたわい。

また、雲と遊んでやつてくれ」

どうやら怒っている訳ではないようだ。原作の親バカぶりからして、ボコボコにされたりとか思っていたが杞憂だったようだ。

「それとこれでは別だから、サボった分は明日に回しておくから覚悟しておれ」  
あ、やっぱり少し怒つてます？

# 日常は唐突に終わりを迎える彼らは…

あれから俺たちは小中と卒業し、遂に高校生になつた。

高校生になるまでにあつた重要な事といえば、中学の時、南雲君と席が隣同士だつたので、ラノベや漫画アニメの話で盛り上がり友達になつた事。今では家にお邪魔させてもらい、泊まり込みでゲームをやる仲だということだろう

そして俺の中で個人的に感動したのは登下校の道路で不良に絡まれたおばあさんを助けるために南雲が大声で謝りながら土下座していたことだ。

何故このような珍場面で感動していたかというと、このシーンは南雲に対して白崎さんが恋心を芽生えさせるきっかけになつた場面だからだ。

まあ、そんなこんなで原作を見てから一度は見てみたい所を見れて嬉しかつたと、話は戻るが高校生になつた時点での俺の年は16で、クラスごとトータスに転移させられるのは17歳になつた時だ。そろそろ準備を始めた方が良さそうだな



授業チャイムが鳴るギリギリに扉を開けて入ってくる人物をみつける。その人物が入ってきた瞬間、男子生徒の大半が舌打ちやら睨みをきかせている。女子生徒も友好的な視線はない

「よお、キモオタ！ また、徹夜でゲームか？ どうせエロゲでもしてたんだろ？」

「うわっ、キモう。エロゲで徹夜とかマジキモいじやん！」

と、南雲にダル絡みする4人衆（檜山大介ひやまだいすけ、斎藤良樹さいとう よしき、近藤礼一こんどう れいいち、中野信治なかの しんじ）がゲラ

ゲラ笑っている

原因は檜山が言つた通りキモオタではないにしろオタクだからだ。理由はそれだけではなく――

「南雲くん、おはよう！ 今日もギリギリだね。もつと早く来ようよ」

　彼女、俺の幼なじみ？ でもある白崎香織が原因だつたりする。簡単に言つてしまえば学校のマドンナである彼女が、オタクで、授業では大抵寝ていたりする不眞面目な生徒扱いの彼が話しかけて貰つてるのが気に入らないのだ

　南雲は、趣味の合間に人生、を座右の銘にしているため、授業よりも趣味優先になつてゐるため、白崎に注意されたとしても態度を変えないのでそれもあるのだろう

おつと、そういえば一時限目は現代文だつたかな？

「南雲君。おはよう毎日大変ね」

「香織、また彼の世話を焼いているのか？」  
全く、本当に香織は優しいな

「全くだぜ、そんなやる気のないヤツにやあ何を言つても無駄と思うけどなあ」

おつと三人衆もお出ましのようだ。このまま聞いてるのも面白いが、後すこしで鐘がなるので挨拶しにいこう

「おはよう南雲、八重樫さん、白崎さん、坂上、天之河」

その声に全員がギミツとする

いたのか!?

いたよ！ はあまあいいや時間だから席に戻つた方がいいぞ」

俺は心を少し傷つけながらも南雲を助けることに成功したのだった グスン

4時限目が終了し、背筋を伸ばすとポキポキと気持ちのいい音が鳴る

「弁当袋を取り出して立ち上がると、未だに寝ている南雲の机に向かって歩き出す  
「ＺＺＺＺ」

隣に来たのに何時もの事ながら誰も反応しない

バチンッ

「いっ?! たあああ！」

決して殆ど座つてゐるのに俺だけが立つてゐる状況に誰も気が付かなかつた事で、イラ  
ついてデコピンしたわけではない 本当だ

「授業は終わつたぞ南雲?」

「わざわざ起こしてくれてありがとう遠藤君<sup>親友</sup>」

お互いに、はつ：と笑うと10秒でチャージできちゃう定番のお昼を取り出すると、乾  
杯するかのようにコツンと合わせ……

——じゆるるるる、きゅぽん！

早々にお昼ご飯を食べ終えた俺達は、家から互いに貸していいたラノベを出し合う  
さて、では互いに感想を言い合うか……と、目をキラソツとさせたが、二人のお樂し

みタイムは終わることになる

「南雲くん。珍しいね、教室にいるの。お弁当? よかつたら一緒にどうかな?」

「あ〜誘つてくれてありがとう、白崎さん。でも、もう食べ終わったから天之河君達と食

べたらどうかな?」

南雲が必死に抵抗して<sup>時間稼ぎ</sup>いるのを横目に、去らばだ友よ……と立ち上がり席に戻<sup>rガ</sup>シツ

「ん?」

おかしいな? デフォルトスキルのステルス遠藤を発動している俺を捉えるだと?!

「香織の言うとおりだわ……そんなんじや今日の手合させ、私に負けちゃうわよ?」

あれれ? こういう時ばかり影の薄さが通じないのズル過ぎない?

「大丈夫だ問題ない」

「それって大丈夫じゃない時のセリフよね?」

そう言い、ため息をついた八重樫は弁当を一つ差し出してくる

「?え、作ってきてくれた感じのあれ?」

「そ、そ、うよ……」

「助かるわ。ありがとう」

なんてラブコメでありそなことをしていると南雲と白崎の会話に割り込む声で視線を弁当から目の前に移す。

「香織。こっちで一緒に食べよう。南雲はまだ寝足りないみたいだしさ。せつかくの香

織の美味しい手料理を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよ?」

爽やかにそう言つてのけた天之河だったが、

「え? なんで光輝くんの許しがいるの?」

と返されてしまい、場が少し凍りつく

俺と八重樫はと言うと、

「ブフツ」

耐えきれず笑つてしまつた。

八重樫が天之河を止めているのを見ていたが、少し気になつたので弁当箱に視線を移し、開けようとする。

すると突然、足元に純白に輝く魔方陣らしきものが現れた

その魔方陣は徐々に輝きを増し、一気に教室全体を満たすほどの大きさに拡大した。

驚きの悲鳴と、愛子先生の「皆! 教室から出て!」という叫びと、カツと爆発したように輝いたのは同時に

あとに残つたのは食べかけの弁当に、錯乱する箸やペットボトル、教科書などで、その場にいた人間だけが姿を消していた

# 第一章：幕開け

## 異世界召喚

さて、遂に原作開始のようだ。漫画や小説などで思い浮かべると実際に目にするのでは全くの別物のようだ。上手く言い表せないけどな

目の前に広がるのは縦横十メートルはありそうな巨大な壁画。後光を背負い長い金髪を靡かせうつすらと微笑む中世的な顔立ちの人物が描かれている

その背景には草原や泉、山々が描かれ、そちらを包み込むかのように、その人物は両手を広げている

おそらくだが、今回、俺たちをこの世界に呼んだ犯人であるエヒトが描かれている人物なのだろう

建物の事は後回しにして、クラスメイト以外の周囲の人間を観察する

まず、俺たちを取り囮むようにして一人一人が祈りを捧げるよう跪き、両手を胸の前で組んでいる人達

その中で一際目立つのが、豪奢で煌びやかな衣装を纏い、高さ三十センチ位ありそ

な細かい意匠の凝らされた烏帽子のような物を被つている七十代くらいの老人で、進み出てきた

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシュタル・ランゴバルドと申す者。宜しくお願ひ致しますぞ」

イシュタルと名乗った老人は好好爺然とした微笑みを見せた。

↓↓↓↓↓↓↓

場所は変わつて十メートル以上ありそうなテーブルが幾つも並んだ大広間に案内された

しかし、この状況で誰もたいして騒がないつて所は流石カリスマ持つてるだけあるわ  
残念勇者天之河

そう、この状況でクラスメイト達が騒いでいないのは、認識が追い付いてない者も勿論いるが、他は天之河が持ち前のリーダーシップを働かせて、皆を落ち着かせて誘導したからだ

席に着席すると、絶妙なタイミングでパチモンとは違う、異世界の…本物のメイドが飲み物を注いでいってくれる。そんな美少女メイドを大半の男子が凝視し、その光景に女子は絶対零度の視線を向けていた

南雲も俺も男の子で、思春期だ。側に来たメイドを凝視……することはなく、南雲は白崎からの笑つていらない笑みを受け、俺は八重樫からのジト目を頂き、二人してメイドから目を反らした。メイド服姿のポニテ少女だったので、少し悔やんではいると南雲はビクビクしながら話しかけてきた

「え、遠藤君、これは…」

「ああ、あれだな…円卓の席っぽいよなあ席の配置とか…」

俺の発言に少しづルツと肩を落とす南雲

「いや…まあそうなんだけど、そうじゃなくて――」

南雲が続きを話す前に残念ながらイシュタルの説明が始まってしまった。

イシュタルの話を要約するところだ。

・この世界はトータスと呼ばれている場所で、種族は大きく分けて3つで人間族、魔人族、亜人族である

・人間族は北一帯、魔人族は南一帯、亜人族は東の巨大な樹海のなかで生きているら

しい

・魔人族と人間族は何百年も戦争を続いている

・魔物と呼ばれる通常の野生生物が魔力を取り入れ変質した異形の存在で、それぞれ強力な種族固有の魔法が使えるらしく強力で凶悪な害獸

・魔人族は人よりも数が少ないが、個人の持つ力が強く最近では数多くの魔物を使役してきているせいで、人間の数の有利が覆りつつあるとのこと

まあ、此処までは何度も原作読んでいた俺としてはなんとか覚えている。そんな事よりも今後について考えなければいけないだろう

南雲が：・ 親友が奈落の底に落ちていくのを防ぐか否か、奈落の底に落ちなければ未来は確定している。

俺たちは全員死ぬ。南雲のあの兵器たちが必要なのだ。

そこまで考えた所で、愛子先生の抗議の声が上がる

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようつてことでしょ！ そんなの許しません！」

ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！  
きっと、ご家族も心配しているはずです！ あなた達のしていることはただの誘拐で

すよ！」

生きて帰るために親友を死地に送るか、親友を助けて全員が死亡する b a d e n d 展開かを悩んでいたところに愛子先生がぶりぶり怒っているのを見て、頬が緩んだ

「お気持ちをお察しします。しかし…あなたの方の帰還は現状では不可能です」

先程までぶりぶり怒っていた先生は勿論、その先生を見て「かわいいなあ先生」とかほんわかしていたクラスメイトも顔を青ざめさせ、誰もが何を言つたのか分からないという表情でイシュタルを見る

「ふ、不可能つて… ど、どういうことですか!? 喚べたのなら返せるでしょう!」

誰もが衝撃の事実に、何も言えなくなっているが流石は先生、イシュタルに説明を求める

「先ほど言つたように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですな」

流石の先生でも、そんな事をイシュタルに言われてしまい、脱力したように椅子に腰を落とす

それを、きつかけに生徒たちは口々に騒ぎ始めた

「嘘だろ 帰れないってなんなんだよおかしいだろ！」

「そんなのいやよ！ なんでもいいから帰してよお！」

「戦争なんて冗談じやねえ！ やるわけねえだろ！」

「なんで、どうして…」

パニックになる同級生たち

隣を見れば南雲も多少は平静を保っていた。オタクであるが故にライトイノベルでこのような状況のは多々ある。まあ、一番最悪な展開つてわけじやないからな

天之河は立ち上がりと、机をバンッと叩いて注目を集めた

「皆、ここでイシュタルさんに文句を言つても意味がない。彼にだつてどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知つて、放つておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシュタルさん？ どうですか？」

「そうですな。エヒト様も救世主の願いを無下にはしますまい」

天之河の問い合わせに対してイシュタルは、フム…と悩む仕草をすると、そう答えた  
「俺達には大きな力があるんですよね？ ここに来てから妙に力が漲っている感じがし

ます」

「ええ、そうです。ざつと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持つていると  
考えていいでしような」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も  
救つてみせる!!」

ギュッと握り拳を作りそう宣言する光輝。無駄に歯がキラリと光る。

さて、勇者（笑）のカリスマは効果は發揮し、さつきまで絶望の表情だつた生徒たちは活気と冷静さを取り戻し始めた。女子生徒は頬を赤らめ、熱っぽい視線を送つている。目がハートに見えたのは気のせいではないだろう

「へっ、お前ならそう言うと思つたぜ。お前一人じや心配だからな。俺もやるぜ？」

「龍太郎…」

この流れは八重樫、白崎という原作通りの流れで決定かな……と思つたのだが、八重樺が此方を心配そうな表情で見ているのが目に入った。

「はあ、仕方ない…」

「郷に入つては郷に従えつて言うし、自分にできることをやるよ」

「遠藤……」

「……そうね今のところ、それしかないわよね。私もやるわ」

「雲……」

「え、えっと、雲ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」

「香織……」

原作通りとはいかななかつたが、オロオロと「ダメですよ」と困った顔をした先生を尻目に俺たちはクラス全員で戦争に参加することが決まった

# ステータスプレート

さて、全員が戦争に参加することが決定したわけだが、元は平和主義の日本の高校生だ。いきなり魔物と戦うのは不可能つて事になり、聖教教会本山がある「神山」の麓の「ハイリヒ王国」に向かうこととなつた

途中の綺麗な景色に全員が感嘆の声をあげ、産まれて初めて見る魔法に釘付けとなつてゐる

地上が見えてきた。眼下には大きな町、国が見える。  
山肌からせり出すように建築された巨大な城と放射状に広がる城下町。  
ハイリヒ王国の王都だ。

台座は、王宮と空中回廊で繋がつていて高い塔の屋上に続いているようだ。深い深呼吸をする。今更ながら異世界に転生したのだと自覚できたようだ。手を握りしめ、これから起ころるであろう事についての覚悟を決めるのだつた



王宮に着くと、俺たちは真っ直ぐに玉座の間に案内された

教会も豪華だつたが、それに負けないくらいの煌びやかな内装だつた

「お、いた。： 南雲」

南雲を探す為に歩くスピードを落とす…と、最後尾をこそそこ付いていくのが見えたので話しかける

「！： 遠藤君か、どうしたの？」

「今のところの要注意人物について話し合おうかなって」

「イシュタルさんとか？」 コソコソ

「そうそう、というかイシュタルだけじゃなくて教会 자체が危ないかもなあ…てね。ま、只の憶測だし気にしなくていいよー」 コソコソ

少し離れていたので急ぎ足で列を追うと、巨大な両開きの扉を次々と通つていってるところだつた

中に入ると、玉座の前で立ち上がつて待つている国王らしい人物と王妃のような女性、リリアーナ、ランデル、甲冑や軍服らしき衣装を纏つた人達や文官らしい人たちが数十人も並んでいる

イシュタルが手を差し出すと、国王はその手をとり、軽く触れない程度のキスをした

その後は自己紹介を受けた

リリアーナとランデルは覚えていたが、どうやら対して目立たないので国王と王妃の名前を忘れていたようだ

後は、メルド団長やその他の高い地位にある者の紹介がされていたがメルド以外に興味ないし覚える必要がないかなと、流した

その後、晩餐会が開かれ異世界料理を堪能することになる。見た目は地球の洋食と同じようなものだった

ピンク色の怪しいソースも、虹色に輝く飲み物もあつたが、とても美味しかった

晩餐が終わつて解散になると、各自に一室ずつ与えられた部屋に案内された。無駄に豪華だなどか考へる前に、眠気が勝つたのか、ベッドにぶつ倒れるように眠つた

…………

翌日から早速、訓練と座学が始まつた。

俺と南雲は集合の10分前には並んでいた。時間になると生徒全員が到着したようで、メルド団長が確認する

「全員いるか！」

「そういうや遠藤は？」

「ほんとだ」

「まだ来てない？」

「遠藤がまだ寝ているかもしけん、少し部屋のようすを」「す、すいませ～ん！ 此処にいますよ」

「ぬ、いたのか。これはすまない」

あ、これは久しぶりに枕に顔を押し付けて泣き叫ぶやつや  
ていうか、お前らが集合する前からいたんだから気付けよ！

メルドは、ウオッホンと、咳払いをすると俺たちに銀色のプレート… ステータスカードを配つた

さて、遠藤の初期値はどのぐらいなのかな？ と少しづくづくしていると、メルド団長が説明を始める

「よし、全員に配り終わつたな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれてい  
る。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼  
のある身分証明でもある。これがあれば迷子になつても平氣だからな、無くすなよ？」

「プレートの一面に魔方陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作つて魔方陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所有者が登録される。」ステータスオープン、と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだをああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類いだ」

この程度の説明は知つてるので、さつさと言われた通りに指に針を少しだけ刺して血を垂らしてこつそりと、ステータスオープン、と言つた一瞬淡く輝くと文字が表示された



遠藤浩介 17歳 男 レベル：1

天職：暗殺者

筋力：100

体力：120

耐性：60

敏捷：180

魔力：30

魔耐：30

技能：暗殺術・気配操作・影舞・直感・言語理解



へえ、これが初期値か… 筋力と体力、敏捷が高いな。勇者（笑）がオール100だ  
として勝つてるのがこの2つか。

一人プレートとにらめっこをしていると、説明が終わつたのか全員がステータスを見  
ている

「南雲はどうだつたんだ？」

知つてはいるが、確認の意味を込めて一応みせてもらう



南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：鍊成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：鍊成・言語理解



「お、鍊成師：か、鋼錬<sup>はがれん</sup>みたいなのか？」

「それは鍊金術師だから違うと思うけど、というか遠藤君凄いね？ このステータス」

「俺なんかより多分、天之河の方がヤバイだろ天職が勇者だつたりしてな」

「確かに天之河君なら勇者でチート技能持つてそうだよね」

勇者様（笑）  
「一人で天之河について話していると、メルドの一言で南雲が凍りつく

「後は… 各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。

まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！ 全く羨ましい限りだ！  
あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきやならんから  
な」

「ぐふつ」

「南雲は心に100のダメージを受けた」

「はあ、こういうのって俺TUEEEだと思ったのに」

ふざけて言つてみたが予想以上に落ち込んでいるようだ

「落ち込むのは早いって、こういう話でのお決まりを思い出してくださいよ」

「ピンチに陥ると、覚醒するゝ的なやつ？」

「そうそう、諦めんなつて」

話し合っていると、メルドに「二人も列に並んで報告しに来てくれ」と言われて初めてクラスメイト達が一列に並んでいることに気がついた。

「次は… 遠藤か。ではプレートを見せてくれ」

「はい」

返事をしてプレートを手渡す

「ほう、暗殺者か… 素質はあると思つていたが」

おつと影が薄いからかな？ そうなのかな？ ケンカ売ってる？ とか思つたが、頑張つて表情をつくり、「ありがとうございます」と返した

ついに南雲の順番になり、メルドは先程までのホクホク顔から一転して、「うん？」と笑顔のまま固まり、「見間違いかしらん？」と目をゴシゴシしたり、プレートを叩いたり、光にかざしたりした後に微妙そうな表情で南雲にプレートを返した

「ああ、その、なんだ。鍊成師というのは、まあ、言つてみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときは便利だとか…」

と、歯切れ悪く説明するメルド

そこへ、南雲のことをよく思つていない… 目の敵にしている者の筆頭である檜山が、ニヤニヤしながら近づいてくる

これから始まるのは原作通り、檜山が南雲をボロクソに言う胸くそ展開だ。  
しかしまあ、親友をボロクソに言うんなら… それなりの対価が必要だろう  
俺は息を潜め、何を面白いのかニヤニヤしている檜山の足を払う

「なつ… おぶつ！」

盛大にすっ転んで、顔面を地面にぶつける檜山

「何やつてるんだよ！」

と、クラスの殆どが何もないところでひとりでに転んだ檜山を笑つてゐる。勿論おれ

も

「く、おい南雲！　お前そんな非戦闘系でどうやつて戦うんだ？　メルドさん、鍊成師つて珍しいんつか？」

「：いや、鍛冶職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っていたな」「おいおい、南雲！」お前、そんなんに戦えるわけ？」

檜山が、ウザイ感じでハジメと肩を組む。周りの生徒達——特に男子はニヤニヤと嗤わらつてている。

天之河くうくん！　ここに仲間を苛めている人がいるよお！　的な感じで勇者（笑）を見るが、顔をしかめているが助ける気はないようだ

「さあ、やつてみないと分からぬかな」

「じゃあさ、ちょっとステータス見せてみろよ。天職がショボイ分ステータスは高いんだよなあ～？」

本当に嫌な性格をしている。メルドの表情から結果を察している筈なのにニヤニヤ気持ち悪い笑みで手を差し出している。他三人もギヤハハ！　と笑いながらまくした

てて いる

白崎さんや八重樫さんなどは不快げに眉をひそめている。

南雲は投げやり気味にプレートを渡す。

ハジメのプレートの内容を見て、檜山はわざとらしく爆笑した。そして、斎藤達取り巻きに投げ渡し内容を見た他の連中も爆笑なり失笑なりをしていく。

「ぶつはははつゝ、なんだこれ！ 完全に一般人じやねえか！」

「ぎやははははゝ、むしろ平均が10なんだから、場合によつちやその辺の子供より弱いか  
もなゝ」

「ヒアハハハヽ、無理無理！ 直ぐ死ぬつてコイツ！ 肉壁にもならねえよ！」  
「くふふつあつはつはつは！」

俺はわざとらしく笑い、此方に意識を向ける。

「なんだよ遠藤？ 流石の大親友様も、こんなの見たら失望しちやうのか？」  
何を勘違いしたのか笑みを深める檜山に近づく

「何勘違いしてんだか、俺は…」

と、先ほどのように八重樫のお祖父さんである鶯三<sup>しゆうぞう</sup>さんに教えて貰った技術を使って転ばす

「さつきまでこんな醜態さらしてた奴が恥ずかしさのあまり人を馬鹿にして必死に氣を紛らわせようとしてるのが面白くてな」

「ほい、災難だつたな」

呆然としてる三人を無視してプレートをひつたくつて南雲に返す

一部の人人が笑いをこらえている。おつと幼なじみ（仮）さんと、ポニーテールさんは笑いすぎると可愛い顔が台無しになつちやうぞ！

「て、てめえ！　この野郎つ」

殴りかかろうとしたが、メルドに止められその場は解散になつた

運命の日、  
前日

この世界に来てから二週間が経つた。

八重櫻との危険のない模造剣を使つた打ち合いを終え、八重櫻が少し席をはずしたすきにステータスプレートを取り出す

遠藤浩介 17歳 男 レベル8

軒轅：暗殺者

筋力 : 148

卷之三

敬業

魔力  
：  
7  
8

魔耐：78

解 技能：暗殺術【+投擲術】・【+暗器術】・氣配操作【+氣配遮断】・影舞・直感・言語理

この数週間で、もう派生技能が出てきてしまっている異常な事態に頭痛がして頭を押さえる

何もおかしい事はしていないはずだ……と、記憶をたどつてみると

「十気配遮断」の派生技能にいたつてはステータスプレートをもらつた翌日には現れていたので、俺つてば影薄いですもんねーと諦めた

手裏剣のような物が手に入つた。

他の生徒が危なくなつたら敵を怯ませるためである。

投げる練習をしていたら、いつの間にか派生技能として、「+投擲術」が現れており、手裏剣とかを持ち歩いていると、「+暗器術」が追加されていた

うん、意外に身に覚えがあつたが同時にそんな事で派生技能が発現するわけねえだろ！と思つた

しかし、やたらと頭をちらつくのはグツとサムズアップする老人で、それを思い出すと、四つん這いになつて拳を地面に叩きつける

「あのクソジジイイイ〜!!」

突然叫び出した俺に、周りはいつも通り「あ、遠藤君いたんだ…」とか「びっくりした〜遠藤いたのか…」と反応していた  
いつも通りなのだが、少し傷付いたのでもう一度地面を殴り、ゴロンと前転するよう

に仰向ける

「どうしたのよ浩介？」

ボーとしていると、ポニーテールを揺らして俺の顔を覗きこんでくる人物がいた。どうやら戻ってきたみたいだ

「…いや、不満の種である人物を思い出して叫んでただけだ」

上体を起こしながら俺はそう答えた

「なによそれ」

ふふつ、と可愛く笑つて八重樫は隣に座り、模造剣を置いた

「つーか天之河のやつ、成長早すぎだろ…レベル10で全能力値が200だぞ？」  
話すネタが思い付かず、天之河の話を振る

「そうね、光輝も凄いけど…浩介も負けずに…す、凄いと思うわ」

頬を少し赤らめながら、そう言つて褒めてくれた八重樫に  
 「お褒めに預り光栄ですつと、はあ…ちょっと懲りないアイツ達を転ばしてくるわ」  
 お世辞でも嬉しいのでお礼を言うと、遠くに南雲を蹴飛ばしてちよつかいをかける4  
 人組を見つけ、八重樫に断つて転ばせるために歩き出す

訓練場をでて、人気の無さそうな場所に向かうと、五人を見つけたので乱入する

「ここに風撃を望mグホッ?!」

散々ボコボコにした後、檜山が炎弾を撃つが、ギリギリで南雲が避け、避けたのを見  
 計らつて斎藤が魔法を放とうとするが、寸前で盛大にずつこけた

「なつ?!」

「懲りもせずによくやるなよな？」 お前ら

その声に四人は憤怒の表情を浮かべ、南雲はふうと息をつく

「てめえ！」

「大丈夫かよ南雲？ つたく面倒な連中に目をつけられて災難だな：いやホントに」

「あはは、いつもありがとう遠藤君」

手を貸して起き上がらせると、四人と相対する。

「南雲のついでにお前も訓練つけてやるよ」

邪魔をされてか、青筋を浮かべて剣を構える檜山たち

「何やつてるの!?」

今にも飛びかかりそうな檜山だつたが、怒りに満ちた白崎さんの声が響くとビクリッと直立になつた

「いや、誤解しないで欲しいんだけど、俺達、南雲の特訓に付き合つてただけで……」

と弁明しようとしたが、南雲の様子を見て「南雲君！」と駆け寄る。檜山達のことは頭から消えているようだ

「特訓にして、随分と一方的みたいだけど？」浩介が止めてなかつたらもつと酷いことをしていたんじやないかしら？」

「いや、それは……」

目を泳がせて必死に言い訳を考えているようだが……

「言い訳はいい。いくら南雲が戦闘に向かないからって、同じクラスの仲間だ。二度とこういうことはするべきじゃない」

「くつだらねえことする暇があるなら、自分を鍛えろつての」

二人からのお説教の言葉を受け、愛想笑いをしながら逃げていった

「ふう、ありがとな八重樫：四人は流石に負けちやうかもしれないからな」

「どつちかつていうと、貴方の心配よりも四人がベッドで息絶え絶えになるのを防いだって方が正しいかもしないわね」

そんな事を気にしながら、わざとではないが天之河の呆れたセリフを無視して

「もう訓練が始まるから行こうぜ」

と声をかける。俺の言葉に不満そうな奴が一人いるが、華麗にスルーして、訓練施設に戻るのだつた

~~~~~

いつも通りの訓練が終わると、メルド団長から呼び止めがかかつた。いつもなら自由時間で、八重櫻と剣を打ち合うのだが、今日は違うようだ

「明日から、実戦訓練の一環として【オルクス大迷宮】へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思つてくれ！」まあ、要するに気合い入れろってことだ！ 今日はゆっくり休めよ！ では解散

!

# トラップ、それは絶望の始まりを告げる○○○

俺たちは今、「オルクス大迷宮」へと来ている。一番重要な場所なのだが、昨日あつた事が忘れられずに集中力を欠いていた

時を遡ること数時間前

風呂に入つた俺は、明日の為にクナイ擬きや手裏剣擬きを磨いていた。「オルクス大迷宮」でのことは覚悟がきまつた。しかし緊張しているのか眠れず、こうして意味もなく武器を磨いて気を紛らわせていた

コン コン

扉を叩く音が聞こえたが、隣の南雲の部屋だろう。きっと白崎が南雲と密会するため扉を叩いているのだ

コン コン

おいおい南雲！　はやく出てやれよ！　白崎さんをあんな格好で廊下に放置とか酷すぎるぞ？

コンコンコンコンコンコンコン……

扉を高速でコンコンした後に、首謀者の声がした

「開けてくれないかしら？ 浩介君？」

どうやら隣ではなく、俺の部屋に用事があるようだつた。扉を開けると、ネグリジエにカーデイガンを羽織つただけの八重樫が立つていた

「え……うそん」

呆然とした表情で呟くと、急いで手を掴み部屋に招き入れる

「ど、どうしたんだ、そんな格好で」

緊張していることを悟られないように注意しながら紅茶を注ぐと、質問をする

「その、明日の実戦訓練なんだけど、嫌なこと思い出しちやつたから、寂しくなつちやつて」

いつもの凜とした雰囲気はなく、俺の目の前にいたのは弱々しい女の子の八重樫零素

だつた

「——そうか……まあ、だいたい予想はつくが……王都外での魔物を倒す訓練の時でも思ひ出したか？」

「……」

返事はないが、代わりに頷きで返してくれたので当たりのようだ

「確かに初めて魔物を斬つたときは気持ち悪い感触だつたし、罪悪感も少なからずあつた……でもさ、俺は自分が生きるためなんだから仕方がないって割りきつたよ」

「……」

「その考えを八重樫に強制するつもりはない……あの時言つたように俺は自分にできることを全力でやるだけだ。

言つちやあ悪いが、この世界の奴らには対して、さほど関心がない。可哀想だとは思うがそれだけだ……俺は自分とクラスメイト、それに先生を守るので精一杯だからな。  
魔物<sup>てき</sup>に躊躇するだけ無駄だ」

格好つけたようなつけていないようなセリフを言つた後、恥ずかしくなつて紅茶を一気に飲む

「やつぱり浩介は格好良いわね……よし！」

ボーと、したあとに何かを決心したようで八重樫は俺の手を取ると、自分の頭に置いた

「何してんの？」

突然のことでの目を丸くしている俺を尻目に数秒後、ボソッと何かを言つて「——おやすみ浩介！」と出ていった。

「いや、本当に……あーチクショウ……決心鈍るから止めてくれよ」

「浩介！ 大丈夫か？」

目の前には心配した様子のメルド、そして仲間たちクラスマイト

「すみません、ボーとしてました」

「無理そ うな ら…… 「ああいえ、大丈夫です」 そ、そ うか」

意識を切り替えて目の前の小型の魔物と相対し、気配遮断技能で見失っている隙に一刀両断にし、クナイ擬きや手裏剣擬きで敵を怯ませながら反撃をさせる暇なく倒しきつた

「よ、よし全員終わつたか…… 次はいよいよ20階層で訓練だ！ 最後だからといつて  
氣を抜くなよ！」

「はい！」と全員が元気に返事をして、先に進む  
「遠藤君、ボーとしてたけど何かあつた？」

心配してくれたのか、南雲が駆け寄ってきた

「いや、昨日緊張しすぎて眠るのが遅くなつてな」

勿論だが嘘だ。あの後、いろいろと準備をしていただけだ

「へ、へえ」

昨日という単語で南雲の様子が少しドギマギになつた。

「そつちこそ昨日は何かあつたのか？」

「い、いや？ な、何にもなかつたよ？」

目を泳がせて慌てて南雲に追い討ちをかけようとしたが、メルドの「遠藤、お前も前に出ろ！」との声に中断させられてしまつた

つ——おのれメルドお！

「擬態しているぞ！ 周りをよく注意しておけ！」

渋々と前に出て前衛組に合流すると、敵を見つけたメルドが大声で忠告してくれた。  
「頑張りましょ……浩介」

「おう」

さてと……確かに咆哮をして前衛を一時的に麻痺せらるんだつたか

俺は後ろに一気に下がる。八重樫はいきなり下がつた俺に驚きながらも、持ち直して剣を構える

それと同時に咆哮が発せられて前衛組は硬直してしまい、その隙にロックマウントと

いうゴリラ型の魔物は、岩を投擲……否、それは岩ではなく後衛組にルパンダイブで突つ込むロツクマウントだつた

それを俺は技能を使つて壁を走り、飛んでいるロツクマウントの首を落とした  
さきほどまで、「いやあああ！ 変態いい」とか騒いでいた白崎達は別の意味で  
「ヒイツ?!」と悲鳴をあげた

「貴様、よくも香織達を、許さない！」

白崎たちの悲鳴を勘違いした天之河が怒りをあらわにすると聖剣が輝き出す

「万翔羽ばたき、天へと至れ——」 天翔閃！』

「あつ、こら、馬鹿者！」

メルドの静止を聞かずに発動したその技は、ロツクマウントを真ツバ一ツにし、奥の壁  
を破壊し尽くした

「殺りきつたぜ！」 と清々しい顔をした天之河にメルドは近付いていき、拳骨をした  
「へぶう！」

「この馬鹿者が。気持ちはわかるがな、こんな狭いところで使う技じやないだろうが！  
崩落でもしたらどうするんだ！」

メルドの言葉に「うつ」と声を詰まらせ、バツが悪そうに謝罪をした天之河。そんな  
落ち込んだ様子の彼を後衛組が近づいてきて慰める

ふと、白崎が例の罠であるグラント鉱石を指さす

そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。その美しさに香織を含め女子達は夢見るよう、うつとりした表情になつた。

「ほお～、あれはグラント鉱石だな。大きさも中々だ。珍しいこの鉱石は加工して指輪・イヤリング・ペンダントなどにして贈ると大変喜ばれるらしい。求婚の際に選ばれる宝石としても人気だ」

「素敵……」

と、白崎がチラツと南雲の方に視線を向けていた。それをニヤニヤ見守る俺だったが、隣にいる八重樫と目が合うと反らされてしまつた。何故に？

「だったら俺らで回収しようぜ！」

そう言つてグラント鉱石に向けてヒヨイヒヨイと壁を登つていく

「こら！ 勝手なことをするな！ 安全確認もまだなんだぞ！」

檜山はその注意を聞いてないフリをして無視し、どんどん登つていく  
トラップがないか探つていた団員は顔を青ざめさせて叫んだ

「団長！ ト ラ ッ プ です！」

しかし、騎士団員の警告もむなしく、檜山は鉱石に触れてしまった

その瞬間、部屋全体に魔方陣が広がった。魔方陣は徐々に白く光輝いていく  
「くつ、撤退だ！ この部屋から急いで出ろ！」

メルドの叫び声もむなしく、誰一人として間に合わず、一瞬の浮遊感の後、地面に叩  
きつけられた

その場所は石造りの橋の上で、俺達の位置はちょうど中間で、両サイドには奥に続く

通路と上階への階段が見える

奥の通路からも魔方陣が出現し、ベヒモスが現れた

# ベヒモス

ベヒモスが現れた反対側からはトラウムソルジャーと呼ばれる骨格だけの体で、剣を携えた魔物が数百体に上る数が現れる。だがその数は未だに増え続けている

メルドはベヒモスの叫びで正気に戻ったのか、部下に指示を出す

俺はもうすでにトラウムソルジャーへと駆け出していた。どうやら俺の気配遮断の技能は不具合なく発揮しているようで、気が付いてなかつた目の前の敵を難なく倒す「突っ込みすぎるなよ！ 困まれたら終わりだ」

後ろからアランさんと他の仲間が来た

「大丈夫です。俺は自動ドアに三回無視されてるほど影が薄いんで」

「？ お、おうそうか！ 期待してるぞ！」

自動ドアがなんなのか分かつていないうだつたが、期待してるぞなんて言われてしまつたので、その期待に応えることにする

まず、しつかりと全体を見る。右奥にいる女の子の後ろからトラウムソルジャーが斬りかかるうとしているので、クナイ擬きを投擲して援護する

相手が狙つてこない分、やりやすく簡単に数を減らすことができた。しかしそれは自

分の周りだけで、奥にはうじやうじやいる

すると再度咆哮が聞こえ、ベヒモスとメルド達の障壁がぶつかり合う  
その衝撃で、橋は大きく揺れて転倒する者も現れる

前からも後ろからも迫り来る敵に殆どの者がパニックに陥っている。一人の女の子  
が転んでしまい、目の前にはトラウムソルジャーが剣を振りかぶり……

「残念、させねえよ」

その剣を受け止めると、流れるように腕を斬り落として最後に首を跳ねる

「大丈夫か？」

「は、はいい！」

「よし、コイツ等は冷静に対処すれば簡単に倒せる敵だ。危なくなつても援護するから  
頑張れよ！」

そういう残して、鍊成中の南雲の元に向かう

「さて、南雲……どうする？」

「みんなパニックになつて、このままだといずれ死者が……」

「そうだな……そして残念ながらあれを一掃できる火力は俺にはない

だが、そんな圧倒的火力で道を開くリーダーが一人いるよな？」

「そうか、天之河くん！」

南雲は未だに駄々をこねている天之河の元へ走つていく

俺は此方の相手をしますか

「天之河くん！」

「なつ、南雲?!」

「南雲くん!?」

驚いている一同に南雲は必死の形相でまくし立てる

「早く撤退を！　皆のところに！　君がいないと！　早く！」

「いきなりなんなんだ？　それより、なんでこんな所にいるんだ！　ここは君がいていい場所じゃない！　ここは俺達に任せて——」

「そんなこと言つている場合かつ！」

ハジメを言外に戦力外だと告げて撤退するよう促そうとした光輝の言葉を遮つて、  
南雲は今までにない乱暴な口調で怒鳴り返した。

「あれが見えないの!? みんなパニックになつてる! リーダーがいないからだ!」

光輝の胸ぐらを掴みながら指を差す南雲。

その方向にはトラウムソルジャーに囲まれ右往左往しているクラスメイト達がいた。たまに首が飛んだり、斬られているが

「一撃で切り抜ける力が必要なんだ! 皆の恐怖を吹き飛ばす力が! それが出来るのはリーダーの天之河くんだけでしょ! 前ばかり見てないで後ろもちゃんと見て!」

呆然と、混乱に陥り怒号と悲鳴を上げるクラスメイトを見る光輝は、ぶんぶんと頭を振るとハジメに頷いた。

メルドに撤退することを言おうとした瞬間、遂に障壁は碎け散つた

トラウムソルジャーの相手をしていた俺だが、凄まじい衝撃にベヒモスの方に目を向ける

障壁は碎け散り、メルドたち護衛は吹き飛ばされたのか横たわっている

八重櫻と坂上が時間を稼ぎ、天之河が”神威”を放つが、全くダメージを受けていな

いベヒモス

ベヒモスは天之河達を睨むと、頭を上げる。頭の角がキイーーという甲高い音をたてながら赤熱化していく。

俺は全力で駆け、三人をベヒモスから遠ざけると同時に、ヘッドアタックをしてきたその衝撃に近くにいた者も、遠ざかつた俺たちすらも吹き飛んだ

ベヒモスはめり込んだ頭を抜き出そうと必死に踏ん張つている

少し足を捻つてしまつたが問題ないと判断し、立ち上がると南雲とメルドが話し合つていた

しばらくすると、メルド団長が距離を取り、南雲が鍊成で時間を稼ぐ  
天之河が大技で敵を凧ぎ払い、道ができた。その隙に階段前を陣取り、南雲が鍊成を中止した途端、メルド団長の号令で魔法が一気に放たれた。

此方に南雲が走つてくるが、悪意によつて誘導された魔法はきれいに南雲に当たる。

絶望は続き、三度目の赤熱化を行つたベヒーモスは標的を南雲に定め、突進する。それをなんとか避けられたものの、度重なる衝撃に橋が耐えられなくなつたようで、崩落し始める。ベヒーモスはもちろん、南雲も落ちるだろう

白崎さんは八重樫に止められた。しかし俺の派生技能である気配遮断があるためか、誰も気づくことなく止めてくることはない

崩れかけているが、橋の断片にしがみついている南雲の手を取つた。しかし、足場が全て壊れ俺と南雲は奈落へと落ちていった。

落ちながら自分のした偽善者行為に笑みを浮かべる

結局俺は南雲を助けず、奈落に落ちて貰うこととした。しかしそれでは後味が悪いので絶対に助からぬ所に助けに行き、一緒に落ちる

他の人には俺がやつた事が理解できないだろう。だが、南雲が奈落に落ちることを知つていながら行動を起こさなかつたんだ。これぐらいしないと割りに合わないだろ死んだらそれまで、生きてたら——親友と一緒に怪物生活でもできればいいな

# 奈落での再会と怪物たちの目覚め

「うつ」

と呻き声を上げて俺は目を覚ました

未だ完全に意識が覚醒しないながらも、痛む全身に鞭を打ち上体を起こす  
「痛つ、そうか… 助かつたのか」

全身の身体が痛むが、それどころではない。周りの状況を確認する

周りは薄暗いがなんの石かは分からぬがそのおかげで、何も見えないという程でもない。どうやつて助かつたのかは分からぬが、自分は悪運が強かつたのだと思い込むこととした

取り敢えずはどうするか… 南雲は何処にいるか分からぬが、今頃は爪熊に襲われていたりするのかもしれないな

「辺りを散策しよう…」

今の俺には何もできることはない。戦うとしても短刀とクナイ擬きが3つ、手裏剣擬

きが4つしかない。一度は戦闘できるだろうが、戦いを避けて行こう

~~~~~

どのぐらい時間が経つたんだろうか、直感のおかげで眠っていても魔物が来たときには分かるので、睡眠についての問題はなんとかなったが……ぐうう

腹が減つた。水は近くに小川のようなものがあつたから良かつたものの、そういえば奈落といえば食べられる物があるとすれば魔物ぐらいだ

しかし、その魔物も神水がなければ食べた瞬間に死んでしまう

人は水だけでもなんとか生きれる筈だ。食べ物は諦めて南雲を探そう  
「待つてろ、一人にはしない」

それからまた数日経つた。直感を駆使して探し回った甲斐があつて、鍊成を使った形跡のある場所が判明した

爪熊に襲われて、南雲は鍊成を駆使して逃げたのだろう

「穴の中にいたんじや、俺の声なんて届かないよな」

諦めて他の場所に行こうとしたが、不意に獸の悲鳴のようなものが聞こえた  
俺はすぐさま駆け出した。別の魔物同士で争っているかもしれないが、南雲の仕業というのもある。南雲じやなれば逃げればいい

近づくに連れて、人の声・南雲の声が聞こえてきた

「やつぱり刺：な。だ：想定：だ」

段々はつきりと聞こえてきた

「痛てえか？ 謝罪はしねえぞ？ 俺が生きる為だ。お前らも俺を喰うだろう？ お互  
い様さ」

曲がり角を曲がると目をギラギラとさせて、槍のようなものを狼型の魔物に振り下ろ  
している南雲の姿があつた

「： 南雲」

人は此処まで豹変するものなのか……と、驚きつつも、自分のせいなので、首をふつて親友の名前を呼ぶ

「遠藤……か？」

た  
南雲は信じられないものを見たような目で俺を見たあと、駆けていくとハグをしてきた

「南雲……生きていてよかつた。後、助けられなくてすまん」

「助けに来てくれただけでも嬉しかったよ

そつちこそ生きてて良かつた」

~~~~~

「今頃、だけど、右腕は大丈夫なのか？」

南雲に案内されて、洞窟に入った俺は質問した

「此処にある”神結晶”から流れ出ている”神水”的おかげで助かつたんだ」

「ああ、書物に書いてあつたなあそいいえば」

南雲は二尾狼を俺が渡した短刀を使って捌いている

「えくと、その魔物の肉を食う気か？」

「… 腹が減ってるからな、遠藤の分もあるけど要らないなら食べちまうが」「あー… んじやあ同時に食べないか?」

「… という事で同時に食べることになつたのだが、口に入れると、不味いながらも我慢できないほどではなかつた。

しかし、その肉を飲み込むと頭が沸騰しているのではないか? というほど熱くなり、全身が引き裂かれるような痛みに合う

「ぐつ、があああああ?!」

「どうし… アガア!!!」

「う、オエアア… カハツ! オオオオオオアアア!!」

「なんで… なおらなあ、あがああ!」

俺と南雲は神水をがぶ飲みしたが、全身を襲う痛みは收まらず數十分もの間、地獄の苦しみを味わつた

「はあつ! はあつ! そういうえば、魔物の肉を食つたら死ぬんだつけな」

「はあつ、はあつ、お前が俺に教えてくれたのに忘れてるのかよ」

「知つてて食つたのかよ、言つてくれればいいのによ」

仰向けになつていた状態から身体を起こし、互いに顔を見合わせる  
「おい、お前金木君になつてるけど」

「お前もな」

「一体どうなつてるんだ?」

「さあな、ステータスを確認してみるか」

南雲がステータスを確認したので俺も見てみる

遠藤浩介！ 17歳！ 男！ レベル12

天職：暗殺者

筋力 : 236

体力  
：4  
5  
6

而性之德

每批

魔力：366

魔耐：366

**技能**：暗殺術「**十投擲術**」、「**十暗器術**」・氣配操作「**十氣配遮断**」・影舞・直感・胃酸強化・纏雷・言語理解

嘘だろ？強すぎだつてばよ

「なあ遠藤、勇者越えちゃつたんだけど」

そう言つて差し出してきたステータスプレートは、確かに全ての能力値が100以上になつていた

「どうやら魔物の肉を喰つたことで、レベルとステータスが上がり、技能まで手に入れられたみたいだな

と、その勇者を越えた者さえ越したぞ」  
自分のプレートを渡す

「規格外怖い」

俺は心の中で、お前には言われたくない！  
「それで？ これからどうするんだ？」と突っ込んだ

「勿論此処を出る、そのために必要な武器を作る  
「あーえっと、俺の武器も作ってくれないか?」  
「ん? ああ俺のが終わつたら作るよ」  
ということで、武器作りの開始だ

# 新たなる武器と目覚めの深淵

武器制作が決定してから体感時間約3週間ほどで、南雲の武器、大型のリボルバー式拳銃であるドンナーが完成した。

「見ろよ遠藤！ 剣と魔法の世界に現代兵器！ 試し狩りをしてきたが殺傷力は十分だぞ」

完成するや否や飛び出して行き、蹴りウサギをホクホク顔で狩ってきた親友に

「おう、一つ言わせて貰うとお前の方が規格外だよ」

と言つた

この数週間、俺は手伝えることが殆ど無くて、傍らで作業を眺めていたが… 何処で銃の作り方を知ったのかは知らないが、何度も失敗を繰り返しながら試行錯誤を続け、一から作る。そんな姿を見て、初めて親友の事を（良い意味で）やべえと思つた

「なんだろうな、遠藤のそれ、褒め言葉に聞こえてきたぜ」  
よし、無視してウサギ肉を食べよう。

さて、ステータスは

遠藤浩介 17歳 男 レベル15

天職：暗殺者

筋力：298

体力：456

耐性：264

敏捷 : 489

魔力：382

魔耐：382

技能：暗殺術

化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」・言語理解

II II

派生技能の「+空力」と「+縮地」は、できれば欲しい技能だったので、かなり嬉し

い。暗殺者兼刀を扱うものとして感動だ

早速使おうと外に出て、「十縮地」を試してみる。足に力を込めて… 踏み出したら壁に思いつきり突つ込んだ

「フフツ」

後ろから聞こえてきた笑いに笑顔で振り向く、一瞬にしてその場から移動した俺は南雲の頭をアイアンクロールする

「わ、悪かつたつて！ つーか普通に使えるじやねえか！」

わお、本当だわ

「よし、俺もやってみるか」

そう言つて思いつきり踏み出した南雲は、俺と同じように壁へ激突した

「プクスススヽ、ドンマイ」

青筋を浮かべた南雲は「十縮地」を使い、俺の後ろに回り込んだ

「残念、それは残像だ」

アイアンクロールをかけられる直前、更に後ろへと周り込んでデコピンする

「クソッ！ もうマスターしてやがる！」

「俺は八重櫻の道場で色々と仕込まれているんだよ、その応用だと思えば… ちよろいもんよ」

次に「十空力」を試してみる。確か足場を置くような技能だつたはず  
「てやつ！ グフツ?!」

自信満々にジャンプしようとしたのだが、何かに躊躇して顔面から盛大にぶつ転んだ  
「だ、大丈夫か？ ほら、神水」

サンキューと礼を言い、受け取ると一気に飲み干す

難しいなこれ、ちゃんとイメージしないとな

もう一度慎重にやつてみると、今度は地面とキスをするなんてことにはならなかつ  
た。まだ危ういが形はできた

それから更に特訓を重ね、技能を使いこなせるようになつた。

そんなある日、南雲が「俺の左腕を喰つた奴を倒してくる」と言いだした。ついてい  
こうとしたが、「アイツだけは俺の手で倒したいんだ」と言われてしまい、留守番をする  
ことになつてしまつた

暫くは自分の思い描いた仮想の敵と組手をしていたが…

「うん… よし」

俺は、死地に赴く決意でとあることを練習する

「疾牙影爪のコウスケ・E・アビスゲート、参る！」

その練習とは、ステータスプレートに「十深淵卿」が追加された時に心が折れないよ

うにする特訓だ

「よし、次はポーズだな」

片手で顔を覆いつつ、もう片方の手にはナイフを見立てた棒を持ちながら顔を覆う手とクロスするよう構える

「やつべえ格好よくね？」

俺は調子に乗り、覚えてる限りの香ばしいポーズとセリフを実演していく

「ふ、どこを見ている？」

片手をポケットに入れながら少し上体を逸らしつつ、もう片方の手でサングラスがあると仮定して中指で押さえる

「ふつ。いい殺氣だ。だが、足りない。姿形なき深淵を捉えるには、全く足りない！

「感じるだろう？ 冷たくも優しい闇の腕かいなを」

「俺は、満月よりも三日月が好きだ。夜の闇を払うほどではなく、しかし、この素晴らしき暗闇に彩りを添えている。弧を描く姿は、まるで夜の女神が微笑んでいるかのようだ」

この男、案外ノリノリである

「よし、次は」

ドチャッ

「あ」

俺は即座に南雲の目の前に移動する

「おかげり」

「あ、ああ爪熊は倒してきたぜ」

「そりやあ良かつた。それじやあソイツを食べて俺の武器を作つてくれないか?」

「そうだな、ところで——」

「さて、どのぐらい能力値が変わるか楽しみだな」

「だな、ところ——」

「次の階層にはどんな魔物がいるんだろうな?」

「あー… よし、食べるか」

「そうだ、何も聞かないでくれ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

遠藤浩介 17歳 男 レベル20

天職：暗殺者

筋力：378

体力：536

耐性：354

敏捷 : 539

魔力：432

魔而  
：432

**技能**：暗殺術【+投擲術】·【+暗器術】·【+深淵卿】·氣配操作【+氣配遮斷】·影舞·直感·胃酸強化·纏雷·天步【+空力】·【+縮地】·風爪·言語理解

説明にはこうある

効果：凄絶なる戦いの最中、深淵卿は闇よりなお暗き底よりやつてくる。さあ、闇の  
ベールよ、暗き亡者よ、深淵に力を！ それは、夢幻にして無限の力……

一オラアツ!

プレートを叩きつけると、足でゲシゲシする

「なんで発現してんだよ！ ポーズか？！」  
さつきのあれか？！」

うおおお！  
と、頭を地面に叩きつけていると、南雲が止めに入つて冷静さを取り戻

七

～～～～～～～～～～～～～～  
あれから落ち着いて話し合つて、次の階層に行くことにした。（勿論武器は作つても  
らつた）

上にいく道が無い代わりに、下へ続く階段：というか凸凹した坂道のような道があつたので進んでいく

その階層はとにかく暗かつた。

地下迷宮だからというのもあるだろうが、今まで潜った階層は緑光石が存在し、薄暗くとも視認できないほどではなかつた

あまりの暗さに南雲は、自作の緑光石を取り出し灯りとする。それを左手に括りつける。

しばらく進むと、通路の奥で何かがキラリと光つた気がした

「南雲、直感が反応した。いるぞ」

「便利でいいなその技能は」

慎重に進んでいると、左側に敵がいると分かつたので、灰色のトカゲのような魔物を

感付かれる前に斬り殺す

その肉を剥ぎ取り、どんどん奥へと進んでいく

途中で羽を散弾銃のように飛ばしてくるフクロウと、六本足の猫が襲いかかつてきたが、すべて返り討ちにして俺たちの食料となつた。

「この二つの技能は便利だよな、遠藤」

拠点を作り、食事を終えた南雲はステータスプレートをヒラヒラさせて言う

「確かに、でも気配感知は直感があるからそこまでだが、夜目は嬉しいな」

あの三体の魔物はそれぞれ、トカゲは石化耐性、フクロウは夜目、猫は気配感知の技能を持つていて手に入れることができた

知つてはいたものの、石化の邪眼とか格好良いから欲しかつたなあと思つていると、俺の中の深淵卿が「呼んだ?」と出てきたがねじふせる

南雲の弾丸作成と神水補充が終了すると探索は開始され、すぐに下へと通じる道があつた。俺たちは迷うことなく先へと進んだ

工  
工

その後、俺たちは殆ど休む暇なく下へ下へと潜つていつた。

た 様々な強敵に会い、何度も死にかけたが南雲の作つた武器や装備、仕掛けに助けられ

現在のステータスは下記のようになつてゐる

遠藤浩介 17歳 男 レベル54

天職：暗殺者

筋力 : 958

体力 : 1028

耐性  
：914

敏捷 : 1129

魔力：792

魔耐  
：792

技能：暗殺術「+短剣術」「+隱蔽」「+追跡」「+投擲術」「+暗器術」「+伝振」「+遁術」「+深淵卿」・気配操作「+気配遮断」「+幻踏」「+滅心」・影舞・直感・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」・風爪・夜目・遠目・気配感知・魔力感知・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・言語理解

どうやら原作の遠藤君を軽く越してしまつたようだ。なんだか魔王の右腕っていうよりは、二人目の魔王っぽくねえか？

「遠藤、どうする？」

どうする？  
とは、今現在俺たちがいるのは丁度五十階層あたりところで、つまりは

吸血鬼であるユ工が眠っている場所なのだが  
「当然行くつきやないでしょ」

「だな」

南雲は扉に手をかけ鍊成を開始しようとしたが、  
バチイイ！

「うおつ!?」

赤い放電が走り、南雲の手を弾き飛ばした。手からは煙が吹き上がっている。南雲は  
神水を飲んで回復する

——オオオオオオオオオオ!!

野太い雄叫びが部屋全体に響いた

その正体は、扉の両側に掘られていた二体の一つ目巨人だつた。

瞬間、二体の巨人の首が飛んで巨体が倒れる

南雲の目に動搖はない、もちろん俺もだ。なにせこれをやつたのは俺だからだ

「おいおい、ひつでえ事するなあ遠藤は」

ニヤリと笑みを浮かべる南雲に、抉り取つた二つの拳大ほどの大きさの魔石を渡す  
「二体どころか一体でも待つだけ無駄だからな瞬殺が一番」と、これで扉が開くぞ」  
二人は門の前に立ち、魔石を窪みに合わせる

直後、魔石から赤黒い魔力光が迸り、魔方陣に魔力が注ぎ込まれていく。光が収まる  
と周囲の壁が発光し、久しく見ていなかつた程の明かりに満たされた

俺と南雲は顔を見合わせ、頷くと扉を開く

扉の奥は光一つなく真っ暗闇だつたが、俺と南雲は”夜目”があるので問題なく中の様子を見ることができる

中は教会でみたような大理石で造られており、幾本もの太い柱が規則正しく奥へ向かつて二列に並んでいる

その中央には立方体の石があり――

「… だれ？」

かすれた弱々しい女の子の声が聞こえる

俺は自前の影の薄さを利用して空気になる

「人… なのか？」

驚く南雲は金髪で裸の口りをみて。

「すみません。間違えました」

そう言つて扉を閉めようとする。あ、そうだつた南雲とユエのイチャイチャしか印象に無かつたけど、コイツ等は最初こんな感じだつたな

「ま、待つて！ … お願い！ … 助けて」

掠れて呌き程度の声だつたが、必死に助けを求める少女、しかし

「嫌です」

やはり扉を閉めようとする南雲。控えめにいつて鬼である

しかし、少女の「裏切られた」という言葉を聞くと、無関心だつた南雲が興味を示す  
 「裏切られたと言つたな？」だがそれは、お前が封印された理由になつていない。その  
 話が本当だとして、裏切つた奴はどうしてお前をここに封印したんだ？」

「私、先祖返りの吸血鬼……すごい力持つてる……だから国の皆のために頑張つた。  
 でも……ある日……家臣の皆……お前はもう必要ないって……おじ様……これから  
 らは自分が王だつて……私……それでもよかつた……でも、私、すごい力あるから危  
 険だつて……殺せないから封印するつて……それで、ここに……」

それを聞いたあと、南雲は何個か質問をする。そして再度「……助けて……」と言われ、  
 少女を拘束している立方体に手を置いた

鍊成を初め、濃い紅色の魔力が放電するように迸る

抵抗が強いようだが、負けじと雄叫びを上げて鍊成する

俺、空気じゃね？　とか思いながら……その姿を見ていた俺だつたが、そろそろ動ける準備をしておく、大きな音をたてて、少女の拘束が外れた。もうじき蠍型の魔物が  
 やつてくる

少女が南雲にユエという名前をつけてラブコメをしているが、お構いなしに俺は二人  
 を抱き抱えてその場を離脱した

直前までいた場所に真上から魔物が落ちてきたのである。二人は驚いたような顔を  
している

「…誰？」

「助かつたぜ遠藤、いたんだな」

決して一人の言葉にイラついたわけではないが、乱雑に放り捨てる

「二人は回復してろ、時間は稼ぐ」

二人の非難する目を知らんぷりして、敵へと肉薄する

「どこまで強くなつたのか… 試させてもらうぜ」

# 封印部屋の化け物は沈み、少年は強さを求める

「らああアアつ！」

サソリモドキの爪部分に斬りつけてみたが、傷一つとしてつかない  
「硬いなあおい」

自信満々に飛び出したのはいいものの、大したダメージを与えない自分に少しイラつきながらも冷静さを忘れず慎重に動く

たまに魔法攻撃を撃つてくるが、動作をよく観察していれば簡単に避けられる  
「重いが捌けねえ程でもねえな！」

爪を使って攻撃していくが相手は巨体の割には中々のスピードで攻撃していくが、比較的簡単に爪の攻撃を捌くことができる。ただし一撃が重いので、剣が壊れないように受け流すのに骨が折れるのが唯一の欠点だ

距離をとると、触手だが尻尾だか分からぬが、そこから針を飛ばしてくる。それを「十縮地」と「十空力」の会わせ技で避ける

「これでも喰らえやああ！」

避けると同時に影舞を使つて壁を走り、勢いをつけて胴体部分に踵落としを喰らわせ

た。

怯んだ隙に剣で追撃しようとするが直感が離れた方がいいと警告したので、すぐにその場から飛び抜く

「遠藤！　回復が終わつたぞ！」

それと同時にユ工の”蒼天”が叩き込まれる。回復だけでなく、血も吸っていたようである

そういうえば……と、俺は一つの提案をする。

この魔物の外殻は鉱石でできている。原作でも、鍊成を使えば簡単に外殻を突破できると言つていた

余計な傷は負わないに限る

「おい南雲！　この魔物の外殻、もしかしたら鉱石かもしれない　鑑定してみてくれないか？」

「なに？」

一瞬、何言つてんだコイツ？　的な顔をしたあとに、ため息をつくと、接近して魔物に触れる

「どうだ？」

「マジだつたわ」

”縮地”を使い、一瞬で帰つて来た南雲はそう答えた  
「ということは」

「そうだなあ」

二人は凶悪な笑みを浮かべる。

俺たちはサソリモドキに近づくと、南雲が鍊成で外殻を突破し、胴体部分に斬りつけ  
る

キィイイイ——と甲高い悲鳴を上げるサソリモドキだが、そこで終わらないのが  
この二人、次に  
尻尾を斬り、足を斬り、口内に南雲特製の爆弾を入れて起爆、動かなくなつたサソリ  
モドキを見て、やつとで二人は倒したのだと納得した

本当ならこのサソリモドキとの戦いはもつと激戦した筈なのだろうが、浩介の原作知  
識という最大最強で理不尽な武器のせいで呆気なく散つたのだつた

「しつかし、便利だよなあ直感の技能」

なんと説明しようか迷つていたところ、話しかけてきた南雲の言葉に助けられた

「あ、ああ…直感がこんな事にも使えるなんて初めて知ったわ」

俺たち二人と新たに仲間になつたユ工はサイクロプスとサソリモドキの素材と肉を持つて拠点へと戻つた

「シユタル鉱石、魔力を込めた分だけ硬度が増す……か、コイツのおかげで俺たちの武器は更に強力になるぞ」

魔力を込めるほどに折れにくい刀といい

深淵卿が「ねえねえ呼んだ?  
ねえね」と煽っている気がするが無視を決め込む

南雲とユウガが重要な話をしている、しかし俺は聞いていなくとも知っているので、

雲が現在製作している俺の武器の名前を考えることにする

夜のように黒い刃、そして桜のごとく散つていく敵

夜桜とか？

いやいや、

ここはもつと単純に、黒い刀身を夜に例えて夜刀<sup>やと</sup>？

黒刀とか関係ないけど、神様に反逆するわけだし……

リオンとか？

英語で「反逆」を意味するリベ

常闇ヒヨウヤミとか、俺の写し見つてことで影カケか？　…　いや、俺はコースケ・E・アビスゲー  
トだし、深淵卿アビスゲートでいいんじやね？

「遠藤、ほら」

思考にふけっていた為か、南雲の話を聞いていなかつた俺に刀が放られたが、気づかない。寸前で直感が働いてくれたおかげで、投げ渡されたものを受け止められた「ボ」としてたが、大丈夫か？」

「いや、コイツの名前は何にしようか考えてたんだ」

「いや、普通に黒刀でいいだろ」

「う… そうだな」

さつきまで考えていた名前の数々は何だつたんだろうか、とか思いつつ刀を構えてみる

「どうだ？」

持つてみた感触もそうだが、重さも丁度よく感じる

「最高だ！ 流石は南雲だな」

「それは良かつた」

南雲の武器を絶賛していると、ユエが俺と南雲の二人に話をふってきた

「ハジメとコウスケ、どうしてここにいる？」

当然の質問に、驚いたが、南雲は自分のこれまでの経緯を話していくた。

仲間と共に異世界に召喚されたこと、南雲はありふれた職業である「鍊成師」が天職で能力値も並以下、それが原因で無能と言われていたこと、ベヒモスとの戦いで仲間に裏切られて奈落に落ちたこと、魔物を喰つて変化したこと、神水のことや今使っている武器が元いた世界での兵器だということ

すると、グスツと鼻を啜るような音が聞こえだす。発生源を見ると、ハラハラと泣き出すユエがいた

「……ぐすつ……ハジメ……つらい……私もつらい……」

「気にするなよ。もうクラスメイトのことは割りかしどうでもいいんだ。そんな些事にこだわつても仕方無いしな。ここから出て復讐しに行つて、それでどうすんだって話だよ。そんなことより、生き残る術を磨くこと、故郷に帰る方法を探すこと、それに全力を注がねえとな」

ポンポンと頭に手をやり、そう言う南雲

その光景をみた俺は場違いな気がしたので、刀を持って外にいこうとする。が、そこでユエの静止の声がかかる

「グスツ……待つて……コウスケは?」

「別に俺は話すような事は無いしなあ……」

話す気がない雰囲気を察した南雲が自分の話した内容に少し付け加えた

「俺は確かに仲間に裏切られて逃げ遅れ、奈落へと落ちた。でもな、落ちる寸前、崩れかけの床にしがみついていた俺の手を取つて助けようとしてくれたのが遠藤なんだ。

まあ、逃げるより先に掴まつてた場所も足場も全部崩れて二人とも奈落に落ちちまつたけどな」

「そいや、あの時の礼を言つてなかつたな……結局落ちちまつたが、助けに来ててくれたありがとな」

「ツ！……助かつてないんだから礼をいうなよ……はあ、話すよ。

俺は落ちた後、直感を頼りに敵がいない道を通つて逃げてただけだ。

そして、敵がいないルートを通りながら直感を頼りに南雲を探した。後は知つての通り二尾狼を錬成を使って仕留めている南雲を見つけ、一緒に魔物の肉を喰つて……後は南雲と同じだな

と、ユエが近づいてきて頭を撫でてきた

「……なぜ撫てる？」

「コウスケ……命懸けでハジメのこと助けようとした。偉い」

……限界だった俺は刀を持って外に出る

「おい！ どうしたんだよ？」

「ユエの食事を邪魔しないように出ようかと思つてな、後は自主練だ。明日の朝までやる」

「朝までつて……ほら、お前のメシだ持つてけ！」

南雲が二つの肉を渡してくれた

「サンキュー」

簡単に返事を返すと拠点から出る

確かにこのサイクロプスの肉が、”金剛”で、サソリモドキの肉は”魔力放射”と”魔力圧縮”の技能を獲得できるんだつたか

これでまた強くなれる。だが足りない、俺はもつと強くならなければいけないんだ。起きたことはもう変えられない、全て俺が悪いんだ。そう、俺の責任だ

強くなつて俺は

## 最奥のガーディアン

ユエが仲間となつてどのぐらいの時間が経つたのだろうか……あの後、ユエのおかげで順調に階層を突破していき、次の階層で俺達が落ちてきた場所から百階層目になるとここまで来た。

その一步手前の階層で、俺たちは異様な雰囲気を醸し出していいる階下へと続く階段を前に準備をしていた。自分の装備を確認しながらチラリと二人を見る

南雲とユエは、時間が経つにつれて仲良くなつていき、今では良いパートナー同士だ。それは結構なのだが、俺がいる時にイチャイチャしないで頂きたい、拠点で休んでいる時には必ず密着しているし、横になれば添い寝の如く腕に抱きつき、座っている時でも背中から抱きつく。

吸血させるときは正面から抱き合う形になつてているのだが、終わつた後も中々離れようとしている。南雲の胸元に顔をグリグリと擦りつけ満足げな表情でくつろぐ

そのおかげで邪魔になるからという理由で拠点を出て鍛練に時間を割けられたので願つたり叶つたりだ。うん、羨ましくなんかないぞ！

ちなみに今の俺のステータスはこんな感じだ

遠藤浩介 17歳 男 レベル81

天職  
：暗殺者

卷之三

卷之三

故唐

魔力 1792

魔耐 : 1792

技能：暗殺術「+短剣術」「+隱蔽」「+追跡」「+投擲術」「+暗器術」「+伝振」「+遁術」「+深淵卿」「+投影術」・気配操作「+気配遮断」「+幻踏」「+夢幻Ⅲ」「+顕幻」「+滅心」・影舞「+水舞」「+木葉舞」・直感・魔力操作「+魔力放出」「+魔力圧縮」

「十遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「十空力」「十縮地」「十豪脚」・風爪・夜目・遠目・  
気配感知・魔力感知・熱源感知・魔力感知・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・金剛・威圧・  
念話・言語理解

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

原作にもなかつた暗殺術の派生をみて、にやけていると、武器の整備を終えた南雲が  
声をかけに来たので、刀を持ち三人で下層へと降りていった

～～～～～～～～～～～～

下層に降りると、まず目に入つたのは無数の強大な柱に支えられた広大な空間だつ  
た。柱の太さは五メートル程もあり、一つ一つに螺旋模様と木の蔓が巻き付いたような  
彫刻が彫られている。天井までの高さは三十メートルはありそうだ

その莊厳さを感じさせる光景に見惚れながらも足を踏み入れる。すると柱が奥に向  
かって光つていき、全長十メートルはある巨大な扉が姿を見せた。これまた美しい彫刻  
が彫られており、七角形の頂点に描かれた文様が印象に残る

「…これはまた凄いな。もしかして…」

「… 反逆者の住処？」

二人は扉から発せられる異様な気配にうつすらと額に汗を浮かばせている。

「… 感じてているようだが、一応言つておくと直感が鬱陶しい程に警告してゐるぞ？」

原作知識があるからではない、ガチで俺の直感の技能はこの先にいる魔物はマズイのだと知らせてきている

「ハツ、だつたら最高じやねえか。ようやくゴールにたどり着いたつてことだろ？」

不敵な笑みを浮かべて答える南雲

「… んつ！」

ユエも覚悟を決めたのか気合いを入れる

そして、全員揃つて扉の前に行こうと最後の柱の間を越えた。

その瞬間、扉と俺達の間三十メートル程の空間に巨大な魔法陣が現れた。赤黒い光を放ち、脈打つようにドクンドクンと音を響かせる。

俺と南雲は、その魔法陣に見覚えがあつた。忘れようもない、あの日、俺たち二人が奈落へと落ちた日に見た自分達を窮地に追い込んだトラップと同じものだ。

だが、ベヒモスの魔法陣が直径十メートル位だつたのに対して、眼前の魔法陣は三倍

の大きさがある上に構築された式もより複雑で精密なものとなつてゐる。

「やべえなこれはマジで」

「だな、なんだこの大きさは？ マジでラスボスかよ」

目の前の魔方陣のデカさに軽く引いてると、ユエが力強く言つた

「…大丈夫…私とハジメ、コウスケの三人なら誰にも負けない…！」

その言葉に南雲と俺は「そうだな」と返し、気を引き締める

魔方陣の輝きは更に増し、俺たちは目を潰されないように手を前に置き光を遮る。その光が収まると目の前には

体長三十メートル、六つの頭と長い首、鋭い牙と赤黒い眼の化け物。例えるなら、神话の怪物ヒュドラがいた

「「「「「クルウアアアアン!!」」」」

常人ならそれだけで死に至らしめるような凄まじい殺氣を放ちながら妙な咆哮をあげる

先制は彼方が取つた。赤い模様が刻まれた頭が口を開き、火炎放射を放つ。前方から壁が迫つてくるのではないかという程の密度、しかし三人はそれを右、左、上へと三方

向に避ける

初めに反撃したのは南雲で、ドンナーで赤い模様の頭を吹き飛ばすが、白い模様の頭が「クルゥアン！」と叫ぶと元に戻ってしまう。ユエも遅れて緑の模様の頭を炎弾で吹き飛ばすが、また白い模様の頭が元に戻してしまう

知つていた事なので初撃から本命の白い頭を狙つて黒刀を振り下ろす。が  
「なつ？」

気配遮断を用いた攻撃を黄色の文様の頭が割つて入り、

その頭を一瞬で肥大化させた。そして淡く黄色に輝いて俺の斬撃を受けきつた

”南雲、ユエ！ 黄色頭からやらないと白頭が狙えない”

”ああ、見てたが攻撃に盾に回復にと実にバランスのいいことだな”

”： ん、厄介”

”二人が黄色頭に攻撃してくれ、俺がその隙に白頭をやる”

”了解した”

”わかつた”

南雲は最高火力のドンナーと”焼夷手榴弾”を投げ、ユエは”縁槍”を連発する。それをボロボロになりながらも受けきつた黄色の頭だつたが、所々傷ついてる

白頭に一瞬で近づいた俺は今度こそ攻撃を加え、そんな上手い話があるわけもない

く、ぎりぎり他の頭が割り込んで盾になり、赤頭が炎弾を放ってきた  
 「ぐおつ！？ くつ」

”空力”と”影舞”を使ってなんとか燃えカスになるのは回避できたが、左腕をかすつてしまつて大火傷を負つた。直ぐに神水を飲んで回復する  
 「クルウアン！」

黄色頭と割つて入つてきた緑頭が傷ひとつなく修復する。南雲が”焼夷手榴弾”を白頭の上で破裂させると悲鳴をあげる

追い討ちをかけようとした所で、目の端でユエが黒頭と相対しているのが見えた  
 「（まずい）ユエっそいつから離れろ！」

黒頭がユエにデバフをかける前に頭を切り飛ばそうとしたが遅かつたようだ  
 「いやあああああ！」と絶叫を上げるユエ。黒頭は吹つ飛ばしたが、青ざめた表情でくたりと倒れこむユエに青頭が迫る。

大顎を開けていた青頭だつたが、次の瞬間には斬りすてられた頭が宙を舞う。即座にその場からユエを抱えて離脱する

”ユエは何があつたんだ？”

二体の頭を相手取りながら南雲は念話をとばしてきた

”黒頭の能力がデバフ付与とかで、嫌な記憶を思い出して恐怖状態にでもなつたんだ

ろ”

” 何もやつてこないと思つたらそういうことが”

悠長にしてゐる暇はないらしい、赤頭と緑頭が炎弾の風刃を無数に放つてくるそれを”縮地”と”空力”を使って必死に攻撃をかわす。

「大丈夫か遠藤？」

赤頭と緑頭をドンナーで吹つ飛ばし、“焼夷手榴弾”を使って足止めをしてくれた南雲が近づいてくる

「大丈夫だ。それよりユ工を回復してやれ

俺は時間を稼ぐ」

「一人で大丈夫か？」

その声を聞き、俺はいつの間にかかけていた南雲特注品であるサングラス擬きをクリッとして不敵に笑う

「ふつ、問題ない…早くしないと俺が全て終わらせてしまうかも知れないぞ？」

南雲は何も言わずユ工を抱えて隠れた  
 「さて、悪しき竜よ覺悟するがいい。疾牙影爪のコウスケ・E・アビスゲート。推して参る!!」

牙突の構えで遠藤…

いや、

深淵卿は高らかに名乗りをあげた

# 決着

まず攻撃を仕掛けたのは先に回復を終えていた青頭だった。氷弾を散弾のように飛ばしてくるが、それを避けるか切り裂いて接近する

## 「深淵流暗殺剣術・疾風転斬」

技名を言いながら何処ぞの兵長のように無駄に回転して頭を斬り落とす柱をブレーキ変わりに回転していた身体の勢いを殺すと、”空力”を使って、次の標的である黄色頭に向かつて突っ込む

黄色頭は俺の攻撃を受け止める気のようで、体が発光する。俺や南雲が持っている”金剛”のような技能だろう。だか、残念ながら俺は防御を突破することが狙いではない「深淵流暗殺剣術・一の太刀：突雲嵐」

刀を突き出し、敵へと触れた瞬間に上へと斬り上げる。黄色頭はのけ反るように上へと弾かれる

がら空きになつた白頭だが、直感に警告されたので、”縮地”空力”を使い、その場から離脱する

他の頭を相手していたせいで、回復した赤頭と緑頭は炎弾と風刃を放つてきていたのであるままだと危なかつた

「遠距離攻撃は俺も得意だぞ？ 我が愛刀よ深淵を宿せ——」

深淵への誘い  
闇纏し斬撃

新しい派生技能である”操影術”を使って刀身に影を纏わせると、地面に黒刀を思いきり突き刺す。

すると、俺の影がヒュドラ目掛けて真っ直ぐに広がつていき、ヒュドラの影と重なる。その瞬間、ヒュドラの影下方向から人一人分程度の黒い斬撃が現れた。

俺の攻撃に黄頭はのけ反つていた頭を急いで戻して防いだが、範囲外だつた頭二つが深い傷を負つた。

「『グルウウウウウウ!!』

悲鳴をあげてのたうち回る二つの頭、しかし「クルゥアン！」と段々腹立たしくなつてきた声がすると回復してしまう

やはり一対多では分が悪いようだ。相手よりも実力が圧倒的に上の場合なら勝ちようがある。だが、相手はラスボス、格が違う

しかも防御要因、回復要因、デバフ要因まで揃つているのだ。バランスが良すぎるどうしようか考えていた所、黒頭と目があつた。すると、俺の胸中に不安が湧き上がり、奈落に来たばかりの頃の孤独感、恐怖、飢餓感、無力感や後悔などが波となつて襲

いかかる

「…俺の深淵に比べれば、この程度の闇どうとということではない！」

一瞬だけ動きを止めてしまったが直ぐに復帰して目の前に迫る攻撃を“縮地”で避ける

「すまん助かつた」

俺に攻撃していた頭を潰しつつ、南雲が隣に並び立つ

「構わないさ。さて、あの6つ首どう攻略する？」

「ユエと一緒に遠藤は俺の援護をしてくれ、シユラーゲンで吹き飛ばす」

「了承した」

「”紺槍”砲皇”凍雨”」

ユエは南雲の援護をすべく、手数重視の魔法を弾幕のように次々と撃ち込む

「深淵流操影術”奈落の魔手”」

何やら手を素早く動かし、両手で印を組み出す。まるで、NINJAのように！ N

I N J A のように！

地面から無数の手の形をした影が胴体や首に巻き付いて行動を制限させる

「「「「「グルウアアアア」」」」」

ユエの魔法攻撃と俺の影の拘束、そして

「死ねつ！ 駄竜があつ」

南雲のシユラーゲンが紅いパークを起こし——  
ドカンッ!!

大砲でも撃つたかのような凄まじい炸裂音と共に弾丸が発射される。  
発射の光景は極太のレーザー兵器のようだ。拘束の手を緩めずに弾丸の行方を見守ると、射出された弾丸は真っ直ぐ黄頭に直撃した。

黄頭は俺と戦った時に使つたように防御をしていたが……まるで何もなかつたように弾丸は背後の白頭に到達、そのままやはり何もなかつたように貫通して背後の壁を爆碎した。階層全体が地震でも起こしたかのように激しく震動する。

結果は当然、二つの頭が消滅し断面はドロツと融解したようになつてゐる。背後には深い穴が空いた壁がある

残り4つの頭は俺の拘束を解こうとしていた暴れようは何処へ行つたのか、呆然と南雲の方をみてゐる。その南雲はとくに地面に着地し、煙を上げてゐるシユラーゲンから排莢した。

チンッと薬莢が地面に落ちる音で我に返つたのか、先程とは比べ物にならない強さで暴れたせいで拘束から逃れてしまつた

「 天灼」

ユ工がそう言うと、四つの頭の周囲に六つ放電する雷球が取り囲む様に空中を漂つたかと思うと、次の瞬間、それぞれの球体が結びつくように放電を互いに伸ばしてつながり、その中央に巨大な電球を作り出した。

ズガガガガガガッ!!

中央の雷球は弾けると六つの雷球で囲まれた範囲内に絶大な威力の雷撃を撒き散らした。逃げようとするが、雷球で囲まれた範囲を壁があるかのように抜け出せない

そして、十秒以上続いた最上級魔法に為すすべもなく、三つの頭は断末魔の悲鳴を上げながら遂に消し炭となる

いつものごとく魔力枯渇で荒い息を吐きながら座り込むユ工

「二人ともまだ終わってない！」

二人に向かつて駆け出しながら、ヒュドラーの残骸に背を向けてユ工の方に歩き出していた南雲は俺の叫びに振り返る

背後には七つ目の頭が胴体部分からせり上がり、南雲を睨み付けていた。思わず硬直する南雲、銀色に輝く頭はユ工を鋭い眼光で射抜くと予備動作もなしに極光を放つ

俺は先程の影の拘束を使用した時に消耗しすぎてしまい、間に合わない。南雲は覚悟を決めてシユラーゲンを前に掲げて”金剛”を発動する。極光が二人を飲み込む。その寸前に、もしものためにと配置しておいた分身体を極光迫る南雲の前に割り込ませ

る

「操影術・防護形態！」

原作でも使つていた偽であるが、”空遁・万地在空”<sup>我、求める所に存在す</sup>を使つて場所を入れ換えると、影を使つて全力で極光を防ぐ。が、

「なつ?! グオオオオオオオオオツ！」

その防御を突破して俺は極光を受けてしまうが当たる寸前、咄嗟に刀を目を庇うようにして差し出し”金剛”を使って全身を襲う痛みから咆哮を上げてるが耐える

南雲達が銀の頭に攻撃を加えてくれたおかげで早めに極光が収まる

「うあ……」

予想以上の攻撃を受けてしまい、呻き声を上げながら前のめりに倒れこんだ

「遠藤（コウスケ）！」

俺を呼ぶ声は銀頭の咆哮と共に放たれたガトリングのような凄まじい攻撃の音でかき消された

俺に攻撃が迫つているのか直感が逃げろと警告するが動けない。攻撃が当たる。：その寸前に誰かが抱えて助けてくれた。「大丈夫か!？」と近くで叫ぶ声からして南雲が助けてくれたようだ

「ユエ、遠藤を回復させておいてくれ」

俺を下ろすと、それだけ言い残して行ってしまった

「コウスケ大丈夫?」

心配の声に応えようとするが「うあ」と呻き声をあげることしかできない。そんな俺にユエは神水を口に突つ込んでくれた

極光には肉体を解かす一種の毒のような効果もあるが、神水の回復力は溶解速度を上回つており、魔物を喰い強靭な肉体となつたおかげか、時間をかけて治りそうだ

俺は直に治るので、技能の「+顕幻」を発動して南雲に加勢するように伝える。  
ユエの遠ざかつていく音と共に俺の意識も遠ざかつていった

## オスカーの住処

”ヒュドラ”との激戦を終え、【オルクス大迷宮】の最深部に至つてから二ヶ月が経つた。

そして現在、俺は――

「ハジメ……気持ちいい?」

「ん~気持ちいいぞ~」

「ふふ……じゃあこつちは?」

「あ~それもいいな~」

親友とユエのイチャイチャ現場を見せつけられていた

「はあ……南雲とユエ、俺がいるんだから自重しろよ」

自身の胸に南雲の手によつて魔改造された黒刀を抱き、暗に「俺には愛刀相棒がいる」と主張しつつ抗議の声をあげる

「うおっ浩介いたのか」

「……びっくり。だけどコウスケ、これでも自重してるので」

いつも通りの反応に肩を落しながらため息を吐く

この迷宮の創造者、オスカー・オルクスの住処で俺たちは戦いの傷を癒し、迷宮のクリア報酬として〈生成魔法〉。現在では失われた神代魔法のひとつを手に入れた。俺たちは工房にいいものがないか探ししていると、ユエがとあるものを見つけた。それは他の六人の迷宮に関する事だ。他の迷宮も攻略すると、創設者の神代魔法が手に入る。

その中には帰るために必要な魔法があるかもしれない。とのことで、当分の目的は六つの迷宮をクリアすることに決まった

俺は椅子に座りながら左目の義眼に手を当てる。

本当なら南雲の右目が極光によつて眼球が蒸発してしまつて欠損するはずだった。

しかし、これ以上南雲に傷を負つて欲しくないため、俺の技で場所を入れ換え代わりに攻撃を受けた。

だが、俺はあの時に目を焼かれないよう目の前に刀を差し出して盾代わりに防御した筈だった。しかし左目は間に合わず、右目も危なかつたがすんでの所で間に合い神水で治癒

おかげで今の俺は黒布を使つた眼帯を着けなければ、左目の義眼は常にぼんやりと青白い光を放つという深淵卿が喜ぶような見た目になつてしまつた

俺と南雲は互いの姿をみて、「『厨二キヤラにいそう』と同じ発言をして一緒に四つん這いになつて南雲はユエに慰められ、俺は黒刀で素振りをして落ち着いた

”ヒュドラー“の肉を喰つた現在のステータスはこうだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

遠藤浩介 17歳 男 レベル：???

天職：暗殺者

筋力：11028

体力：13248

耐性：10824

敏捷：13569

魔力：14952

魔耐：14952

技能：暗殺術「十短剣術」「十隠蔽」「十追跡」「十投擲術」「十暗器術」「十伝振」「十

遁術」・「十深淵卿」・「十操影術」・氣配操作・「十氣配遮断」・「十幻踏」・「夢幻Ⅲ」・「十顛幻」・「十滅心」・影舞・「十水舞」・「十木葉舞」・直感・魔力操作・「十魔力放出」・「十魔力圧縮」・「十遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩・「十空力」・「十縮地」・「十豪脚」・「十瞬光」・風爪・夜目・遠目・氣配感知・「十特定感知」・魔力感知・「十特定感知」・熱源感知・「十特定感知」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐怖耐性・全属性耐性・先読・金剛・威圧・念話・高速魔力・回復・魔力変換・「十体力」・「十治癒力」・限界突破・生成魔法・言語理解

”ヒュドラー”を倒す前からヤバいステータスだつたのが、倒して肉を喰らつたらマジ  
もの化け物入りを果たしていく驚いた

しかも天歩の最終派生である”瞬光”があつたのにも驚いた。”ヒュドラ”と戦っている時に敵の攻撃がスローに見えていたりして妙な気はしていたが、最終派生だつたからなのだと納得した

原作ではユ工を助けるために”瞬光”に至っていた南雲だが、ステータスプレートを見せてもらうと、しつかりと”瞬光”があつた。どうやら俺を助ける時に最終派生したようだ。ごめんよ親友、俺で

そんなことを考えていると、南雲とユ工がきて周りをキヨロキヨロする。確認し終えると

「南雲が”魔晶石シリーズ”と名付けたアクセサリー一式をユ工に送ったのだ、だが、その第一声は」というと

「⋮ プロポーズ？」

「なんでやねん」

とぶつ飛んだ発言に関西弁で突っ込む南雲。そして、「俺には刀あるし」と呟く俺「それで魔力枯渇を防げるだろ？ 今度はきっとユ工を守ってくれそ娘娘うと思つてな」

「⋮ やつぱりプロポーズ」

「いや、違えから。ただの新装備だから」

「⋮ ハジメ、照れ屋」

「⋮ 最近、お前人の話聞かないよな？」

「⋮ ベツドの上でも照れ屋」

「止めてくれます！ そういうのマジで！」

「ハジメ⋮」

「はあ、何だよ」

「ありがとう… 大好き」

「… おう」

最後まで見ていた俺も悪いかもしないが、ここで俺はぶちギレた  
「てめえらイチャつくのはいいが、俺がいない時にしてくれって言つただろうが!?」  
んでわざわざ人がいるところに来てやんの!」

鬱憤が溜まつていた俺全力の言葉は

「いや… 全く気付かなかつた。すまん」

「全く気配しなかつた。それに確認したけど… いなかつたような?」

え、俺には刀あるしとも言つたのに…

「俺は部屋に籠るからそつとしておいてくれ」

その日、男のすすり泣く声を一人が聞いたのは言うまでもないだろう

な

## 第二章

### 残念ウサギと苦労人浩介

あれから十日して、遂に俺たちは地上へと出る。南雲は魔方陣を起動させている

「久しぶりの地上かあ……うん、なんだか緊張してきたぞ」

「だな……そうだ、話しておくことがある。

遠藤……は大丈夫か」

話をふられるのかと期待したが、途中で止められて非難する俺だったが、南雲に手で制された。大事な話をするのだろう

「ユ工、俺の武器や俺たちの力は、地上では異端だ。聖教教会や各国が黙っているということはないだろう

「ん……」

「兵器類やアーティファクトを要求されたり、戦争参加を強制される可能性も極めて大きい」

「ん……」

「教会や国だけならまだしも、バックの神を自称する狂人共も敵対するかもしけん」

「ん……」

「世界を敵にまわすかもしれないヤバい旅だ。命がいくつあつても足りないぐらいな  
「今更……」

南雲の言葉に笑みで返すユ工。そんな彼女の髪を優しく撫でると気持ち良さそうに  
目を細めるユ工

出そうになるため息を押し留めると、「あーもう二人だけの空間だねー邪魔物は空気  
になりますうー」と言いたそうな顔をして離れようとして——手を捕まれた

「ここからはお前もいないと駄目だ」

「邪魔者は退散しようとしただけですうー」

「……コウスケいじけてる。可愛い」

「まさかつきまでのは別に言わなくとも俺たちなら分かつていて当然だと思つてんだ。  
悪かつた」

「……なんど、ライバルは身近にいたつ……！」

どういうわけだそりや？と思つたが、口に出さずに次の言葉を待つ

「俺が、遠藤が、ユ工が、それぞれが守り合う。それで俺たちは最強だ。全部なぎ倒して、  
世界を越えよう」

「んっ！」

「おうつ！」

その言葉にユエはいつも通り笑顔で返し、俺は不敵に笑つて答えた

魔方陣が発動し、一面が光に満たされた視界、何も見えなくても確かに変わったことは実感した。奈落の底の淀んだ空気とは全くの別物。懐かしさを感じる空氣に自然と笑みが浮かぶ。

しばらくすると光が收まり目を開けた俺の視界に写つたものは……

洞窟だった。

「なんでやねん」

普通ここは地上だろ！　と、思わずツッコミを入れてしまつたが、どうやら南雲も同じようだ

「とにかく進もうぜ、よくよく考えたら反逆者の住処が隠されていない筈ないもんな」

その言葉に頷くユエと南雲、途中にトラップの反応があつたが、南雲の指輪のおかげで一切何事もなく洞窟内を進んでいると遂に光を見つける。これは確かに外の光だ。俺たち二人は数ヶ月、ユエに至つては三百年間という長い年月。求めていた光だ

「ふつ、お先に！」

俺たちは互いに顔を見合わせてニッとも笑みを浮かべて——俺は抜け駆けして、いち早

く駆け出す

近づくにつれて段々大きくなる光。新鮮な風も吹き込んでいる

俺は光に飛び込み、待望の地上へと出た。最初は眩しくて目を開けていられないが、じき慣れてきて目の前の光景を見る。二人も追いついてきたようだ

「戻つて来たんだな」

「……んつ」

「おお」

そして顔を見合させた俺たちは喜びからか叫ぶ

「よつしやあああ——!! 戻つてきたぞおおおおつ!!」

「ん——!!」

「やつたぞおおおつー！」

俺は感動したのかツーと少し涙を流しながら雄叫びに近い大声を上げる。存分に叫ぶと、魔物が集まつてきているのにいち早く気付き、二人の方を見る

南雲はユ工を抱きしめると、くるくると廻る。二人は笑顔に満ち満ちた笑い声をあげているが地面の出つ張りに躓いて転倒してしまう。気にしてないのか大の字になるとクスクス、ケラケラ笑い合う

「あーはいはい、魔王様とその奥方様の為に一仕事しますよおー」

俺は呆れたように言うと、喜びあつてゐる二人の周りに集まってきた魔物たちを排除するためには速に動く

「別に？」 目の前に立つてゐる俺を無視して二人を襲おうとしたからつて怒るわけないじゃん？ ましてや二人が俺の存在を忘れてイチャイチャしてゐるからつてのも違うからな？ はははっ」

ブツブツと怨念のようになきながら”瞬光”も使い、機械のように手を動かして魔物を殲滅させた。

あーいい仕事した。

「うおつ、どうしたんだ？ 魔物が殺られてやがる」

「……本当、一体誰が？」

俺の中の何かが切れた気がした

「あつちに魔物がいる気がするぞおおお！ 豊さ晴らしじやああ！」

”直感”の技能に頼つて、全力で走る。後ろで何か聞こえた気がしたが知らない。

全力ダッシュをしてから暫くして、頭が二つ生えているティラノサウルス擬きの魔物が何かを追いかけていた

「獲物発見つ！ 即殺二コマだごらああ！ 深淵流暗殺剣術・疾風転斬つ！」

ヒュドラ戦で使用した技名を叫ぶと一瞬にして頭を斬り飛ばした。格好いい技名だ

が、要するにただの回転斬りである。重要な事なのでもう一度言おう……ただの回転斬りである

無駄に格好よく着地を決めると刀を鞘に納めて去ろうとする……しかし自らが倒した魔物の下敷きにならんとしている少女が見えた。それを助けるために行動する

「深淵流移動術・」我求めるは速さなり疾影降臨!』

「はい、ただの”瞬光”である。”瞬光”を使って少女のもとへと一瞬で移動するとお姫様抱っこをして離れる

「大丈夫か?」

少し深淵モードに入つていたが、あの二人以外の者に”恥ずかしい姿深淵卿”を見せるわけにはいかないので無理やり素に戻つて声をかける……て、あれ? この子は――

「は、はいい! 助けて頂きありがとうございますうう!!」

シアなのか? いや、別の兎人族の人つて事も

「はっ!? そうだった! 私の話を聞いてください!」

頬を上気させていたるシア(仮)だつたが、いきなりガバツと掴みかかつてきた。それをお肩に手をやり引き離そうとする

ガオオオオオオン! グルツ! キキイイイツ!

南雲たちが追い付いたらしく、異世界に似合わない音を響かせて魔力駆動二輪が俺た

ちの手前に止まる

「遠藤すまなか」

南雲が途中で言葉をつまらせる。それに心配したのか南雲の肩に手をかけて此方を覗きこむユエだつたが、そのユエまで硬直して二人はヒソヒソ話し出す  
「ユエっ！」

「……ハジメっ！」

すると話し合っていた二人はいきなり抱きしめ合い、此方を向くとグツとサムズアツプしてきた

どいうこと？

「彼女できたんだな！　おめでとう！」

「…………んっ！　これで好きなだけイチャ……寂しくないね」

おつとユエさんや、好きなだけイチャつけるとか言おうしただろこら  
「いやっ、違うから！　俺はこの子を助けただけで……だよね？」

内心で「いや、この子アンタの将来の嫁さんだよ!」とかツツコミながら、未だに放心中の彼女に真実を話して貰おうとデコピンしてやると「ひやうっ!?」と可愛らしい声をあげて戻つてきたらしい  
「はやくしてくれ」

「なつ、なんですか?! いきなりキスっ!?」

俺が問い合わせるように接近すると、何を勘違いしてるのか目を瞑り、口をタコのようにしてチューと近づけてきた

アホ

今度はデコピンではなく、軽いビンタをする

な、なにするんですか!?

「人の話を聞かないからだろうが！」

一話……そうです！

先程は助けて頂きありがとうございました！私は兎人族ハウリアの一人、シアといいます！取り敢えず、私の家族も助けてください！ものすつごくお願ひしますっいやなんで俺の方見てんの？だから南雲に言えって遠藤、助け行つてフラグ回収してこい！」グツ

「いやだからさ……なんで俺えええ!?」

## シア・ハウリア

ノリでふざけていた二人だったが、「そろそろ行こうか」と、魔力駆動二輪“シユタイフ”に魔力を込めはじめる南雲

「えーと、俺の移動手段は?」

先程までの態度から一変して何事もなかつたように去ろうとする二人に流石だなあと、一周回つて感心しながら疑問を口にする。尚シアは突然のことには固まっている

「俺がシユタイフ作つてる時、お前も影扱う技能でバイク出してなかつたか?」

そうなのである。確かに俺は南雲がシユタイフを作つてゐるときに、自分の”操影術”で作り出せるんじやね? と考え、イメージしてみるとあつさり出来上がつたのだが形だけだと思い試しに乗つてみると普通に走れた。どうやらハンドルから魔力を流してタイヤを動かすらしい。しかし一つ重大な欠点がある

「いや、違うんだ……魔力を予想以上に消費する上に、この形態を維持するの精神的に疲れなんだ」

俺の言い訳を聞いた南雲は、「いや別に魔力を消費するつて点では同じだろ。男二人だときついし」と正論をぶちかましてきた。しようがないと覚悟を決めることにする

「出でよ黒バイク……さて、行くか」

自らの影がぐにやぐにや動き、次第に黒バイクへと形を変えていった。出発しようとバイクに跨がろうとするが、

「ちよつ、ええつ!? 無視ですかあ!! に、にがじませんよおここで引き下がつたら未  
来が変わっちゃいますう……」

固まつていて、俺たちの会話に入つてこれなかつたシアは半泣きになりながら慌てて  
俺の腰に抱きついてくる。

「ちよつ、離れろつて！」

重要な人物だと分かつてているので、怪我をさせないように加減をして引き離そうとす  
るが、全然ダメだ

「痛つ！」

強く腕を掴みすぎてしまつたのか、声をあげるシア

「すまん、大丈夫——」

慌てて謝罪をして怪我を見ようとしたりで、シアがニヤリと笑つてゐるのに気付  
いた。この女、騙しやがつたな

「こんな可愛くてか弱い女の子に乱暴したんですから私の話を聞いてもら……え？」

意味わからんことを言う前に頭をガシツと轟掴みにして南雲目掛けてぶん投げる

「ちよつ……はわわわっ!? そこの人、受け止めてくださいいい！」

その叫びに気付いたのか南雲はシユタライフを前進させて避ける。当然受け止める者などいないので、地面に顔面をぶつけ、その痛みからかあ、あ、あ、あ、と声を上げて転がり回るシア

「……なんて酷いことを」

「お前が言うな」

転がり回っていたシアだつたが、ぬぐうう！ と気合いで立ち上ると南雲に抗議の声を上げる

「受け止めてくれても良かつたじやないですかあ！ 酷いですう！」

そんなシアの頭に手を乗せた南雲は……”纏雷”を発動

「アバババババババ!?」

プスプスと少し焦げっぽくなりながらもシアは諦めずに、ユラユラと起き上がつてくる。まるでゾンビのようだ

「うううこんな場面見えてなかつたのに……というかさつきからなんですか!! 私のよくな美少女に男二人でよくこんなことができますね!!」

俺と南雲がシアの美少女という発言に「自分で言うか?」と心の中でツツコミをいれ

る

「ハジメ、コウスケ少し話を聞こう。未来がどうとか……ちょっと気になる……」  
ユエはシユタイフから降りながら話を聞くことを提案する。俺たちもしようがなく  
乗り物から降りる

その言葉にニパーと笑顔になるり、全員一ヶ所に集まるとシアは話始めた  
「私たちハウリア族は亜人国『フェアベルゲン』にある樹海の奥の集落で暮らしていまし  
た。でも私のせいで一族は国から追われることになってしまったんです」

「亜人族は本来魔力を持つていないので私は魔力を持ち直接操作できます。さらに  
固有魔法”未来視”……仮定した先の未来を観る力を持つています」

「へえ……遠藤の持つてる技能、”直感”の上位互換っぽいな」

その言葉に反応して俺の方此方を見るが、目で続きを話すように促す

「これは魔物と同様の力を持つということ、捕まれば間違いなく処刑されるでしょう。  
一族は樹海を後にして北の山脈へと向かいました。ですが

そこでシアは手をギュッと握る。その仕草はどこか後悔しているようにもみえる

「その途中で、帝国兵に見つかってしまったんです。ハウリア族は争いを苦手とする一

族、気がつけば半数以上が捕らえられてしまいました。全滅を避けるために谷へと逃げ込んだのですが、モンスターが襲つてきて……」

「お願ひです——私たちを、私の一族を助けてください」

その説明を受けた南雲は躊躇なく「断る」と言つてのける

流石は南雲！未来のハーレム魔王様！ そこに痺れる憧れるう

「ちよ……ちよつと待つてください！ 今の流れはどう考えても、安心してくれ俺たちが何とかする——つて流れじやないですか!! 実際に助けてくれた所を”未来視”で見ましたのに！」

「ううつー！ 貴方は先ほど助けてくれましたし、助けてくれますよね!?」

南雲に詰め寄つたかと思うと、話を取り合つてくれない事を察したのか標的を俺に変え、詰め寄つてくる

「はあ……お前等は助けて貰えるから良いかもしけんがな、俺らには何のメリットがない。というかデメリットだらけだろ」

「うつ……！ それは……!?」

「帝国と樹海の国、二つから追われている。助けるつてことは二つの国を敵にまわすかもしれないってことだ。

そもそも”未来視”があれば防げた事だろ」

最後の言葉はなんだか自虐したような気がする。

「……あなたの言うとおりです。未来は一生懸命頑張れば変えることができる」と少なくとも私はそう信じています。

でも頑張りが足りなくて変えられなかつた未来もありました。私は今度こそ——貴方たちとの未来も諦めたくはないんです……！」

「……連れてつても良いんじやね？ 樹海行くんだし、案内人つてことで」

俺は元々助けに行く気があつたので連れていく事を提案する。ちゃんとメリットがあることも説明して

「本当ですか！？ ありがとうございます ぶつ！？」

その言葉に笑顔で抱きつこうとしてきたが、デコピンで撃退、また地面を転がり回る「……んつ、私も賛成。コウスケの言うとおり……案内させるなら元住人だからちようどいい」

「まあ、そだが」

俺たちの言い分には納得できたようだが、どうやらもしも国二つを相手取ることになつたら面倒だなど考えているようだ

「それに大丈夫、私たちは最強！」

その言葉に南雲はため息をつき、俺は頬を緩ませる

「よし、というわけだ。シユタイフは俺とユ工専用だからな、アイツをお前のバイクに乗せてつてくれ」

先導よろしくと言ひ残してシユタイフに乗る南雲

「任せろ。おいウサギ！」 いつまで寝そべってるつもりだ？ 早く乗れ

「うへは、はい——よろしくお願ひします！」  
「それと私はシア・ハウリアです!!!」  
シアつて呼んでください！」

俺の”直感”を頼りにバイクを走らせることが数十分、その間は暇なのでシアが質問してきた事を返していた

「それじゃあ……コウスケさんとハジメさん、ユ工さんも魔力を直接操れたり固有魔法が使えると」

「ああ、そういうことだ。この乗り物は暗殺術の派生技能の”操影術”が乗つてゐる乗り物はアイツが作ったアーティファクトだがな」

……それってつまり私とお三方つて——

「俺と南雲は後天的ではあるが魔物と同じ力を持つて点では同類つてことだな」

「…………」

先程から色々と質問してきていたシアは急に黙りだしてしまった

「そうだったんですね……」

「なんだ？」と後ろの様子が気になる所だが、運転中なので見れない。ぐすぐす聞こえるので泣いているのだろう。

「俺の服で涙は拭うなよ……」

「すいません……一人じやなかつたんだつて思つたら嬉しくつて……」

顔を背中に押しつけられて、少し涙がついてしまつたが、しようがないと気にしないことにした

「そうか……」

俺は一言だけそう答えたが、返答が気に入らなかつたらしく抗議の声をあげる

「ここは『大変だったな。これからは俺が傍にいるから一人じやないよ』とかいつて頭撫でてくれたりして慰めてくれる所じやないんですか？」私、さらに惚れちやいますよ？」

「残念だが、運転中はよそ見ができるないし、ハンドルから手を離せないんでな……ん？あれは——」

「魔物の群れ……コウスケさん！ もしかしたら……！」

「わかってる……飛ばすから捕まつとけ」

俺は南雲に念話を飛ばすと更に加速させる。物凄い勢いなのでシアが落ちないよう

に腰にしつかりと捕まっている

そうして最高速で飛ばすこと数分して、今まさに襲われようとしている兎人族たちが

いた

## 再会のハウリア

ハウリア達は岩影に隠れてなんとか凌いでいるが、長く続く筈もなく二人のハウリアが隠れている岩が破壊され、魔物が襲いかかる。が、その前に南雲がドンナーで魔物の頭を吹き飛ばした

ハウリア一同、何が起こつたか分からぬような顔をしていたが、後部座席に立ち上がり「みんな～！ 助けを呼んで来ましたよ～！」というシアの声にハウリア達は一斉に彼女の名前を呼んだ

「「「「「シア?!」」」」

仲間が無事なのが嬉しいようで、ブンブン手を振り小刻みに飛び跳ねる。

それは良いのだが、落ちないように密着しているのを忘れないでほしい。この子凄い  
ー てか初めて触つゴホツゴホツ

「おいシア、口閉じてろよ舌囁むから」

煩惱退散！ と自分に渴を入れる。そして後ろにいるシアを脇に抱えながら立ち上がりすぐさま跳躍、壁を”影舞”を使い、走つて接近すると魔物を両断する。というかこの魔物、ワイバーンっぽいな

「な、何が起こつ——んん——!!」

どうやら舌を噛んだらしい。言わんこつちやないと呆れつつ、魔物を次々と切り裂いていく。南雲のドンナー&amp;シュラーケの射撃も相まって大量にいた魔物達は僅か数分で壊滅させられてしまった

「大丈夫か?」

戦闘が終わつたのでシアを降ろすと、ヨタヨタしながら「ぎもぢわるいでずうう」と岩の陰へ言つてしまつた。なんかすまねえ

「すいません、此処にシアはおりませんでしたか?」

シアが向かつた方を見ていると、濃紺の短髪に頬に鬚を生やした男のハウリアに話しかけられた

「あんたは?」

「はい、私はシアの父で——」

コイツがカムか、自己紹介をしようとするカムを「ちよつと待つてくれ」と止めて南雲とユエを呼ぶ

「俺はコウスケで、コイツが南雲ハジメ、隣の美少女がユエだ」

「これはご丁寧に……私はシアの父にしてハウリアの族長をしております。カムといいます。この度は我が一族の窮地を救つて頂き、なんとお礼を言えばいいか——」

「お礼は受け取りますが俺——『父様！』……」

樹海の案内のこと話をそうとしたが、タイミング悪く復活したシアの言葉でかき消された。

てかタイミングが悪かつたんだよな？ 狙つてねえよな？

……まあいや話す手間が省けたし

少しして、ハウリア達は話し合いが終わつたようで、互いの無事を喜んだ後、俺たちの方へ向き直つた。

「コウスケ殿、ハジメ殿、ユエ殿……この度は私共一族の窮地を救つてくださつただけでなく娘のシアを助けていただき、本当になんとお礼を言えばいいか。更に脱出まで助力くださるとか……父として族長として深く感謝致します」

そう言つて、カムと後ろにいるハウリア族一同が深々と頭を下げた。

「礼は受け取つておく。だが樹海の案内と引き換えだつてことを忘れるなよ？」

「——勿論ですとも」

「……それより、随分あつさり信用するんだな。亞人は人間族にはいい感情を持つてい

ないだろうに……」

あつさりと答えるカムに南雲は疑問げにそう言つた

「シアが信頼する相手です。ならば我らも信頼しなくてどうします。我らは家族なのですから……」

南雲の言葉に微笑みながらそう答えるカムに、シアのために一族で故郷であるだけはあるなあと思いながらもそろそろ先に進むように促す

「こんなところでグズグズしてれば直に魔物が集まつてくる。はやく峡谷から出ようぜ」

とか言つて出たはいいが……

「おいおいマジかよ。兎人族の連中生き残つてやがったのか」

俺たちの前方には鎧を着た兵士のような奴等がいた。コイツ等がシアの言つていた帝国の人間だろう。俺の横にいるシアを見るとニタアと気持ち悪い笑みを浮かべている

「ああもしかして奴隸商人か？ 峡谷からご苦労なこつた。まあいやそいつら全員帝国で引き取るから置いてけ」

南雲が奴隸商人だと思ったのか、気安く話しかけてくる。が、

「断る」

その一言で見るからに機嫌を悪くする

「……よく、聞こえなかつたな——今なんて言つた?」

「断ると言つたんだ。さつさと國に帰ることをオススメする」

今度は脅しのつもりなのか剣を抜き、目の前で剣それをちらつかせて質問するが南雲の答えは変わらない。後ろの連中は座つて談笑してたりしたが、会話が聞こえたのだろう立ち上がり武器に手をかける。俺は前へと歩み寄る

「……なるほど世間知らずのクソガキか……ちよいと世の中の厳しさつてやつを教えてやろう」

しやべつている奴の隣を通つて後ろの連中に近づくが誰も気がつかない。刀に手をかける

「まずはてめえの四肢を斬り落とし、連れの嬢ちゃんがお——ツ何!?

後ろにいる連中の首を全て斬り飛ばす。身体が倒れると首の断面から血飛沫が吹き

出る

此方後ろの異変に気がついたのか男は振り返り、驚愕する。目に入るのは仲間たちの死体

……そして刀を鞘にしまう俺の姿

「な、なんだてめ……ぐわああ!」

ドパツという音と共にドンナーが放たれ、男の左足が吹き飛ばされた。

「お前、すでに捕まえた兎人族はどうした。この辺りにいるのか？」

殺さなかつたのは、これを聞くためだつたらしい。

「うぐつ……てめえこんなことをして——ぐつぎやあああつ!？」

二発目の発砲、今度は右腕が吹き飛ばされた

「ヒィイ!? 言うがらあ！ ソイツ等なら帝国に既に送つたあああ！」

「——そうか」

三発目の発砲で男の頭部は吹き飛んだ。

それを見送ると、先に進んで他に敵はないか偵察しながら、対人戦でも普通に戦えるようだ。人を殺したのに、別段なにも感じなかつた。俺も奈落に落ちて価値観が少し変わつたのかな？ と思いつつ、帝国兵が捕まえたハウリアの輸送に使う為らしい馬車を見つけた

馬車に乗つて出発し、少しして俺たちにシアが話しかけてきた

「……あのつ！ お三方のこともつと教えてくれませんか？ 旅の目的とか今までして

きたこととか

ハジメさんとユエさん、そしてコウスケさんのことともつと知りたいです！」

面倒そうな南雲に「暇潰しで話そuz」（とい、話すことになつた

{ } { } { } { } { } { } { } { } { }

ううつらいつらすぎます」

びえんと涙を流すシアに布を渡す。

「ありがとうございます——私は、お三方に比べたら恵まれてますう！自分が情けないですう」

するとシアは決心を決めたように立ち上がった

**「私！ 決めました！！ このシア・ハウリアお三方の旅のお供をさせていただきます！！**

私たちはたゞ四人の同類……いえ、仲間！共に苦難を乗り越えましょう！」

ここに四人目の仲間が誕生

現在進行形で守られてるヤツか何言ってんだ?」

—なんて凶太いウサギ……

するはずがなかつた。  
ん？ なんでこつち見てるんだ？

「コウスケさんは賛成してくれますよね!?」

「いや?」

俺の言葉に「そんないい」と落ち込むシア

「どうか俺たちの目的は言つただろうが、七大迷宮の攻略だからな。今のシアじやあ瞬殺されて終わりだ。同行させるつて方がおかしい」

とどめをさしたようで、グフツと言つて隅に行つて体育座りをしだしたが、誰も気にするものはいなかつた。

それから少しして、しつかりと暇つぶしの目的は果たせたようで、森の前で馬車が止まる。どうやら着いたらしい

「では行き先は森の深部、”大樹”のもとでよろしいですか?」

降りるとカムが、俺たちに確認をとるように聞いてきた。南雲がそれに答えると、全員で森へと入つていく

大樹とは、南雲が先ほどカムに聞いていた樹海最新部にある巨大な樹”大樹ウーア・アルト”。迷宮はここだ

そういうえばハウリア強化が入るんだつたな……ハ一〇マン軍曹見てよかつた

考えに耽つていると様子がおかしいことに気付く、キヨロキヨロと何かを探しているようだ。少し離れていたようなので近づいていき、聞いてみることにする

「どうしたんだ？ シア」

「こ、コウスケさん……ひぎやああ!?」

人の顔みた瞬間変な声で叫ばないでくれますかね？ 泣きたくなるんで驚きました……まさかコウスケさんの気配を消す力がこれほどまでとは——シアに引き続き近づいてきたカムにまでいじめられるとは

「これ、素なんですけどね」

「そ、それは申し訳ないことを……」

「コウスケさん、違うんですよ！ 私は——」

「……南雲」

「……ああ」

こんなに馬鹿みたいに騒いでしまえば見つかるのは必然だろう。何者かが近づいてきた。シアとカムは気配で何者かを察知したようだ。

「動くな！ 何故ここに人間がいる!!」

そう声を荒げて武器を構えた数人の獣人たちが現れた

# 残念ウサミミ族——ハウリア

「言われた事にカム達は弁解しようとするが、虎の獣人の視線がシアを捉えると目を大きく見開かせる

「白髪の兎人族の女……貴様らが報告に上がつていたハウリア族だな？ 忌み子を匿い続けた亞人族の面汚し共め！ 今度は人間も招き入れるとは」

”氣配遮断” を使つて首もとに短刀をやり、脅しにでもいつてやろうか……と歩を進めようとするが、南雲が手で進行を妨害した。仕方ないので大人しくしているとする。  
その役は南雲脅が担つてくれるらしいし。まあ、その方が手つ取り早いだろう

「反逆罪が！ もはや弁明など不要！ 生きては帰さんぞ！ 全員この場で——  
ドパンツ!!

虎の獣人が攻撃命令を下そうとした瞬間、銃声と共に一筋の光が隊長であろう彼の頬を掠め、その背後にある樹を抉り飛ばした

反応できぬ速度にあり得ない破壊力、それを目の当たりにした虎の獣人は呆然とした表情で硬直している。追い討ちをかけるかのごとく南雲は”威圧” 使って話す

「言つておくが今の攻撃は、刹那の間に数十発単位で連射できる。それに、周囲に潜んでいるヤツらも把握済みだ。……意味はわかるな？」

「なつ……詠唱がつ……」

詠唱いらずでとんでも破壊力の攻撃を連射できる上、尚且つ潜んでいる仲間のことを把握していると言われて啞然とする虎の獣人。現に南雲はとある方角にシユラーグの銃口を向けると、あきらかに動搖した気配がある。

「殺り合うつてなんなら容赦はしない。約束が果たされるまで、こいつらの命は俺たちが保証しているからな……ただの一人でも生きて帰れると思うなよ」

威圧感だけでなく南雲は濃厚な殺氣を放つ。その殺氣を真っ正面から受けた彼は、見るからに冷や汗を大量に流し気付いているかは分からぬが僅かに足が震えているのが分かる。

「だが、この場を引くというなら追いもしない。敵でないなら殺す理由もない。さあ選べ。敵対して無意味に全滅するか、大人しく家に帰るか」

「……その前に、一つ聞きたい……何が目的なんだ？」

返答次第では死ぬことになつても戦う。そう覚悟を決めたような顔で南雲を睨み付けながら質問をする虎の獣人。

「樹海の深部、大樹の下へ行きたい」

「た、大樹の下へ……だと？ 何のために？」

自分たち亜人を奴隸にするつもりだと思つていたらしく面を食らつたように困惑しながら何のようで大樹に行きたいのかを聞いてきた。南雲は続ける

「そこに、本当の大迷宮への入り口があるかも知れないからだ。俺達は七大迷宮の攻略を目指して旅をしている。ハウリアはその案内のために雇つたんだ」

その言葉を聞き更に困惑の表情を濃くしながらこの樹海こそが迷宮であると答えるが南雲はそれは違うと断言する。理由もしつかりと話しているが理解できていないようだ。

どうやらこの問題は自分の手に余ると判断した虎の獣人は一つの提案をする

「……お前が、国や同胞に危害を加えぬというなら、大樹の下へ行くくらい構わないと、

俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけにはいかないからな」

その言葉に後ろで控えている三人の獣人、そして周囲で取り囲むように潜んでいるお仲間がざわざわと動搖している気配を感じる。

「だが、一警備隊長の私どきが独断で下していい判断ではない。本国に指示を仰ぐ。お前の話も、長老方なら知っている方がおられるかも知れない。お前の目的が本当にそれだけなら、伝令を見逃し、私達とこの場で待機しろ」

先ほど同様に冷や汗をだらだら流していながら、しかしそれでも瞳には強い意思を宿しながら睨み付ける虎の獣人。

南雲は少し考えるような仕草をした後

「……いいだろう。さつきの言葉、曲解せずにちゃんと伝えろよ？」

「無論だ。ザム！ 聞こえていたな！ 長老方に余さず伝えろ！」

それに答えるように「了解！」と返事をするとザムと呼ばれた獣人だろうか、一つの反応が遠ざかっていく。

それを確認すると構えていたドンナー・シユラーカをホルスターに納めて、”威圧”を解いた。その場の空気が少し軽くなりホツとしている様子だが、それと共にあつさり

と警戒を解いた南雲に訝しそうな眼差しを向ける虎の獣人。

「お前等が攻撃するより、俺の抜き撃ちの方が早い……なんなら試してみるか?」

「……いや。だが、下手な動きはするなよ。我らも動かざるを得ない」

「わかってるさ」

周りに潜んでいるお仲間たちは出てくる気配がなく、包囲はそのままだが、居心地が悪そうな視線を受けながらもカム達ハウリアは安堵の吐息を漏らす。

しばらく、重苦しい雰囲気が周囲を満たしていたが、ユ工が南雲にちよつかいをかけ始めた。この雰囲気に飽きてしまつたらしい

敵陣の真ん中でイチャイチャしてんなよ。といつも通り呆れていたが、急にキヨロキヨロしだしたシアは俺を見つけると、こちら側に駆け寄ってきた

「どうしたシア?」

話しかけるが、もじもじしているだけで話さない。少ししてやつとで答えた

「え、えと……ハジメさんとユ工さん、楽しそうですね!」

え、そんなこと? 少し驚きながらもちゃんと返事を返す

「ああ……そうだな、あのイチャイチャはデフォルトだし、俺をもう少し気づかって欲しいよ」

アイツらがイチャつくと、俺なんて空気になるからな……元々そうだつてか？ 泣くぞ？

「馬車に乗つている時も何度かありましたもんね」

そうそう、そんなイチャイチャバカップルに君は第二の嫁さんとして割り込まないと駄目だつてのに……なんで俺のどこ来るんだよ

その後、「こんな奴いたか？」みたいな視線を向けられて落ち込んだが、無視することにしてシアとの他愛ない話をして一時間が経過、急速に此方に近づいてくる気配を感じた。

場には先程までの少し緩い空気はなくなり、再び緊張が走る

霧の奥からは、数人の新たな獣人……（いや、よくよく考えたら亜人か）亜人たちが現れた。彼等の中でも特に目を引くのが初老の男だ、流れる美しい金髪に碧眼そして尖った長耳だ。彼はどうやら森人族エルフというものらしい。俺とて男だ。初めて会う森人族が女性でないのにがつくりとしながらも、雰囲気的に彼こそが”長老”と呼ばれる存在なのだろうと予想をつける

「ふむ、お前さんが問題の人間族かね？　名は何という？」

「ハジメだ。南雲ハジメ。あんたは？」

南雲の言葉遣いに、周囲の者達が何て態度を！　と憤りを見せるが、それを片手で制して森人族の男性も名乗り返した

「私は、アルフレリック・ハイピスト。フエアベルゲンの長老の座を一つ預からせてもらつていて。さて、お前さんの要求を聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい。」解放者とは何處で知った？』

目的ではなく、解放者という単語に興味を示すアルフレリックに南雲は奈落の底にあるオスカーオルクスの隠れ家で知つたと話す。

その時、微かに動搖していた。他のものは何だか分かつていらない顔をしていることを考えると上の存在……長老やその側近しか知らない案件なのだろう

「ふむ、奈落の底か……聞いたことがないな……証明できるか？」

そう言われて難しい表情をする南雲に俺は指輪の事を提案する

「南雲、指輪あつたろ？　あれでいいんじやないか？　それか奈落の魔物の魔石とか」「あー成る程、というか指輪これアイツから頂戴した物だつたな

「早速”宝物庫”から地上の魔物ではあり得ない質の魔石を取り出し、アルフレリック

に渡す

「こ、これは……こんな純度の魔石、見たことはないぞ……!?」

アルフレリックは声に出さず呑み込んだ言葉を隣の虎の亜人が驚愕の表情で声をあげる

「後はこれだ。オルクスの付けていた指輪なんだが……」

そう言つてオルクスの指輪をみせると、アルフレリックは指輪に刻まれた紋章を見て見開くと息を吐く。

どうやら認められたようで、フエアベルゲンへの滞在をハウリア共々許し、客人として迎え入れるとの言葉に周囲から猛烈な抗議の声が上がる。

アルフレリックが周囲の亜人を徐々に黙らせていく中、それを見計らつてか南雲は。「なに勝手に俺の予定をきめているんだ? フエアベンゲンには用はない、問題ないなら大樹に向かわせてもらう」

「いや、お前さん。それは無理だ」

「なんだと?」

無理だと言われ、やはり邪魔をするのか? と目で訴えるが、アルフレリックは逆に

困惑した様子で理由を説明する

「大樹の周囲は特に霧が濃くて亜人族でも方角を見失う。一定周期で訪れる霧が弱まつた時でなければならん。次に行けるようになるのは十日後だ。……亜人族ならば誰でも知つてはいるはずだが」

その言葉に南雲は振り向き、カムを睨む。しばらくポカンとした表情をしていたカム

だつたが、青ざめた表情で「あつ……」と声を漏らす

「……おい、どういうことだ？」

その目には微かな怒りを宿しながら問い詰める

「え……いや、なんと言いますか……色々ありましたし、つい忘れていたというか……その……」

そこまで言うと急に後ろに振り返り、仲間たちにビシツと指を指し

「ええいお前たち！ なぜ途中で教えてくれなかつたのだ！」

「な……父様、逆ギレですか！」

そう、シアが講義した通り、逆ギレである。シアに続き、他のハウリアも文句を言うが南雲には関係ない。皆等しく頭に拳骨を喰らわせる。その姿を見て呆れた表情をしたアルフレリックに仕方なく案内を頼み、フェアベルゲンへと向かうのだった

## フエアベルケン

濃霧の中を虎の亞人（名前はギルというらしい）の先導で進む。

カムのど忘れにより、十日経たなければ大樹に向かうことができないので、アルフレリックの言葉に甘え、フエアベルケンに向かっている。

南雲、ユエ、俺、ハウリア族、そしてアルフレリックを中心に周囲を亞人達で固めて進み、既に一時間ほど経過した。

しばらく歩いていると……突如、とある部分のみだが霧が晴れている場所に出た。  
分かりやすく表現するのであれば霧のトンネルのような場所だ。よく見れば、道の端に青い光を放つ結晶が地面に半分埋められていた。そこを境界線に霧の侵入を防いでいるようみえる。

その水晶に南雲が興味を示すと、アルフレリックが良い事を教えてくれた。

これはフエアドレン水晶といい、霧や魔物を寄せ付けない物のだという。なんとこれが今向かっているフエアベルケンを囮んでいるおかげで街は霧がないらしい。ユエも霧を鬱陶しく感じていたらしく、喜んでいた

そして今、眼前には巨大な門が見えている。数十メートル程度はありそうな太い樹が絡み合つてアーチを作り、其所に両開きの扉が鎮座していた。

先頭を歩いていたギルが門番と思わしき亜人に合図を送ると、ゴゴゴと重そうな音をたてて門が僅かに開いた。周囲の亜人たちから俺たちに対してもけられた視線が突き刺さつてゐる。嫌つてゐる人間が招かれているのだ動搖しない方が無理つて話だ。

門をくぐると、そこは別世界だつた。数十メートルは越えるであろう巨大な樹が乱立しており、その樹の中に住居があるようで、ランプの明かりが樹の幹に空いた窓と思しき場所から溢れでいる。

極太の樹の枝が絡み合い空中回廊を形成していたり、樹の蔓と重なり、滑車を利用したエレベーターのような物や樹と樹の間を縫う様に設置された木製の巨大な空中水路まであるつぼく、樹の高さはどれも二十階くらいありそうだ。

南雲とユ工同様、俺も美しい街に見惚れていると、ゴホンツと咳払いが聞こえて、ようやく立ち止まっていることに気がついた俺たちは歩を前に進ませる

「どうやら我らの故郷、フエアベルゲンを気に入つてくれたようだな」

俺たちの反応に、アルフレリックは嬉しそうにそう言い、他の亞人たちも誇らしげにしている

「ああ、こんな綺麗な街を見たのは始めてだ。空氣も美味い。自然と調和した見事な街だな」

「ん……綺麗」

二人が感想を言い、俺もなんか良さげな褒め言葉を考えようとしたが、思い付かなかつたので自分が思つた感想を素直に口にすることにした

「……霧に隠されし国” フエアベルゲン” か……良い。それになんだあの秘密基地みたいな面白工夫は…… 左目が疼いてきそう」

二人のストレートな称賛に、少し驚きながらも嬉しそうに亜人達はケモミミや尻尾を動かしている。俺の一言には何故か微妙な顔して皆一様に首をかしげていた……なんか少し” 深淵卿” 入つてたけど……本当に格好いいと思つたんだけどなあ

そんなことを思いつつも、俺たちはフエアベルゲンの住人たちから好奇や憎悪、色々

な視線を向けられながら、アルフレリツクが用意した場所に向かつた。

~~~~~

「……なるほど。試練に神代魔法、それに神の盤上か……」

現在、南雲とユエ、そして俺は、アルフレリックと向かい合つて話をしていた。内容は、オスカーラ・オルクスの住み処で得た情報である“解放者”的ことや神代魔法のこと、次いで俺たちがこうして七大迷宮を攻略しようとしている理由（自分が異世界の人間であり七大迷宮を攻略すれば故郷へ帰るための神代魔法が手に入るかもしないこと等）も話した。

アルフレリツクに、この世界の神の話をしたが顔色を変えたりはしなかつた。特に思  
うことはないのだろう。

気になつたのか、南雲が驚かないのか聞いたところ……

「この世界は亞人族に優しくはない、今更だ」と、答えが返ってきた。

神が狂つていようがいまいが、亞人族の現状は変わらないからということらしい。

俺達の話を聞いたアルフレリックは、フエアベルゲンの長老の座に就いた者に伝えられる撻を話してくれた。

簡単に言つてしまえば、この樹海の地に七大迷宮を示す紋章を持つ者がきたら敵対しない。その者のことときに入つたのなら好きな場所連れてつてやれという内容だつた。

### アルフレリックが話す

【ハルツイナ樹海】の大迷宮、その創始者リユーティリス・ハルツイナが、自分が“解放者”という存在である事と、その仲間の名前と共に伝えたものなのだと云う。

フエアベルゲンという国ができる前からこの地に住んでいた一族が延々と伝えてきたらしく、最初の敵対せずというのは、大迷宮の試練を越えた者の実力が規格外なのを知つていからこそその忠告なのだろう。

そして、オルクスの指輪の紋章に反応したのは、大樹の根元に七つの紋章が刻まれた

石碑があり、その内の一つと同じだつたからだそ�だ。

「それで、俺は資格を持つてているというわけか……」

アルフレリックの説明により、人間を亜人族の本拠地に招き入れた理由がわかつた。しかし、事情を知つているのはごく一部なので後から話し合う必要があるのだろう。それを思い浮かべてか、少し頭を押さえている。

「大変そうな所、悪いんだが……質問いいか?」

あまり重要な事ではないが、アルフレリックに質問したいことができたので声をかけ  
る。

俺の言葉にアルフレリックは構わないと答えようしてくれたのだろうが「構わ……

む？」と、言葉を詰まらせる。何やら階下が騒がしくなつてゐるのでそのせいだろう俺と南雲、ユエ、アルフレリックのいる場所は最上階で、階下にはシアを含めたハウリア族を待機させている。どうやら、彼女達が誰かと争つてゐるようだ。俺たちは立ち上がると急いで彼女たちの下へ移動した。

心配だつたので、一番に駆けつけると……そこには大柄な熊の亜人族や虎の亜人族、狐の亜人族、背中から羽を生やした亜人族、小さく毛むくじやらのドワーフらしき亜人族がおり、剣呑な眼差しで、ハウリア族を睨みつけていた。

部屋の隅で縮こまり、カムが必死にシアを庇つてゐる。シアもカムも頬が腫れていますから既に殴られた後のことだ。

南雲とユエも階段から降りてくると、彼等は一斉に鋭い視線を送つた。熊の亜人が剣呑さを声に乗せて発言する。

「アルフレリック……貴様、どういうつもりだ。なぜ人間を招き入れた？　こいつら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によつては——んうおあ!?　な、なんなんだ？　長老会議にて——ぐ……うおつ!」

熊の亞人は話している途中に何もないところで二度も床にひっくり返る。それを不審に思つたようで、キヨロキヨロ見回すと青筋を浮かべて俺を睨んできた。どうやら少しにやけていたようでバレてしまつたらしい

「そんなに睨み付けるなよ——契約で十日後まで、ハウリアの安全は俺たちが保証している契約なんだ。手を出されて殺されなかつただけマシだと思つてくれ」  
ピキッと青筋が増えた気がした。顔を真つ赤にしながら先程よりも大きく、そして苛立つたようにアルフレリックに声をかける。

「アルフレリック！ そのガキが資格者つて奴なのか?!」

「いや、資格者はその隣にいる者だ。資格者ではないからと、手を出すでないぞ？ お前が『二度も——』

「資格者では無いなら撻には反していない筈だ！ 貴様の実力を試してやる！」

そう言い、突如俺の近くに突つ込んでくると、微動だにしない俺に笑みを浮かべながら拳を振り下ろした。

この亞人の実力を知っているのであろう者たちは（シア含めたハウリア以外）俺がひき肉にでもなるものだと幻視し、いきなり殴りかかると思つていなかつたアルフレリック

クは驚愕の声をあげる。

しかし次の瞬間、彼らは目の前にある光景をみて凍りついた

バチイツ！

急な攻撃に気がついていなかつたと思われていた少年は、熊の亞人が放つた拳を軽々と受け止めたのだ

「資格者じやないからつて……謎理論すぎだろ。まあ、先に手を出したのはお前だからな、悪く思うなよ」

「なっ!?」

誰が漏らしたのか驚愕の声が上がる。熊の亞人はすぐさま俺の手を引き離しにかかるが、離れない

メキメキツ……グチャツ

「ぐ、うおあああ!?」

嫌な音と共に骨が折れ、痛みからか声をあげて膝をついてしまった熊の亞人、そんな隙など逃すはずもなく正拳のように拳を引き絞る

「破ツ！」

熊の亞人が咄嗟に両手でガードしていたのをものともせず、俺の拳は腹に突き刺さり、もの凄い勢いで吹っ飛んでいく。熊の亞人は悲鳴など上げる暇なく背後の壁を突き破つて消えていった

誰もが言葉を失い硬直していると、「さて」という言葉と共に俺は長老達に脅しの意味を込めて殺意の視線を向ける。

「お前らもやるのか？」

俺の言葉に返答するものはいなかつた

深深深深深深深深

その後、先ほどアルフレリツクと話していた部屋で他の亞人の長老を四人加え、話し

合うことになった。

俺たちの前方にに座っているのが長老衆でそれらと向き合うように座っている。

俺を真ん中として、傍らにはユエと南雲、カム、そしてシアが座り、その後ろにハウリア族が固まつて座っている。

普通は南雲が真ん中だろうが、「話し合い遠藤にまかせるわ」と譲られてしまつた

向かい合つて相手方の様子を確認すると、長老衆の表情はアルフレリックを除いて緊張感で強ばつていた。長老クラスが一瞬で殺された（注：殺していない）のだ。こうなるのも当たり前か

因みに俺の吹っ飛ばした亜人は、身体の所々の骨が折れたりでボロボロになつており、俺の八重櫻道場で教わつた衝撃透しの技術も使っての突きだつたので、今頃は内蔵がしつちやかめつちや搔き回されている用な痛みに襲われているだろう。

取り敢えずは任されたので俺から話を切り出す

「……俺たちは大樹の下へ行きたいだけで、それを邪魔しなければ敵対するつもりはない

い……だが、亜人族として意思を統一してくれないと、何かあつた時に何処まで殺つていいのか分からるのは不味いだろ。生憎と殺し合いの中で手心を加えるほど俺たちは器用じやないんでね」

「一応は本来の目的と、敵対するなら亜人族全体とでも殺り合うことをチラつかせると、緊迫していた空気が更に悪くなつた

「こちらの仲間を再起不能にしておいて、第一声がそれか……それで友好的になれるるでも？」

苦虫を噛み潰したような表情で抗議する虎の亜人……

「は？ 先に殺意を持つて仕掛けてきたのは熊の亜人野郎、俺は正当防衛しただけだ。  
自業自得だろ」

「き、貴様！ ジンはな！ ジンは、いつも国のことと思つて！」

ジンとは熊の亜人のことで、様子を見るに親しい関係なのだろう

「国のためを思つてゐる奴が……ましてや一つの部族を治める長老が冷静さを欠いてあんな行動とるかよ？」

「そ、それは！　しかし！」

「あの熊野郎は俺が資格者じやないからとか変な理由つけて殴りかかつて来たんだぞ？」

……どう考へても俺が被害者で、あの熊野郎が加害者。長老つてのは罪科の判断も下すんだろう？　なら、そこのところ、長老のあんたがはき違えるなよ？」

「グゼ、気持ちはわかるが、そのくらいにしておけ。彼らの言い分は正論だ」

アルフレリックの諫めの言葉に、立ち上がりかけたグゼは表情を歪めて座り込んだ。そのまま、黙り込む。

「そつちの資格者の君は紋章の一つを所持していりし、そのお仲間の実力、報告であつた見たことのない武器……僕は、彼を口伝の資格者と認めるよ」

そう言つたのは狐人族の長老、名前はルアというらしい。糸のように細めた目でハジ

メを見た後、他の長老はどうするのかと周囲を見渡す。

その視線を受けて、翼人族のマオ、虎人族のゼルも相当思うところはあるようだが、同意を示した。代表して、アルフレリツクが言つてきた

「南雲ハジメ。我らフェアベルゲンの長老衆は、お前さんを口伝の資格者として認める。故に、お前さんらと敵対はしないというのが総意だ……可能な限り、末端の者にも手を出さないように伝える。……しかし……」

「絶対じゃない……か？」

「ああ。知つての通り、亜人族は人間族をよく思っていない。正直、憎んでいるとも言える。血気盛んな者達は、長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。特に、今回再起不能にされたジンの種族、熊人族の怒りは抑えきれない可能性が高い。アーツは人望があつたからな……」

「それで？」

アルフレリツクの話しを聞いても南雲の顔色は変わらない。少しの間続きを待つているとアルフレリツクが頼みを持ちかけてきた

「お前さんを襲つた者達を殺さないで欲しい」

「……殺意を向けてくる相手に手加減しようと？」

「そうだ。お前さんの実力なら可能だろう？」

「あの熊野郎が手練れってんなら出来るだろうよ。だが、殺し合いで手加減をするつもりはない。あんたの気持ちはわかるけどな、そちらの事情は俺にとつて関係のないものだ。同胞を死なせたくないなら死ぬ氣で止めてやれ」

奈落の底で培つた、敵対者は殺すという価値観は根強く南雲の心に染み付いている。殺し合いでは何が起ころかわからないのだ。手加減などして、窮鼠猫を噛むように致命傷を喰らわないとは限らない。その為、アルフレリックの頼みを聞くことはなかつた。いきなり話すのが南雲になつちまつた。これがカリスマ？　いや、違うか……資格者だからつていう理由と、コイツが一番ヤバイつてのを分かつてるからか？

そこで虎人族のゼルが口を挟んだ。

「ならば、我々は、大樹の下への案内を拒否させてもらう。口伝にも気に入らない相手を案内する必要はない」とあるからな」

俺と南雲、ユ工は一瞬訝しげな表情になつた。何故なら案内はシア達ハウリアにさせるつもりで、フエアベルゲンから案内を貰おうとは思つていなかつたからだ

察してか、ゼルが続けて言う

「ハウリア族に案内してもらえるとは思わないことだ。そいつらは罪人。フエアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える。何があつて同道していたのか知らんが、ここでお別れだ。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを匿つた罪。フエアベルゲンを危険に晒したもの同然なのだ。既に長老会議で処刑処分が下つている」

ゼルの言葉に、シアは泣きそうな表情で震え、カム達は一様に諦めたような表情をしている。この期に及んで、誰もシアを責めないのは情が深いから故だろう

「長老様方！ どうか、どうか一族だけはご寛恕を！ どうか！」

「シア！ 止めなさい！ 皆覚悟はできてる」

「でも、父様！」

「お前にはなんの落ち度もない。そんな家族を見捨ててまで生きたいとは思わん……我らハウリア族はどんな時でも一緒だ」

感動的な場面なのだろうが、コイツら忘れてないか？ と思いつながら横目で隣をみると、南雲もため息をつきそうになつていて

「大樹に行く方法がなくなつたわけだが、どうする？ 運良く辿り着く可能性にかけてみるか？」

おちよくるように言うゼルに呆れながらも、間違いを正すために口を開く

「お前、俺たちの話聞いてたか？ 俺らが大樹の下へ向かう為にハウリアを雇つた。その案内人であるハウリア達を処刑するというのなら、俺たちの邪魔するつてことだろうが」

俺の言葉にゼルを含め、他の長老たちは驚いているようだ……いや、全員気づけよ

「ああ、俺たちの邪魔をするつてんなら等しく敵だ。覚悟してもらおう」

アルフレリックの視線で察した南雲も俺と同じ意見だと言う

「フェアベルゲンから案内を出すと言つてもか？」

アルフレリックの提案に南雲は黙る……どうやら俺が答えろと言うことらしい。なんで？

「残念だが、俺たちの案内人はハウリアなんでな。諦めてくれ」

「大樹に行きたいだけなら案内は誰でも良いはず。なぜそこまでこだわる？」

「案内するまで助けるつて約束したからな……いい条件が出たからって途中で投げ出す

なんて……格好悪いだろう？」

「何をいつても無駄か。ならばお前さんの奴隸ということにでもしておこう。この国の大捷では奴隸として捕まり、樹海の外へ出ていった者は、死んだものとして扱っている。

捷により、ハウリア族は死亡したものとする。すでに死亡したものは処刑できん」

「なつ!? 屁理屈にも程が——」

「ゼル、わかつてているだろう。この者達が退くことはない。ハウリア族を処刑すれば敵に対する。どれだけの犠牲が出るか想像できぬわけではなかろう?」

「ぐつ——」

俺の戦闘を見ただけでなく、南雲の武器についても話し合いが始まる前に亜人同士で話し合つて知つてているようなので、どうやら反論できないようだ

結果、俺たちはフェアベルゲンや周辺の集落への立ち入りを禁止されたわけだが、ハウリア達には手を出させないことを約束させることができた。

# ハウリア族強化の十日間

「さて、お前たちには大樹へと向かうまでの十日間、戦闘訓練を受けてもらうからな」  
フェアベルゲンから追い出されてきた俺たちは大樹の近くに拠点を作つて一息つく暇もなく俺はそう言つた

まあ、拠点といつても南雲が盗……頂戴してきたフェアドレン水晶を使って結界を張つただけだが……

俺の言葉にハウリア族達は一斉にポカンとした表情になつた

「え、えーとコウスケさん。戦闘訓練とは……？」

ポカンとした表情からいち早く復帰したシアが質問してきた

「そのままの意味だよ。これから十日間は霧が晴れなくて大樹へと辿り着けないんだ。ならその時間を利用して、弱々甘々集団であるお前たちを自分ぐらいは守れる程度の……いや、返り討ちにできる程の戦闘部族に仕立てる」

「え、えー……と？　な……何故、そのようなことを……？」

俺の本気の目と圧に少し驚きながらも、本当に分からぬようで、更に困惑した表情

になるシア含めたハウリア族

「なぜ……何故つて聞いたか？ 残念むつづりウサギ」

「え、えー?! ついさつきまでシアつて名前で呼んでたのにいい?! というかむつづりなんかじや!?!」

「うるさい黙れ」

「酷いですうう」ひーん……と項垂れているシ残念むつづりウサギアを横目に言葉を続ける

「俺たちが交わした契約は、大樹の下へ案内してもらう代わりに、それまでお前たちの安全を約束するというものだ。案内が終わつた後はどうする、それを考えてたか?」

ハウリア族たちは、それぞれ顔を見合せると、ふるふると顔を横に振る。長老であるカムに「どうだ?」と聞くと難しい表情をして「いいえ」と答えた

「まあ、そうだろうな。はつきり言うとお前たちはこのままだと間違いなく全滅、せつかく拾つた命も無駄になる。

理由は単純明快、弱いお前たちは悪意や暴力から逃げるか隠れる事しかできない。そんなお前ら唯一の隠れ家であるフエアベルゲンからも追い出され、追われる立場……更に人間も魔物も容赦なく襲つてくる。このまま黙つて殺されていいのか？」

「そんな……良いわけがない」

ポツリと誰かが零した言葉に触発されたように次々と顔を上げ始める。その瞳からは運命へ抗う決意が感じられる。

「そうだ。いいわけがない。ならばどうするか、答えは簡単だ。強くなればいい！  
フエアベルゲンの亜人たち、帝国や他の人間、魔物……襲い来る存在を打ち破り、自らの手で生存権利を勝ち取ればいい」

「……ですが私たちは兎人族で——」

自分たちは兎人族で他の種族と違つて特に秀でた事がないのだと否定的なことをおうとするが、それを遮るように続ける  
「兎人族だからなんだ？ 南雲はな、前の仲間たちから”無能”なんて呼ばれてバカにされてたんだぜ？」

「……え？」

ハウリア族は全員が目を丸くして南雲の方を見る。この場所に来る途中で打ち合わせをして先に謝つており、話を振られる事を事前に知っているので、南雲はそれを特に顔色を変えずに答えた

「俺はステータスも技能も平凡極まりない一般人……いや、それ以下か。仲間内での最弱。戦闘では足手まとい以外の何者でもない。だから、かつての仲間たちは俺を”無能”と呼んでいたんだよ。実際その通りだつた」

南雲の告白にハウリア族は皆、驚愕をあらわにする。【ライセン大峡谷】では見たこともない武器で凶悪な魔物から自分たちの窮地を救つてくれて、虎人族に森で遭遇してしまった時の物凄い殺気……そんな彼が”最弱”で”無能”など誰も信じられないようだ。

「だが、奈落の底に落ちて俺は強くなるために行動した。出来るか出来ないかなんて関係ない。出来なければ死ぬ、俺は……俺たちはそこで自分達の全てを賭けて戦い……気がつけばこの有様だ」

深い静寂が訪れる。南雲の語る内容があまりにも壮絶な内容だからだろう。顔を青ざめている者もいる

「かつての俺とお前たちの状況は似ている。約束の内にある今なら手助けをしよう。諦めるなら構わないさ、今度こそ全滅するまで残り僅かな生をガタガタ震えながら待つていればいい」

そう言い、目で問う南雲。ハウリア族達は直ぐには答えを出せず、黙り込んで互いに顔を見合せている。頭では自分たちが強くなる以外に道はないと理解しているようだが、元は温和で平和……なにより争いが大の苦手な種族だ。すぐには決断出来ないだろう

「やります。私に戦い方を教えて下さい！　もう、弱いままは嫌です！」

樹海全体に轟くのではないかというほどの叫び……確かな決意を宿した瞳で真っ直ぐに南雲、俺を見つめながらの全力で想いを込めたであろうシアの宣言だ。

その彼女を啞然として見ていたカム達ハウリア族だったが、次第にその表情にやる気を滾らせて立ち上がっていく

「ハジメ殿、そしてコウスケ殿……よろしく頼みます」

カムは全てのハウリア達が立ち上がったのを見計らつて前に進み出ると、南雲と俺に頭を下げる。

「わかったが、覚悟しろよ？　あくまでお前等自信の意思で強くなるんだ。俺たちはた

だの手伝い。途中で投げたした奴は問答無用で切る。期間は十日と短いんだ……死に物狂いでやれ。生きるか死ぬかは己の頑張り次第だ」

「任せろ。死ぬほど厳しく指導してやる。その代わりに十日でお前たちを亜人最強の種族へと変えてやるよ」

俺たちの言葉にハウリア族は皆、力強く頷いた

「一日目」

まず最初に南雲は、ハウリア族を訓練するにあたつて宝物庫から鍊成の練習に使つていた装備を配つた。

「シアはユ工による魔法訓練がある。よつて残りは俺と遠藤で担当する」

「あ、あのおハジメ殿……」

カムが何か質問があるのか、おずおずと手をあげる。

「カムか、なんだ娘が心配なのか？ 安心しろユ工は——」

「いえ、それもありますが……そうではなく……」

「じゃあなんだ？」

てつきり娘のシアを心配しての質問だと思った南雲は本当にわからないといった顔で理由を聞く

「その……もつと安全な武器はないですかな？ 木製とかの……」

「…………はあ！」

俺と南雲は数秒固まつた後、驚きで声を上げた

「だ……だつてこの鋭さ……こんなので斬られたら痛いに決まつてるじゃないですか……」

カムの言葉とそれに同意するハウリア族に拳骨を落として説教をする南雲を横目に、殆ど重要な場面以外忘れていた原作の知識を思い出そうと頭に手をやり、必死に思い浮かべる

しかし、俺には南雲がハート○ン軍曹式の教えをしてハウリア族がいたこと以外は思い出せなかつた。

「――わかつたか？ 俺たちは手伝いで、強くなれるかはお前たち次第だ。逃げ出したい奴は今すぐ抜ける。残る者は死に物狂いでやれ……わかつたか？」

「「「「は、はい！」」」

説教が終わり早速訓練を始める。

まずは武器を持たせると、構えや動き等の基本的な動きを教える。俺の生前習っていた武術と八重樫道場での教えの中でも最も簡単なものと、南雲が奈落の底で手にした自己流の動きを合わせて教えた。

南雲と話し合つた結果、今後の予定として、このハウリアという種族の強みである索敵能力と隠密能力を生かした奇襲と連携に特化した集団戦法を身につけさせることにした。

因みに俺が教えたのは師範代にちよつとだけだから……と覚えさせられた、音をたてにくい歩法や気配をより良く絶つ方法、投擲術等々だ。

逃げることしかしていなかつた為か、自己流の型などが無かつた為か、はたまた別の理由か……思つたよりも上達が早かつたので少しだけ安心した。霧の向こう側からシアの叫び声や悲鳴が聞こえるのであちらも順調にやつているようだ。

次の日、俺と南雲は隠密組と奇襲組の二手に別れて訓練を開始した。元々、得意なだ

けあつて少し教えただけで上達していったので、実際にネズミ型の魔物と戦わせてみるところにした。初めてとはいえ、少しばかり傷を負いながらも敵の背後を取つたりして上手く魔物を倒している。

しかし……

グサツ！

魔物の腹部に、小太刀が突き刺さり絶命させる。

「ああ、どうか罪深い私を許してくれええ！」

それを行つたハウリア族の男が血など関係ないとばかりに魔物に縋り付くと、血まみれになりながらも涙を流して悲しんでいる。まるで互いに譲れぬ信念の果て親友を殺した男のようだ。

ブシユウウツ！

また一体、魔物が切り裂かれて首と胴体が泣き別れして血を大量に首元から吹き出しながら倒れ伏す。

「ごめんなさいっ！　ごめんなさいっ！　それでも私は生きるためにこうするしかないのよお！」

首を裂いた小太刀を両手で握り、ガタガタ震えると地面へ力なく崩れ落ちるハウリア族の女。まるで狂愛の果て、愛した人をその手で殺めた女のようだ。

こんなのはほんの一部分で、あちこちで色々なドラマ的な光景が生まれている  
この現状を眺めながら、そういえば南雲がハート〇ン軍曹式の扱きに変えた理由はこんななんだつたよなあ……とやつとで思い出した。

先が思いやられる……と、遠い目をして切り株に腰かけて頭を押さえる。そんな俺のもとに女性のハウリアが歩み寄ってきた。

「あの……大丈夫で——ツ？」

突然、その場から飛び抜く……が、上手く着地できなかつたのか、横に転がつて足を擦りむいてしまつたようだ

「お、おい……何があつたんだ、大丈夫か？」

疑問に思いつつも近づいて手を差しのべようとするが、それ以上進まないでえ！　と悲痛な顔で言われてしまつたので、歩みを止めて指を指した方向を目で追う。

そこにはあつたのは花だつた。

「——この花がどうかしたのか？」

「良かつた……あ、いえ……この花を踏んでしまいそうになつたので——」

「花……？　まさか——」

「はい！　間一髪で気がついて良かつた。昨日教えてもらつた緊急用？　の避け方が無かつたら危なかつたもの」

その言葉に、自らが教えた回避方法は決してこんな事の為に教えたのではない……と、青筋を浮かべる

「なるほど、その花のせいで妙に飛び跳ねたり、無駄なステップを踏んだりしていたのか？　お前らは？」

そうなのである。先程から妙なタイミングで飛び退いたり、移動したり、転がつたり

していく疑問には思っていたが、教えて二日目だからだと気にしないようにしていたのだが

「いえいえ、そんなことはありませんよ」「はあ、だよな……」

若いハウリアの男が苦笑いしながら答え、流石にないよな……と安心からか頬が緩む

「ええ、花だけでなく、虫達にも気を遣います。突然出てきたときは焦りますよ。何とか踏まないよう避けますがね……コウスケさんから教えていただいた動きがなければ危ない場面が何度もありましたから助かっています！」

本当に助かっているといった様子で笑いかけてくる若いハウリアの男に、ふふふ……と、不気味に笑いながら片手で顔を覆い天を仰ぐ。俺のそんな様子に、何か悪いことを言つたかとハウリア族達が一齊にオロオロと顔を見合させた。

そんな事気にせず、顔に当てていた手を刀に置くと、全力でにつこりと作つた笑顔を見せる。

急に笑顔になつた俺の様子を不思議に思いつつ、ハウリア族達も一緒に笑顔になつた

シヤキンツ！ グシャアツ！ バキバキツ！ ズズーンツ

「――――ヒイツ!?」

いきなりそこらに生えていた花、虫が一瞬で消し炭になり、木が何本か倒れた。勿論それを成したのは俺だ

「よお～し……これで心置き無く訓練できるなあ？」

ガタガタと震えながらも、一人のハウリアが声をあげる

「む、虫や花だつて生きて……ヒイツ!?」

睨まれた男のハウリア族が悲鳴をあげる

「まだ言うか貴様ら？ ……つーかよ今の現状理解できてるよな？ いや、もう一度だけ教えてやるから無駄に長いその耳でよく聞け、十日後までに何の成果も上げられなかつたらハウリア一族は全滅。

俺らはどうでも良いが、生き抜くために死ぬ氣で頑張るつて話になつた。そうだよな？ それを“花”だの”虫達”だと……ハハ、気が付かなかつた俺の落ち度だ。戦い方を教えるとかそんなレベルじゃなかつたんだよコイツらは……フフフ

「コ、コウスケさん!? 一体どうしてしまつたというのですか!?」

血走つた目と青筋を浮かべた顔で早口にそう言いながら不気味に笑うコウスケにハウリア族達はより一層ガタガタ震えを加速させる。

「今から貴様らは薄汚い”ピツー”共だ。この先、”ピツー”されたくなかったら死に物狂いで魔物を殺せ！ 今後、花だの虫だのに僅かでも気を逸らしてみろ！ 貴様ら全員”ピツー”してやる！ わかつたら、さつさと魔物を狩りに行け！ この”ピツー”共が！」

俺からの汚い暴言に硬直するハウリア族。そんな彼等に俺は容赦なく苦無を放つ。

トンツ！ トンツ！ トンツ！ トンツ！ トンツ！ トンツ！ トンツ！ トンツ！ トンツ！

顔のすぐ横や足下、股下を通つていく苦無に、ひいー！ と蜘蛛の子を散らすように樹海へと散つっていくハウリア族。

「十四は最低でも殺して持つてこい、”ピツー”共！ 規定に達したものには睡眠をプレゼントしてやる。達しない者には寝る資格はない！ 死ぬ氣でやれ薄汚い”ピツー”以下の”ピツー”共が！」

その日、あちこちで”ピツー”を入れなければいけない用語とハウリアの悲鳴や怒

声、銃弾や苦無が飛び交つたのだつた。

霧が弱まるまで、残り八日間――

# 兎人族ハウリアの……

あれから九日間、俺と南雲によるハート○ン式のハードな訓練で彼らハウリア族は見違える程に成長……いや、豹変した。

今から三日前に、南雲と俺で別れて指導していた部隊を合流させ、一緒に訓練をした。南雲は俺が無理言つて頼んだ武器を作成するために指導係から抜けてしまつたので一人で調きよ——指導するのは骨が折れたが、立派な戦士へと生まれ変わつた……

「卿Lord、お題の魔物……ハイベリアの尻尾です。お納めください」

俺の目の前には魔物の尻尾が大量に積み重なり、殆どのハウリア族達が跪いている  
「あういや、うん……よくやつたな。でも俺は五人一組で二体ずつって言わなかつたか

？」

「……いえね？　途中でお仲間さんがワラワラ沸いてきやがりまして、しかもコイツら生意氣にも殺意を向けてきやがつたので……わからせてやつたまででさあ」

そう答えたのはカムだ。始めに見た頃の温厚な彼は何処へやら……南雲の訓練を受けて勇ましい顔つきと荒い言葉遣いになつてゐる。

「そうなんですよ。こいつら魔物の分際で生意気な奴らでした」

「きつちり落とし前はつけました。一体たりとも逃してませんぜ？」

「ウザイ奴らだつたけど、いい声で鳴いてくれたわねえ……フフツ」「見せしめに晒しとけばよかつたか……」

「まあ、バラバラに刻んでやつたんだ、それで良しとしどうぜ？」

若い女性のハウリア族も刃の峰をチロリと舐めながら答え、四人のハウリア族も不敵に笑いながら答えた

「……おい」

俺が指導した隠密部隊のハウリア族達に説明を求める一斉に土下座をしだした  
 「Lord卿、申し訳ありません！」止めようとしたのですが……あの”ピツー”共、あろうことかハジメ殿ボス<sup>卿</sup>とコウスケさんが与えてくれた武器を体当たりで弾き飛ばしやがりましてッ！”どんな時でも冷静に”とのお言葉を無下に……まだまだ未熟でした！」

「ヤオ……いや、自分で気付けたんだ……成長したじやないか」

俺が指導した中でも選りすぐりで上位に入り込むこの男……ヤオの肩に手を当てて励ましの言葉を送る

「勿体なきお言葉……ですが卿よ、俺の名前は”幻武のヤオゼリアス”とお呼びください。せつかく付けていただいたのです。どうか、この名で……」

その言葉に、俺は頭を抱えて項垂れる

「くっそ、つい呼んじまつた二つ名（厨二）がこんな面倒な事になるとは……」

このような事になつてしまつた原因はつい二日前……ラナやヤオ、バル君の名前を聞いた時に、うつかりと二つ名（厨二）を呴いてしまつたのだ。そのせいで興味を持つて集まつた全員に二つ名を付ける羽目になり、なりを潜めていた”深淵卿”が顔を出し、色々とやらかしてくれたのだ

「おーい、遠藤」

南雲がユ工とシアを連れて此方に歩いてくる。シアは頬が緩みっぱなしで、デレデレしながら俺に手を振つている……と思つたら、バシュツと意外に早い速度で駆けてきた

「コウスケさん！ 私も三人の旅に着いて行つてもいいでしようか!?」

「あ？ ……南雲とユ工は——」

「二人からは勿論、許可をもらいました！」

ほう……と感心しながらもカム達と話している南雲にアイコンタクトを取ると、ため

息をつきながら頷かれた。

「南雲とユ工が納得してるなんなら俺に確認しなくても良くないか？ どんな理由でも二人が納得したなら俺は別に構わないしな」

俺がそう答えると、シアは何故か納得のいっていないとといった顔で俺を見る。

——なんで？

「私が着いていきたい一番の理由は……えっとお……その……」

そこでシアは顔を真っ赤にしてモジモジしだした。

「いや、お前が来る途中……馬車に乗ってる時に俺達に協力したいからって宣言してたろ？ それに元々、一族を離れる予定だつたとも言つてたし、別にいわなくとも——」「くくっ！」

え、なんでそんなにキツと睨むの？ あれ……南雲とユ工、ハウリア族達がうわあつて感じの顔してるし……「うわあ……」いや、実際に言いやがつたけど！？  
「コウスケさんの傍にいたいからですっ！ しゆきなのでえっ！」

言つちやつた、そして噛んじやつた！ と、あわあわしているシアを前に、俺は当然の反応で返す

「はあっ!? なんでっ!?」

「気付いて無かつたんですうかあ?!」

「氣付かねえよ！ と言おうとかと思つたが、南雲とユ工の呟きで遮られた  
「鈍感つてレベルじやねえわアイツ……どう考へてもバツキバキにフラグ建てまくつて  
たろ」

「……コウスケにも春が來た。私たちも遠慮せずイチャつける……！」

フラグ？

えーと、シアをティラノ擬きから助けて……ハウリア族の窮地も南雲と二人で助けて  
……ハウリア族を処刑させないように立ち回つて、ハウリア族を十日間かけて鍛えたと  
……わお

「いや……心当たりは無いわけでもないが、そんなの一時的にかも知れないだろ？」

「そんな事ないです！ 私は……コウスケさんと一緒にいられるように、着いて行ける  
ようにユ工さんと特訓して強くなつたんです！」

「……凄い頑張つてた」

シアの言葉にユ工が頷きながら肯定した

俺は一体どうすればいいんだこれ……ティラノ擬きから救つたのは偶然だし、一族を助けたのも鍛えたのも必要だからだ。なにより俺は八重樫が好きだし――

そこで俺はやつと気づいた。

なんか俺つて”直感”で八重樫が俺に好意持つてるって知った時に、南雲のヒロインだからって理由で遠慮してたけどさ……別にしなくて良くない？　俺が奈落に落ちた時点での世界は原作と別物だし。

八重樫に次会つた時に告白しようと決めながら、シアに返事を返す

「着いてくるのは構わないが、俺には好きな人がいるから告白には応えてやれないぞ？」

俺の勝手な行動のせいでフラグ建てたくせに断るなんてクズゴミ最低野郎だけどマジですまん。シアは嫌いじゃないし、好きだが……恋愛感情じゃないと思うんだよな。それに付き合う資格なんてないし……

「そうですか……でも、未来は絶対じゃないんです！　最悪、一番になれなくとも二番目の大切な人になれれば十分です！　隙あれば本命を狙いますが！」

シアの返答はというと……フラれてもそこまでショックではないようだ。しかも自分は二番目でも構わないと言つている……驚きで黙つていると、それに気がついたシアが笑みを浮かべながら理由を答えた

「“未来視”で結果をみて断られるのはわかつてました」「は？　じやあなんで――」

シアの言葉にさらに困惑していると続けて答えた

「知らないんですか？　未来は絶対じやがないんですよ？」

“未来視”を持つている者だからこそその言葉なのだろう。努力次第で未来を変えられると信じているようだ

「……一番は絶対に無理だな」

「卿！　<sup>ロード</sup>報告いたします！」

突然一人のハウリア族が木の影から現れて、そう言つた。どうやら残つて監視をしていた者らしい

シアは、卿？　と首をかしげ、今ごろ気がついたのか、カムや一族の様子を見て驚いている。

「リキか……どうした」

「私のことは”霧雨のリキッドブレイク”とお呼びください」

「……報告とは？」

またそれか……と、思いながら続きを促す

「大樹へヒルートに武装した熊人族の集団を発見！　おそらく我々に対する待ち伏せと

判断します！」

「わかつた……よく見つけたな」

「はつ！ 勿体なきお言葉!!」

「<sup>ロード</sup>卿、我々にお任せ願えませんか？」

南雲と話終え、カムが此方に歩いてきて言つた

「大丈夫なのか？」

「はい、この十日での成長を試すいい機会ですので……」

「できるんだな？」

「勿論です」

「ならば任せよう」

「聞け！ ハウリア族諸君！ 勇猛果敢な戦士諸君！ 昨日を持つて糞蛆虫を卒業した  
のだ！ 新しき名を貰い受け生まれ変わった！ お前達はもう淘汰されるだけの無価  
値な存在ではない！ 力を以て理不尽を粉碎し、知恵を以て敵意を捩じ伏せる！ 一人  
一人が最高最強の戦士だ！ 私怨に駆られ状況判断も出来ない”ピツー”な熊共にそ  
れを教えてやれ！ 奴らはもはや唯の踏み台に過ぎん！ 唯の”ピツー”野郎どもだ

！ 奴らの屍山血河を築き、その上に最弱の部族の名を返上してやれ！ ハウリア族が生まれ変わった事をこの樹海の全てに証明するのだ！」

「「「「「「「S i r , y e s , s i r !!」」」」」」

「答える！ 諸君！ 最強最高の戦士諸君！ お前達の望みはなんだ！」

「「「「「「殺せ!! 殺せ!! 殺せ!!」」」」」」

「お前達の特技は何だ！」

「「「「「「殺せ!! 殺せ!! 殺せ!!」」」」」」

「敵はどうする！」

「「「「「「殺せ!! 殺せ!! 殺せ!!」」」」」」

「そうだ！ 殺せ！ お前達にはそれが出来る！ 自らの手で生存の権利を獲得しろ！」

「「「「「「A y e , a y e , S i r !!」」」」」」

「いい気迫だ！ ハウリア族諸君！ 俺からの命令は唯一つ！ サーチ&デストロイ！

行け!!」

「「「「「「Y A H A A A A A A A A A A A A A A A A A A ! ! ! !」」」」」」

凄まじい気迫と共に霧の中に消えていくハウリア族達。その中でヤオを呼び、一言だけある事を伝えるとヤオも走り去っていく。

顔つきや目付き、言動など変わり果てた家族を再度目の当たりにし、崩れ落ちるシアの泣き声が虚しく樹海に木霊する。流石に見かねたのかユエがポンポンとシアの頭を慰めるように撫でている。

「……流石は遠藤だな」

「カム含めた強襲部隊はお前の教えが強すぎて抜けきつてないから俺のせいじゃない」なんか南雲に全部俺がやつた事にされそそうだったの言い返す  
しきしく、めそめそと泣くシアだが、一人の少年を見つけると、咄嗟に呼び止めた。

「バルくん！ 待って下さい！ ほ、ほら、ここに綺麗なお花さんがありますよ？ 君まで行かなくても……お姉ちゃんここで待つていませんか？ ね？ そうしましょ？」

諦めきれないのか、信じられないようで、まだ幼い彼だけでも元の道に連れ戻そう呼び止めたらしい。生前（死んでないけど生まれ変わったって意味）好きだった綺麗な花を指差して必死に説得している。

シアの呼び掛けに立ち止まつた少年は、「ふう～」と息を吐くと肩を竦めた。

「姐御、あんまり古傷を抉らねえでくだせえ。俺は既に過去を捨てた身。花を愛でるような軟弱な心は、もう持ち合わせちゃあいませんぜ」

ちなみに、パル少年は今年十一歳だ。

「ふ、古傷？　過去を捨てた？　えっと、よくわかりませんが、もうお花は好きじやないんですか？」

「ええ、過去と一緒に捨てちましたよ、そんな“ピツー”な気持ちは」

「そんな、あんなに大好きだつたのに……」

「ふつ、若さゆえの過ちつてやつでさあ」

何度でも言おう、パル君は今年十一歳だ。

「それより姐御」

「な、何ですか？」

ボーッと、意識が自然と現実逃避を始めそうになるシア。少年の呼び掛けに辛うじて返

答する。

「俺は過去と一緒に前の軟弱な名前も捨てました。今は卿に頂いた誇り高き名前があります。」

バルトフェルド……『必滅のバルトフェルド』と呼んでくだせえ』

「誰!? バルトフェルドってどつから出てきたのです!? ていうか必滅ってなに!?」

「おつと、すいやせん。部下が待つてるのでもう行きます。では!」

「あ、こらつ! 何が“ではつ!”ですか! というか部下つてなんですか!? まだ、話は終わつて、つて早つ! 待つて! 待つてくださいい」

崩れ落ちたまま霧の向こう側に向かつて手を伸ばすシア。答えるものは誰もいない、何故なら彼女の家族は皆、戦場に向かつてしまつたからだ。ガツクリと頃垂れ、再びシクシクと泣き始めたシア。

そんな彼女を微妙な表情でみたユ工は、南雲に視線を転じるとボソリと呟いた。

「……流石ハジメ、人には出来ないことを平然とやつてのける」

「いや、だから何でそのネタ知ってるんだよ………というか俺じやない遠藤だ。遠藤が悪い」

「止めろコラ。俺は片方だけだろ、もう片方の部隊は二日くらいしか指導してないぞ」「…………一日でここまで洗脳を………すげい」

「…………いや、まあ………うん」

「てか卿ロードつて——くくつ」

「………やるか？ ボス」

青筋を浮かべながら南雲に向き合いながら刀に手をかけ、キレ気味に言うと

「実際ボスっぽい役回りだしな俺、言われてもなんとも感じないな」

ニヤニヤしながらホルスターに手を伸ばす南雲

しばらくの間、ハウリア族が去つたその場には、シアのすすり泣く声と、戦闘音が響いたのだった。

# 失敗は成長の元

シアが一族家族のあまりにもな豹変ぶりに落ち込んでから数分……俺たちを必死に（それはもう命懸けで）止め、カム達が駆けて行つた場所へと向かう

さて、今頃彼らはどうなつてゐるのか……

ハウリア族達は俺と南雲による地獄のような特訓よつて、身体能力向上は勿論のこと、敵を傷つけたり殺したりすることに戸惑いが無くなつてゐる。元々優れていた気配の強弱の調整も俺の手によつて何段階も成長させた

更に一族全体を家族と称する程の絆を持ち合わせた連携が合わされば……勇者倒せるかな？ まだ無理か

そこに、俺の頼みで改造された南雲お手製の武器も色々あるのだ。……あれ？ オーバーキルじゃないこれ……まあ、大丈夫か

そんな彼等が、たかが亞人最強（笑）の熊人族と戦つたとしたらどうなるか……

そんな目の前の戦闘光景を見ればわかるだろう……いや、戦闘光景じやねえなりやあ、一方的な蹂躪だわ。

「ほらほらほら！ 気合入れろや！ 刻んじまうぞお！」

「アハハハハハ、豚のように悲鳴を上げなさい！」

「汚物は消毒だあ！ ヒヤハハハハツハ！」

ハウリア族の哄笑が響き渡り、複数の斬撃が急所へと的確に振るわれる。容赦なく命を刈り取つてくる一撃と“ピツー”を連呼している兎人族らしからぬ言動に動搖を見せてしまつた熊人族は、情け容赦なく斬り伏せられている。

熊人族の一人が頭に矢の狙撃を喰らつて倒れると、聞き覚えのある声がした

「一撃必倒！ 次もド頭吹き飛ばしてやりまさあ！」

Load  
卿から頂いた“必滅”的名にかけ

て！」

あんなに幼く可愛らしかった男の子のパル……必滅のバトルフェルド君だ。彼はヒやははー！　と、一人、また一人……と熊人族を仕留めていつている

因みに彼の最近の口癖になつてしまつた「一撃必倒」であるが、最初は「狙い撃つぜ！」が口癖だつたのだ。それを、南雲に止められてしまい、忘れ去られた花への愛着が戻つてしまいそうになるほどに落ち込んでいた。

そんなんパル君化しかけていた彼を助言しに現れたのが浩介であり“必滅”的名付け親も浩介だ。

この状況をみたシアは頭を抱えて「もう私の知つている一族はいないんですよ」とぶつぶつ呪文のように唱え出してしまつた。彼女に申し訳ない気持ちで同情しつつもスルーして、相手さんの出方を観察する……どうやらパニック状態に陥つているようだ

「レギン殿！　このままではっ！」  
「一度撤退を！」

「しんがり殿は私が務めつグボオツ!?」  
「トントオ!?」

一時撤退を進言している部下に、族長を再起不能にされたばかりか部下まで殺られ、怒りと驚きで判断に迷い、指揮を執れてい部隊長(仮)ないレギン。その判断の遅さを逃すほどハウリアのスナイパーは甘くはない。殿を申し出て再度撤退を進言しようとしたトントと呼ばれた部下のこめかみを矢が貫いた。

それに動搖して陣形が乱れるレギン達。それを好機と見てカム達が一斉に襲いかかつた。

霧の中から矢が飛来し、足首という実にいやらしい場所を正確に狙い撃つてくる。それに気を取られると、首を刈り取る鋭い斬撃が振るわれ、その斬撃を放った者の後ろから絶妙なタイミングで刺突が走る。

だが、それも本命ではなく、その背後からハウリア族が現れ致命の一撃を放つ。どうやら教えた通りに連携と気配の強弱を利用してレギン達を翻弄できているようだ。

しばらく粘ったレギン達だが、混乱から立ち直る前に満身創痍となり武器を支えに何とか立っている状態まで追い込まれてしまつた。

連携と援護射撃を利用した波状攻撃に休む間もなく、全員が肩で息をしている。一箇所に固まり大木を背後にして追い込まれたレギン達をカム達が取り囲んでいる。

「流石だ。ここまでになるとは……成長したな」

ホロリと涙を流しながら戦いを見守る俺に南雲とユエガ若千引いている。

「コウスケの隠れた技能は洗脳？…………それか本当に闇魔法の……」

「一人一人の気配の操作、攻撃の精度や戦略……元から良かつた連携もここまでこの域にするとはな。さすが遠藤——」

ユエガの言葉に否定の言葉で返し、南雲の言葉にはカム達と共に自分も誉められて気分を良くした……が、

「いやあ……本当に俺にはできないなあ……一つ名（厨二）も付けたりしてなあ？ 深淵卿様よお？」

「グフツ……てめえ」

どうやらそこにツボるようで、ニヤニヤしながら言う南雲に青筋を浮かべるて睨むが今は我慢する。手は打つてあるのでカム達の活躍を見るとしよう

「どうした。"ピツー"野郎共！ この程度か！ この根性なしが！」

「最強種が聞いて呆れるぞ！ この "ピツー" 共が！ それでも "ピツー" 付いてるのか！」

「さつさと武器を構えろ！ 貴様ら足腰の弱つた "ピツー" か！」

兎人族と思えない"ピツー"な罵声が浴びせられ、戦慄の表情を浮かべている熊人族達。

中には全身をガタガタと震えさせ、涙目で「もうイジメないで？」と訴えて降参のボーズをとっている。当然、ヤオの手によつて氣絶させられた

「クツクツクツ、何か言い残すことはあるかね？ 最強種殿？」

カムが悪人面で皮肉げな言葉を投げかける。跪いている熊人族を見下ろし、ニヤニヤと楽しそうに笑みを浮かべている。

「ぬぐう……」

レギンは、カムの物言いに悔しげに表情を歪める。どうやらやつとで混乱からは立ち直れたようでその瞳には本来の理性が戻っているようだ。まだまだ怒りの炎は残っているものの、生き残っている部下たちだけでも存命させなければならないという責任感で正気に戻ったようだ。

「……俺はどうなつてもいい。煮るなり焼くなり好きにしろ。だが、部下は俺が無理やり連れてきたのだ。見逃して欲しい」

「なつ、レギン殿!?!」

「レギン殿! それはつ……」

レギンの言葉に部下達がざわつき始めた。自分の命と引き換えに部下達の存命させるためだろう。動搖する部下達にレギンが一喝した。

「だまれつ! 俺はどうなつてもいい。兎人……いや、ハウリア族の長殿よ。全ては同族を驅り立てた俺の責任だ。勝手は重々承知。だが、どうか、部下だけは見逃してくれ……頼む……」

武器を手放し跪いて頭を下げるレギン。それを部下達は何も言えずに立ち尽くしている。必死に我慢しているのかプルプル震えている

頭を下げ続けるレギンに対するカム達ハウリア族の返答は……

「……だが断る」

という言葉と投擲されたナイフだった。

「うお!？」

流石はこの場を率いているだけあつて咄嗟に身をひねり躱すレギン。しかし、カムの投擲を皮切りに、一斉に矢やら石などが高速で撃ち放たれた。大斧を盾にして必死に耐え凌ぐレギン達に、ハウリア達は哄笑を上げながら心底楽しそうに攻撃を加えている。

「なぜだ?！」

なんとか声を搾り出し、問答無用の攻撃の理由を問うレギン。

「なぜ？ 貴様らは敵なのだ。殺すことにそれ以上の理由が必要か？ それに何より……貴様らの傲慢を打ち碎き、嬲るのは楽しいのでなあ！ ハツハツハツ！」

「——なつ!?」

カムの言葉通り、ハウリア達は実に楽しそうだった。

突っ込んで首を断つだけで終わるものを、弓等の中遠距離武器を安全圏から嬲るように放つたり、小型ナイフを投擲するだけ……それをニヤつきながら行っているのだ。相手が苦しんでいるのを心から楽しんでいるように……懸念していたことだが、初めての人族、それも同胞たる亜人族を殺したことに心のタガが外れてしまつたようだ。要は、完全に暴走状態ということだ。

攻撃は更に激しくなり、レギン達は身を寄せ合つて必死に耐えているが、もはや既に限界。致命傷を避けていいるというよりは避ける以前に致命傷になる攻撃がこないが満

身創痍だ。次に攻められれば終わりだろう。

カムが口元を歪めながらスッと腕を掲げる。ハウリア達も狂的な眼で矢を、石をつがえた。レギンは、諦めからか身体の力を抜いて目を瞑る。死ぬ覚悟をしたようだ

南雲が仕方なくホルスターに手をかけようとしたところを手で制してとめる。

そうこうしているうちにカムの腕が振り下ろされ、一斉に放たれる矢と石。何か瞬間、俺らの横でをシアが、バヒュツ！ と横切った。そして――

「いい加減にしなさあ～い！」

ズドオオオン!!

白き鉄槌が全てを吹き飛ばした

「は？」

思わず間抜けな声を出してしまったレギン。だがそれは無理もないだろう。何せ、死を覚悟した直後、目の前に一瞬で青白い髪のウサミミ少女が現れ、槌を地面に叩きつけてクレーターを作ったのだ。しかもその際に発生した衝撃波で飛んできていた矢や石を吹き飛ばしたのだ

登場したのは、もちろんシアである。振り下ろした槌をヤンキーのように肩に持つていき、トントンしている。たしかあの槌は南雲が作った見た目によらず相当な重量を誇っているのだが、まるで重さなど感じさせずブオーンッと振り回し、ビシッとカムに向かつて突きつけた。

「もうっ！ ホントにもうっですよ！ 父様も皆も、いい加減正気に戻つて下さい！」

そんなシアに、最初は驚愕で硬直していたカム達だが、ハツと我を取り戻すと責めるような眼差しを向けた。

「シア、何のつもりかは知らないが、そこを退きなさい。後ろの奴等を殺せないだろう？」

「いいえ、退きません。これ以上はダメです！」

シアの言葉に、カム達の目が細められる。が、そこでもまた新たな乱入者が数名ほどシアの両隣へと現れた。

その乱入者とは、俺がハウリア族達が移動を始めている時に呼び止めたヤオ達だ。  
「ええ、退くことはできませんな族長……いいえ、”深淵蠢動の闇狩鬼カームバンティス・エルフアライト・ローデリア”」

「狂った仲間を正しき道に導くのは当然のことよ」

「ヤオさん、それにラナさ……というか深淵蠢動って何?!」

「シアだけでなく、”幻武のヤオゼリアス”、”疾影のラナインフェリナ”……狂った仲間とはどちらの事だ？」

我らの邪魔をし、敵対しているのはお前たちではないか」

「敵対？　いえ、別にこの人達は死んでも構わないです」

「その通り、この”ピツー”共はどうでもいい」

「ええ、問題なのはこの”ピツー”共ではないわ」

「「「どうでもいいのかよ?」」」

てつきり助けに来てくれたのだと考えていた熊人族達は、シア達にツツコミを入れる。

「当たり前です。殺意を向けて来る相手に手心を加えるなんて心構えでは、ユエさんの特訓には耐えられません。私だって、そんな甘い考えは既に捨てました」  
 「ふむ、では何故止めたのだ？」

カムが尋ねる。ハウリア族達も怪訝な表情だ。

「これは相當に重症だな」

「シア、貴女の口から教えてあげなさい」

「はい！　お二人に代わって言わせてもらいますが、今の父様達が正気ではないからです！　このまま止めなかつたら戻つてこれない所まで墮ちてしまうからです！」  
 「我らが正気ではない？　墮ちてしまう？」

どうやら本当に気がついていないようで、訳がわからないという表情のカムにシアは

言葉を続ける。

「そうです！ 思い出して下さい。ハジメさんやコウスケさんは一旦敵だと認識すれば容赦しませんし、問答無用で、無慈悲ですが、魔物でも人でも殺しを楽しんだことはなかつたはずです！ 訓練でも、敵は殺せと言われても楽しめと言つていましたか!?」

「い、いや、我らは楽しんでなど……」

「……今、父様達がどんな顔しているかわかりますか？」

「顔？ いや、どんなと言われてもな……」

シアの言葉に、周囲の仲間と顔を見合させだすハウリア族。一呼吸置いたシアは続きを話す

「……まるで、私達を襲つてきた帝国兵みたいです」  
「ツ!?

実の娘から告げられた衝撃の言葉に瞳に宿つた狂氣が吹き飛んだらしい、武器を落として頭を抱える。家族を奪つた帝国兵彼等と同じといわれてしまい、耐え難いショックを受

けているようだ

「シ、シア……私は……」

「ふう、少しは落ち着いたみたいですね。よかつたです。最悪、全員ぶつ飛ばさなきや  
いけないかもと思つていたので」

シアが大槌をフリフリと動かす。シアの指摘と、ついでに大槌の威容に動搖している  
ハウリア達に、シアが少し頬を緩める。

「まあ、初めての対人戦ですし、今、気がつけたのなら、もう大丈夫ですよ！ 大体、ハ  
ジメさんやコウスケさんも悪いんです！ 戰える精神にするというのはわかりますが、  
あんなのやり過ぎですよ！ それに変な二つ名？ も付けて恥ずかし——」

今度は、南雲と俺に対してぶりぶりと怒り出すシア。その背後では熊人族がどさくさ  
紛れて逃げようとしていた。当然、逃がすわけがない

苦無を当てて止めようかと思つてぶん投げるが、それよりも少し速く一発の銃弾が飛

んでいく

シアの背後で「ぐわっ!」という呻き越えと崩れ落ちる音がする。そう言えば、すっかり存在を忘れていたとシアとカム達が慌てて背後を確認すると、額を抑えてのたうつレギンの姿があつた。

「なにドサクサに紛れて逃げ出そうとしてんだ? 話が終わるまで正座でもしとけ」

流石に速撃ちには勝てなかつたようで南雲がレギン達に銃撃したようである。但し、何故か非致死性のゴム弾だつたが。俺の苦無はレギン<sup>的</sup>が倒れてしまつた事で背後の木にトンつと突き刺さつた

ハジメの言葉を受けても尚、逃げ出そと油断なく周囲の様子を確認している熊人族に、ハジメは“威圧”を仕掛けて黙らせた。ついでに俺の”影操術”で木に吊つておく。そんな彼等を尻目に、シア達の方へ歩み寄る南雲とユエ

南雲はカム達を見ると、若干、気まずそうに視線を彷徨わせ、しかし直ぐに観念した

ようにカム達に向き合うと謝罪の言葉を口にした。

「あく、まあ、何だ、悪かつたな。自分が平氣だつたもんで、すっかり殺人の衝撃つてのを失念してた。俺のミスだ。うん、ホントすまん」

ポカンと口を開けて目を点にするシアとカム達。まさか素直に謝罪の言葉を口にするとは予想外にも程があつた。

「ボ、ボス!? 正氣ですか!? 頭打つたんじや!?

「メデイーック! メディ——ク! 重傷者一名!」

「ボス! しつかりして下さい!」

故にこういう反応になる。青筋を浮かべ、口元をヒクヒクさせる南雲

今回のこととは南雲自身、自分のミスだと思つていたようで、ちゃんと謝罪をしたのだが……帰ってきた反応は正氣を疑われるというものだった。南雲はキレかけるものの、グッと我慢したようだ。

取り敢えずこの件は脇に置いておいて、レギンのもとへ歩み寄ると、その額にドンナーの銃口をゴリッと押し当てた。

「さて、潔く死ぬのと、生き恥晒しても生き残るのどどっちがいい？」

南雲の言葉に、熊人族よりもむしろハウリア族が驚きの目を向ける。セリフからして場合によつては見逃してもいいと聞こえるからであろう。俺としては殺さなかつた時点で何かしらあると思っていたが……ようやく合点がいつた。カム達は意図に気がついていないようで、「やはり頭を……」と悲痛そうに言うので南雲の額に青筋が量産されていく。

彼レギンも意外そうな表情で南雲を見返した。ハウリア族をここまで豹変させたのは間違いなく眼前の男だと確信していたので、その男が情けをかけるとは思えなかつたのだろう。

「……我らを生かして帰すというのか？ だが、無条件で返すとは思えぬ……望みはな

んだ?」

「ああ、察しがよくて助かる 一つ、伝えてほしい事があるだけだ」「伝えてほしい事だと?」

見逃す条件が伝言だと知り、レギンのみならず周囲の者達が一斉にざわめきだした。  
「頭を殴れば未だ間に合うのでは……」「んじやあ俺は『デコピンかな』」シアに混じつて  
俺もふざけて提案すると、カム達が賛同しはじめた。

ハウリア族達にはキツイ仕置をすることを確定として、察しておきながら先程のお返  
しとばかりに妙な提案をし、話をややこしくしている遠藤<sup>バカ</sup>を殴りたい心を落ち着かせ、  
頑張つてスルーするハジメ。

「ああ、そうだ。『貸一つ』とだけな」

「……ッ!? それはっ!」

「で? どうする? 引き受けるか?」

伝言の意味を察したようだ。『貸一つ』それは、襲撃者達の命を救うことの見返りに何時か借りを返せということだ。

今回のレギンの事を含め、ジンの場合も一方的に仕掛けておいたにも関わらず返り討ちにあり、今回は命を見逃して貰うのだ。長老会議で不干渉を結んだ事になつており、伝えれば長老衆は無条件で南雲の要請に応えなければならなくなる。最悪、南雲や俺と事を構える事態になる

長老会議の決定を無視した挙句、負債を背負わせる、しかも最強種と豪語しておきながら半数以上を討ち取られての帰還……南雲の言う通りまさに生き恥だ。

流石は未来の魔王、殺さなかつたのは未だに詳細が分からぬ七大迷宮の詳細がわからぬ以上、口伝で創設者の言葉が未だに残つてゐるくらいなので用事が出来るかもしない……という万一に備えての保険のようなものだつた。

だが、そこで終わらないのがハジメクオリティー、表情を歪めるレギンに追い討ちをかける。

「それと、あんたの部下の死の責任はあんた自身にあることもしつかり周知しておけ。

ハウリアに惨敗した事実と一緒ににな

「ぐつう」

己の引き起こした事で仲間の多くを無くし、長老方にも迷惑をかけようとしている始末、頭を抱えて悩むレギンに、南雲は容赦なくゴリッと銃口を押し付け、選択を迫る。

「五秒で決める。オーバーする毎に一人ずつ殺していく。『判断は迅速に』。基本だぞ？」

「イーチ、二一、サーンー」

「わ、わかった。我らは帰還を望む！」

「そうかい。じゃあ、さつさと帰れ。伝言はしつかりな。もし、取立てに行つたとき惚けでもしたら……」

南雲の全身から、強烈な殺意が溢れ出す。もはや物理的な圧力すら伴つていそうだ。ゴクツと生睡を飲む音がやけに鮮明に響く。

「その日がフェアベルゲンの最後だと思え」

悪魔の……いや、魔王の所業に俺の隣にいるハウリア族から、「いつも通りのハジメさんに戻りましたね！ コウスケさん！」とか「ボスが正気に戻られたぞ！」とか妙に安堵の混じつた声が聞こえ、南雲の顔が物凄い事になつていて。必死に耐えているようだが我慢の限界のようだ

暗い表情で霧の向こうへと熊人族達が消えていき、それを見届けると……南雲はくるりとシアとハウリア族の方を向く。

もつとも、俯いていて表情は見えない。が、カム達は狂喜に落ちしまつた事の弁明をするために土下座をしていて、その雰囲気に気がついていない。シアだけが、「あれ？ コウスケさん？」これってヤバいやつじやあ……いない!? と冷や汗を流している。

勿論、俺を含めた数名のハウリア族は、とばつちりを喰らわないよう瞬時に離脱している

南雲がユラリと揺れながら顔を上げた。その表情は満面の笑みだ。だが、細められた

眼の奥は全く笑っていなかつた。しかも口元がヒクついている。返事がなかつたボスを不審に感じたカムが顔を上げ、ようやく様子がおかしいと気づいたカムが恐る恐る声をかける

「ボ、ボス？」

「うん、ホントにな？ 今回は俺の失敗だと思っているんだ。短期間である程度仕上げるためとは言え、歯止めは考えておくべきだつた」

「い、いえ、そのような……我々が未熟で……」

「いやいや、いいんだよ？ 俺自身が認めているんだから。だから、だからさ、素直に謝ったというのに……随分な反応だな？ いや、わかってる。日頃の態度がそうさせたのだと……しかし、しかしだ……このやり場のない気持ち、発散せずにいられないんだ……わかるだろ？」

「い、いえ。我らにはちよつと……」

カムも「あつ、これヤバイ。キレイいらつしやる」と冷や汗を滝のように流しながら、ジリジリと後退る。ハウリアの何人かが訓練を思い出したのか、既にガクブルしながら泣きべそを搔いていた。

とその時、「コウスケさんHe1p!」と、シアが一瞬の隙をついて俺の下へと移動しようとしたが、影に足を捕まれ、顔面から地面に激突して気絶した。

「——よし、助けた」

二つ名のことを持つていたので、憂さ晴らしが済んだことで満足気な顔になつた俺を見て、ドンナーを構えていた南雲はチツと舌打ちをするとホルスターに戻し、両手をポキポキ鳴らすと——怒声と共に飛び出した。

「取り敢えず、全員一発殴らせろ！」

わあああああ——!!

ハウリア達が蜘蛛の子を散らすように一斉に逃げ出す。一人も逃がさんと後を追う南雲。しばらくの間、樹海の中に悲鳴と怒号が響き渡った。

後に残つたのは、地面に突つ伏して動かなくなつたシアと、

「……何時になつたら大樹に行くの?」

「全員殴り終わつたらじやないかな?」

「「「「「「卿でよかつた」「」「」「」」」  
Load

蚊帳の外だつたユエの疑問の言葉と俺の返事、そして一時離脱していたハウリア族が浮かべる安堵の表情だつた

# 旅立ち

深い霧の中、俺たちは大樹に向かつて歩みを進めていた。先頭をカムに任せ、他のハウリア達は周囲に散らばつて索敵をしている。一部を除き、全員もれなくコブか青あざを作つてているのは自業自得なので気にしなくていいだろう

「酷いですよお～！　コウスケさん～！」

氣絶から復活したシアは先程から恨みがましい視線と共に文句をたらたら言つてる。元々はシアの一言が原因なので……

「正直言つて鬱陶しい」

「鬱陶しいって、あんまりですよ。わ・た・し！　顔面から地面に激突したんですからね！」

「チツ……声に出てやがったか」

激突したわりに目立つたケガが無いことに少し驚きつつも、自然と声が出ていたこと

に舌打ちする

「あー！ 今、舌打ちをしましたね！ もうす——」

「 続きを話そうとするシアだつたが、俺は影を操つて口を塞いだ。まだ、ん、う!! と喧しいがマシだと諦めた

「……つかシア<sup>アイツ</sup>、遠慮なしの本気で俺の事をぶん殴る気でいたんだが……」

……シアは私が鬼のように指導したから」

一  
……そ  
う  
か  
い

えつへん！ と、無い胸を張つてドヤアしながら南雲を見るユ工。 南雲は、ため息をつきながらも頭を撫でる。 ユ工は気持ち良さそうだ。

!!

二人の様子を見て目を輝かせると、俺の手を取り自分の頭へと持つていこうとするシ。それが、あの日の夜の八重櫻と重なり……

「...チツ」

振り払おうとした手は彼女の意思通りに頭に乗せられ、動搖からか、お喋りを封じていた影を解いてしまった

「……あれ？」

てつきり振り払われると思った手で頭を撫でられている事に気付いたシアは顔を真つ赤にして、デレデレと頬が緩んでいる

「えへへへえ」

あの日の事を想いながらシアの頭を撫でるのは悪いと思い、止めようとするがシアの幸せそうな顔を見てしまって、これはシアへのご褒美だと思うことにして少しの間ウサミミも堪能したのだった

二組のカツプル（俺は断じて違う）はイチャイチャ（何度でも言うが俺は違う）しながら進むこと十五分。カム含めたハウリア族のニヤニヤ顔を耐えきり、遂に大樹の下へたどり着いた。

大樹を見た南雲の第一声は「……なんだこりや」

という驚き半分、疑問半分といった感じのものだった。ユ工も、予想が外れたのか微妙な表情だ。俺もフェアベルゲンで見た木々のスケールが大きいバージョンを想像していただけに、拍子抜けだつた

そう、実際の大樹は……見事に枯れていたのだ。

大きさに関しては想像通り途轍もなく、明らかに周囲の木々とは異なる異様だ。周りの木々が青々とした葉を生やしているのに対し、大樹だけが枯れ木となつていて。

「大樹は、フェアベルゲン建国前から枯れているそうです。しかし、朽ちることはない。枯れたまま変化なく、ずっとあるそうです。周囲の霧の性質と大樹の枯れながらも朽ちないという点からいつしか神聖視されるようになりました。まあ、それだけなので、言つてみれば観光名所みたいなものですが……」

俺達の疑問顔にカムが解説を入れる。それを聞きながら南雲は大樹の根元まで歩み寄つた。そこにはアルフレリックが言つていた通りの石板が建てられていて

た。

「これは……オルクスの扉の……」  
「……ん、同じ文様」

石版にあつた模様は、オルクスの部屋の扉に刻まれていたものと全く同じものだ。南雲は確認のため、オルクスの指輪を取り出す。指輪の文様と石版に刻まれた文様の一つはやはり同じものだつた。

「やつぱり、ここが大迷宮の入口みたいだな……だが……こつからどうすりやいいんだ？」

南雲は大樹に近寄つてその幹をペシペシと叩いたりしているが、当然変化などなかつた。カム達に聞いてみたりしてみたが、返答はNOだつた。直感で今はこの迷宮には挑戦できないと分かつてゐる。それは原作知識とも一致してゐるので確かだ。

「南雲、この迷宮は駄目だ。直感で分かつたが挑戦できないとよ」

これは早速貸しを取り立てるべきか？と悩み始めていた南雲だつたが、俺の言葉に此方を向くと一言

「マジかよ……」

その時、石板を観察していたユエが声を上げる。

「ハジメ……これ見て

「ん？ 何かあつたか？」

ユエが注目していたのは石板の裏側だつた。そこには、表の七つの文様に対応する様に小さな窪みが開いていた。

「これは……」

南雲が、手に持つているオルクスの指輪を表のオルクスの文様に対応している窪みに嵌めてみる。

すると……石板が淡く輝きだした。

何事かと、周囲を見張っていたハウリア族も次第に集まってきた。しばらく、輝く石板を見ていると、徐々に光が収まる。代わりに文字が浮き出始める。そこにはこう書かれていた。

“四つの証”

“再生の力”

“紡がれた糸の道標”

“全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう”

この四つは、迷宮に挑戦するための条件……手順だつたか？　まあいい……確か一つ目は四つの迷宮をクリアすればいい筈だ。再生の力は神代魔法の一つだつたな……紡がれた糸の道標は確かに案内人の亜人族が必要……三つ目はともかく、この場所以外の迷宮を三つクリアしてこなければいけないのだ。

「……どういう意味なんだこれ？」

「……四つの証は……たぶん、他の迷宮の証?」

「……再生の力と紡がれた絆の道標は?」

頭を捻る南雲にシアが答える。

「ううん、紡がれた絆の道標は、あれじやないですか?  
かって事じやないですか?」

「……なるほど。それっぽいな」

「……あとは再生……私?」

ユ工が自分の固有魔法“自動再生”を連想し自分を指差す。

「違うな……多分だが他の迷宮の再生に関する神代魔法

なんだろう。それで枯れ果てた大樹を甦らせれば試練を受けられるんじゃないか?」

「なるほどな……はあ、ちくしょう。今すぐ攻略は無理つてことかよ……面倒くさい

が他の迷宮から当たるしかないな……」

「ん……」

ここまで来て後回しにしなければならないことに歯噛みする南雲。ユエも残念そうだ。しかし、大迷宮への入り方が見当もつかない以上、悩んでいても仕方ないので、気持ちを切り替えて先に三つの証を手に入れることにする。

「集合！」

号令をかけると、ハウリア族は一瞬で俺たちの目の前に現れ、綺麗に膝をつくと頭を下げる。

「聞いていただろうが、俺達は、先に他の大迷宮の攻略をしにいくことになった。大樹の下へ案内するまで守るという契約も破棄される。しかし、お前達ならば……もうフェアベルゲンの庇護がなくても、この樹海で十分に生きていいけるだろう。そういうわけで、ここでお別れだ」

取り敢えずこんなもんか……と、シアに別れをするんなら今だぞ？　と目で促す。

シアは頷き、カム達に話しかけようと一步前に出た。

「どうさ」「ボス！　お話があります！」……あれえ、父様？　今は私のターンでは……」

シアの呼びかけをさらりと無視してカムが立ち上がり、一步前に出た。ビシツと直立不動の姿勢だ。横で自分の娘が「父様？　ちよつと、父様？」と声をかけているのにも関わらず真っ直ぐ前を向いたまま見向きもしない。

「あく、何だ？」

父様？　父様？　と呼びかけているシアを無視する方向にして南雲はカムに聞き返した。カムは、シアの姿など見えていないと言ふ様に無視しながら、意を決してハウリア族の総意を伝える。

「ボス、我々もボスのお供に付いていかせて下さい！」

「えつ！　父様達も私たちの旅に付いて行くんですか!?」

カムの言葉に驚愕を表にするシア。

「我々はもはやハウリアであつてハウリアでなし！　ボス……そしてLoad卿の部下であります！　是非、お供させて頂きたく！」

「ちよつと、父様！ 私、そんなの聞いてませんよ！ ていうか、これで許可されちゃつたら私の苦労は何だつたのかと……」

「ぶつちやけ、シアが羨ましいであります！」

「ぶつちやけっ!? 父様がぶつちやけちゃいましたよ！ ホント、この十日間の間に何があつたんですかっ!？」

カムが着いて行きたい旨を声高に叫び、シアがツツコミつつ話しかけるが無視される。そんな状況に少し動搖しつつも南雲が答える

「却下だ」

「なぜです!?」

南雲の当然すぎる返答に身を乗り出して理由を問い合わせてくるカム。他のハウリア族も気付けば間近に迫っていた。

「足でまといだからに決まつてんだろ」「……し、しかしつ！」

「調子に乗るな。俺の旅についてこようなんて百四十日くらい早いわ！」

「具体的!? ですが、そこをどうか——」

「んじやあこうしようぜ。次に大樹に来た時までにカム達は鍛練して己を鍛え、それで使えるようなら部下として手伝わせる。でいいんじやないか?」

食い下がろうとするカム達に向けて一つ提案する。このままだと隠れて着いてきそうな勢いなので、妥協案として条件を出した。ついでにヤオ達に目配せしておくカムは納得顔で頷くと、瞳をギラつかせて俺の言つたことを確認してきた

「……そのお言葉に偽りはありませんか?」

「ないよ……南雲もそれでいいだろ?」

「……まあ、いいか。次来たときに使えるようなら考えてやらんでもない」

「……わかりました。おっしゃあ! 聞いたかお前ら! 次にボス達が来た時までに、今よりも強くなつて絶対にお供するぞ!」

「「「「ウオオオオオオ!!」「」「」」

早速鍛練だ! と、去っていくカム達、それを頬を引きつらせながら見守る南雲。す

教え子達

ると、俺の目の前に二人のハウリア族が現れた。ヤオとラナだ

「お前ら……鍛練を怠るなよ。それと、例の二つ名南雲アレの二つ名頼んだぞ」

「はい！ どうかお任せください！ ハウリア族総出で事にからせて頂きます！」

「一体何を頼んだんだ？」

例のアレについて気になつたのか南雲が聞いてきた

「ハウリア族の士気を上げる為に少々……な」

「それでは失礼します」

「シユバツ！ タツタツタツ！ と走り去つていく二人……というかラナは何をしに来たんだ？ 何か言いたがつていたようだが……」

「ぐすつ、私のお別れの言葉も聞いてくれない……旅立つていうのにあんまりですう」

流石に可哀想なので、体育座りでイジけているシアに近づくと「ドンマイ」と一言だけ慰めの言葉をかけた

樹海の境界でカム達の見送りを受けた俺たちは、現在、俺とシアは影で作つたバイクに、南雲とユエは魔力駆動二輪に乗つて平原を疾走していた

やたら胸を背中に押し付けながら抱きついているシアが背中越しに質問する。

「ん？ ああ、そういえば言つてなかつたな……次の目的地はライセン大峡谷だ」「ライセン大峡谷？」

俺の告げた目的地に疑問の表情を浮かべるシア。現在、確認されている七大迷宮は、「ハルツイナ樹海」を除けば、「グリューエン大砂漠の大火山」と「シユネー雪原の氷雪洞窟」だ。確実を期すなら、次の目的地はそのどちらかにするべきでは? と思つたのだろう

「一応、ライセンも七大迷宮があると言われてるんだ。シユネー雪原は魔人国の領土だから面倒な事になりそうだから後回し、取り敢えず大火山を目指すのがベターなんだが……どうせ西大陸に行くなら東西に伸びるライセンを通りながら途中で迷宮を一つクリアしちゃおうかなと」

「そ、それって……ついででライセン大峡谷を渡ることなんですが……」

「どうやら”ついで”感覚でライセンを通る事が信じられないようだ。不安そうに抱き締めている腕の力を少し強くした。

「……シア、お前はもう少し自分の力に自信を持て。今のお前なら此処らの魔物ぐらい問題なく対処できる。それにライセンは放出された魔力を分解する場所だ。身体強化に特化したお前は何ら問題なく動ける……言わば独壇場だ。南雲とユエは知らんが、俺はシアに期待してるんだからな？」

「……はいいいつ！ 頑張りますう！」

「おう、ヘマしてもちやんと助けてやるから安心しろよ。お前はもう立派な仲間なんだ

し

俺の言葉に無言になつたかと思えば何故か慌てて質問してきた

「うつ！ そ、そういうえば今日は野営ですか？ それともこのまま、近場の村か町に行くんですか？」

「いや、色々やることあるし南雲が町にしようつて言つてな。俺らが向かつての方角に町があるらしい。まともな料理が早く食いたいぜ」

買い物するには金銭が必要だが、俺らは無一文。しかし素材は南雲が宝物庫へ大量に収納しているので、それを売つて金にするから問題なし……問題なのは向かつての町にサーモンサンドがあるかどうか……

「はあ～そうですか……よかつたです」

俺の言葉に、何故か安堵の表情を見せるシア。気になつたので「どうした？」と聞き返す。

「いやあ、ハジメさんとコウスケさんのことだから、ライセン大峡谷でも魔物の肉をバリボリ食べて満足しちゃうんじやないかと思つてまして……ユエさんもハジメさんの血があれば満足でしようし。お二人はまともな料理も食べるんですね！」

「当たり前だろ！ 美味しいからつて食べてる訳じやねえのによ。全く俺らの事をなんだと……あ、 そうだ首輪を」

「ちょ、なんですかそれ!? どつから出したんですかつ、その首輪！ ホントやめてえくそんなの付けないでえ！」

数時間ほど走り、そろそろ日が暮れるという頃、前方に町が見えてきた。奈落から出て何カ月かぶりの町に自然と頬が綻ぶ、わくわくした気持ちを抑えつつ、ステータスプレーの隠蔽をしなければいけない事を南雲に伝えた

# ブルックの町

しばらく進み、町まですぐ近くになつたところでバイクから降りる。南雲の方も魔力駆動二輪を宝物庫にしまつた。俺も宝物庫欲しいなあ……と思いながら町の外観を眺める。

周囲を堀と柵で囲まれた小規模な町で、街道に面した場所に木製の門がある。その傍には小屋があるので、門番の詰所だろう。

「うふふ……えへへへへへ」

「おい遠藤……どうしたんだコイツ、にやにやと気持ち悪い」

「おおシアよ、乗り物酔いでおかしくなるとは情けない」

「おつと突つ込まないぞ。いやな？ これから町に入る訳なんだが……シ兎人族アマがただ出歩いていたら面倒なことになるからつて南雲に首輪を貰つたろ？ あれを付けてやつたら……」

「こうなつたわけか……こんな性能つーかデメリット付けた覚えは無いんだけどな」

「嫌がつてたから首輪を付ける理由を教えただけなんだが——」

「よしわかつた……遠藤、バカウサギに話した内容を言え」

話してゐる途中……意味が分かつたらしい南雲からそう言われ、俺はシアを説得する為に話した内容を伝えた

「遡ること数分前」

「なんで首輪なんてつけようとするんですうう?! 私たち仲間じゃなかつたんですかあ」

「」

「仲間だからこそだ。奴隸でもない亞人のお前が町を歩けるわけないだろ?」

「うう……ですか」

「それにお前は兎人族、鬱陶しいのが欠点だが、可愛いしスタイルも魅力的だ。  
こうでもして周囲にわからせないと面倒なことになるんだよ」

シア e a r

(大事な仲間だからこそ、可愛くて魅力的なシアが誰のものか分からせる為に首輪をつ  
けないと心配で町も出歩かせられないんだよ)

「も……もう何を言い出すんですかあゝ可愛いとか魅力的だとか——  
「まあ……事実だからなあ（鬱陶しいっての聞こえてないのか？）」

「えへへ」

「よし、ステータスカードの隠蔽おわり。遠藤もちゃんとやつとけよ！」

どうやらスルーすることにしたらしく、どんどん歩いていく……その二人を見た俺も面倒なので放つておくことにした、とりあえずステータスを……ん?

遠藤浩介 17歳 男 レベル：???

天職  
：暗殺者

筋力 : 11517

耐性 : 10824

敏捷 : 1 3 7 2 7

魔力 : 1 4 9 8 6

魔耐 : 1 4 9 8 6

技能 : 暗殺術 「+短剣術」 「+隠蔽」 「+追跡」 「+投擲術」 「+暗器術」 「+伝振」 「+遁術」 「+深淵卿」 「+操影術」 · 気配操作 「+気配遮断」 「+幻踏」 「夢幻Ⅲ」 「+顕幻」 「+滅心」 · 影舞 「+水舞」 「+木葉舞」 · 直感 「+??」 · 魔力操作 「+魔力放出」 「+魔力圧縮」 「+遠隔操作」 · 胃酸強化 · 纏雷 · 天歩 「+空力」 「+縮地」 「+豪脚」 「+瞬光」 · 風爪 · 夜目 · 遠目 · 気配感知 「+特定感知」 · 魔力感知 「+特定感知」 · 热源感知 「+特定感知」 · 毒耐性 · 麻痺耐性 · 石化耐性 · 恐怖耐性 · 全属性耐性 · 先読 · 金剛 · 威圧 · 念話 · 高速魔力回復 · 魔力変換 「+体力」 「+治癒力」 · 限界突破 · 生成魔法 · 言語理解

直感の派生技能？ しかも技能名が「+????」ってどうなってる？

”直感”は爺からの特典、つて事は絶対的にあのクソ爺の仕業だ。たく、どんな力か分からないつてのに、追加したんなら説明してほしい

ステータスプレートの説明を見ても全て？になつてるので、どんな力なのか全くわ

からない。こんな面倒な事をしてくれた犯人であろうクソ爺に苛立つていると、急に頭の中に文字が浮かんできた

「[+??]」は、一日に二回まで使用できます。

この力は使用者の疑問に思つた事や知りたい事がある特定のものを除いて知れるもの、二回目からは膨大な魔力が必要になる。

使用方法・念じる

え、なにこれ……俺が説明しろつて思つたから使えた感じ？

……まあいや、それより早く行かないと

急いでステータスを隠蔽すると、南雲とユエよりも少し遅く町の門までたどり着いた。予想通り、門番の詰所だつたらしく、武装した男と南雲が話をしていた。

「えーと、いいのか？……それじゃあ、ステータスプレートを見せて、町に来た目的を教えてくれ」

急いで正解だつた、どうやら待つていてくれたらしい。俺が来たのを確認した南雲は門番の質問に答えながらステータスプレートを取り出した。

「食料の補給がメインだ。旅の途中でな」

ふくんと気のない声で相槌を打ちながら門番の男が南雲のステータスプレートをチエツクする。

普通ならば南雲の化け物染みたステータスに驚愕するだろうが、そんなことにはならない

理由は簡単、先ほど俺が言つたようにステータスプレートには、ステータスの数値と技能欄を隠蔽する機能がある。冒険者や傭兵においては、戦闘能力の情報漏洩は致命傷になりかねないからである。

「よし……次は——」

「気づいて無いよなあ……すまんが、俺のも頼む」

「……は？ うおっ？ い、一体どこから？」

南雲のプレートを返すと、俺を無視してユエの方に顔を向けたので何時もの落ちで気がついてないのだと判断して声をかけると予想通りの結果で、門番が驚いている

「……俺は暗殺者だからさ、気配を自然と消しちまうんだ。驚かせたようですまなかつたな」

「そ、そうだつたのか。なるほど……よし、大丈夫だ。

……で、後ろの二人のプレートは？」

門番がユエとシアにもステータスプレートの提出を求めようとして、二人に視線を向ける。そして硬直した。みると顔を真っ赤に染め上げると、ボーと焦点の合わない目でユエとシアをみている。門番の男は二人に見惚れて正気を失っているようだ。

南雲がわざとらしく咳払いをする。それにハツとなつて慌てて視線を南雲に戻す門番。

「——連れは、その……魔物の襲撃のせいで失つちまつてな、こっちの兎人族は……わか

るだろ?」

その言葉だけで門番は納得したのか、なるほどと頷いた

「それにもしても随分な綺麗どころを手に入れたな。白髪の兎人族なんて相当レアなんじやないか? あんたって意外に金持ち?」

未だチラチラと二人を見ながら、羨望と嫉妬の入り交じった表情で門番が南雲に尋ねる。南雲は肩をすくめる

だけで返した。

「まあいい。通つていいぞ」

「ああ、どうも。おつと、そうだ。素材の換金場所つて何処にある?」

「あん? それなら、中央の道を真っ直ぐ行けば冒険者ギルドがある。店に直接持ち込むなら、ギルドで場所を聞け。簡単な町の地図をくれるから」「おお、そいつは親切だな。ありがとよ」

門番から情報を得て、門をくぐり町へと入っていく。門のところで確認したところ、この町の名前はブルツク。久しぶりの町中は、それなりに活気があつた。かつて見たオルクス近郊の町ホルアドほどではないが露店も結構出ていた。

——ホルアドか、そういや八重樫と買い物行つたことあつたな……八重樫が今なにをしてるのかとかつてわかるのか？

気になつたので、”八重樫は今なにをしている？”と念じてみると、また頭の中に文字が浮かび上がってきた

「八重樺零は、天之河光輝、白崎香織、坂上龍太郎ほか数名とパーティーを組み、「オルクス大迷宮」で魔物と戦っています。」

頑張つてるなあ～なんて思つていると、急激な脱力感に襲われて倒れそうになる……それをなんとか踏ん張り、奥歯に仕込んだものを噛んで神水を摂取する。心配した様子でシアが聞いてきた

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ、いつの間にか追加されてた”直感”の派生技能を使つてみたんだが……どうやら魔力を一気に持つてかれたようでな」

「直感”的派生技能？」

「ほれ」

気になつていているようなのでプレートを投げて渡す。南雲はそれを受けとるとプレートを見て訝しげに俺を見る

「……ん？ これはどういう技能なんだ？」

「えーとな……疑問に思つたことや知りたいことを念じるだけで知れる技能だつてよ。一日に二回しか使えなくて、二回目は一回目とは違つて”デメリット”として魔力を大量に消費するらしい」

「……ん？ ということは、もう二回使つたのか？」

「一回目はこの技能について考えてたら頭の中に使い方が思い浮かんでな。二回目は八重樫が何してるのかな」と

「そんなことで倒れそうなほど魔力使うなよ……」

「ハジメ……好きな人がなにをしてるのか気になるのはしようがない」

呆れて言う南雲に珍しくユエが弁護してくれた。その後ろでは初めて聞く名前にシアが困惑し、俺の好きな人と聞き、俺に詰め寄ってきた  
 「こ、コウスケさん！ なんでハジメさんとユエさんが知つていて私に教えてくれな

かつたんですか!?」

「いや、聞かれなかつたし……」

「た、確かに!? ぬぐうう〜!…… い、今教えてください!」

そんな風にぐいぐい八重樫の事を聞いてくるシア。それを答えながらメインストリートを歩いていくと、一本の大剣が描かれた看板を発見する。

かつてホルアドの町でも見た冒険者ギルドの看板だ。規模は、ホルアドに比べて二回りほど小さい。

南雲は俺の方をチラツと見た後、ため息をして扉を開いて中に入つていき、俺たちもそれに続くのだつた

## ギルドとマサカ（の宿）

中に入つてみると想像とは違い、意外に清潔さがある場所だつた。正面にカウンター、左側には飲食店があり、冒險者らしい何人かが食事を取つてしたり雑談をしている。

人が入れば注目されるのは仕方のないこと……冒險者達が此方に視線を飛ばす。最初に入つたのは南雲、なんだ男か……と興味を失つたのか目線を逸らそうとした……だが、ユ工とシアに視線が向くと、途端に「ほう」と感心の声を上げる者や門番同様に見惚れている者、カツプルだつたのか相手の女性に殴られている者がでてくる

無い方が良いのは当然だが、テンプレのようにちよつかいを掛けてくる者はおらず、此方を観察するに留めているようだ。気にせずに南雲はカウンターへ真っ直ぐに向かう。

南雲の向かつた先、カウンターには人が良さそうな笑みを浮かべるオバチャンがい

た。異世界では美人な受付嬢というイメージがあり、別に期待していないが俺の抱いていた夢は幻想であつた事に少し悲しみを覚えた……それを勘違いしたのかシアがジーと冷ややかな目を向けてくる。南雲の方も同じようでユ工からの冷たい視線を受けている。

本当に思つてないのに……。ポニー・テールの若くて可愛い受付嬢なんて……あれ? なんか視線じゃないけど悪寒が追加された?

そんな俺達、男連中の内心を知つてか知らずか、オバチャンは更にニコニコと人好きのする笑みを深めて俺たちを迎えてくれた。

「両手に花を持つてているのに、まだ足りなかつたのかい? 残念だつたね、美人の受付じゃなくて」

……多分だが南雲と俺の思つていることは同じだろう。オバチャンは読心術の固有魔法が使えるのかもしれない。南雲は頬を引き攣らせながら何とか返答する。

「いや、そんなこと考えてないから。俺は片手にしか花を持つてない」

「……ん？ あはははは、どうやら本当のようだね。私の意識から外れるなんて……貴方、暗殺者の上級者かい？」

「まあ、上級者ってのは自負してますけど……これ、ただ自前の影の薄さですから」

「あらそうなの……ごめんね？」

「慣れてるんでお構い無く……」

微妙な空気になり、本当に申し訳なさそうに謝つてくれたが別にいつものことなので気にしないよう伝えると、オバチャンは気を取り直して挨拶をする

「さて、じゃあ改めて、冒険者ギルド……ブルック支部にようこと。ご用件は何かしら？」

「ああ、素材の買取をお願いしたい」

「素材の買取だね。じゃあ、まずステータスプレートを出してくれるかい？」  
「ん？ 買取にステータスプレートの提示が必要なのか？」

南雲の疑問に「おや?」という表情をするオバチャン。

「あんた冒険者じやなかつたのかい? 確かに、買取にステータスプレートは不要だけどね、冒険者と確認できれば一割増で売れるんだよ」

「……そだつたのか」

「へえ……」

どうやら冒険者には親切設定となつてゐるようだ。まあそれも当然だろう……俺の知識だが、冒険者は魔物と戦う危険な仕事で回復薬の元となるであろう薬草を採取するのもそうだ(その筈)。危険が伴う以上、得してもおかしくはない

「他にも、ギルドと提携してゐる宿や店は一~二割程度は割り引いてくれるし、移動馬車を利用するときも高ランクなら無料で使えたりするね。どうする? 登録しておくかい? 登録には千ルタ必要だよ」

ルタとは、この世界トータスでの通貨だ。特殊な鉱石に別の鉱物を混ぜることで異なつた色ができ、それに特殊な方法で刻印したものが使われてゐる。青、赤、黄、紫、緑、白、黒、銀、金の九種類があり、左から一、五、十、五十、百、五百、千、五千、一万

ルタとなつており、貨幣価値は日本と同じだ。

「うーん、そうか。ならせつかくだし登録しておくかな。悪いんだが、持ち合わせが全くなないんだ。買取金額から差つ引くつてことにしてくれないか？もちろん、最初の買取額はそのままでいい」

「可愛い子がいるのに文無しなんて何やつてんだい。ちゃんと上乗せしといてあげるから、不自由させんじやないよ？」

オバチヤンがかっこいい。ハジメは、有り難く厚意を受け取つておくことにした。ステータスプレートを差し出す。

「アンタは冒険者登録してあるのかい？」

「察しの通りしてないんだ、して貰えると助かる。俺も文無しなんでな……コイツ南雲から差し引いておいてくれ」

「はあ……」と、何処か呆れたようにため息をつくと、南雲に目だけで「いいのかい？」と確認する。それを肩を竦めるだけで返す南雲。これまた呆れたように「はいよ」と、俺

のステータスプレートを受け取った。

もちろん二人とも隠蔽したので、名前と年齢、性別、天職欄しか開示されていない。オバチヤンは、ユエとシアの分も登録するかと聞いたきたが、断つた。そもそもプレートを持つていないので発行からしてもらう必要がある。そうなるとステータスの数値も技能欄も隠蔽されていない状態でオバチヤンの目に付くことになる。

二人のステータスを見てみたい気持ちもあつたが、オバチヤンに隠蔽されていない状態のステータスプレートを見られてしまうのは面倒なことになるので諦めた。

南雲の次に返され、戻ってきたステータスプレートには、新たな情報が表記されていた。天職欄の横に職業欄が出来ており、そこに“冒険者”と表記され、更にその横に青色の点が付いている。

この青色の点とは、冒険者ランクのことだ。上昇するにつれ通貨の価値を示す色と同じ上がりをする。つまり、青色の冒険者は一ルタ程度の価値……というわけだろう。しかしだ、ランク的に最底辺である冒険者が、黒や金など高位の冒険者を叩きのめしたら格好いいだろうなあ……いや、やらないけどね……やらないけどね

「男なら頑張つて黒を目指しなよ？」お嬢さんにカツコ悪どころ見せないようにね」

オバチヤンが何故、金ではなく黒を目指せと言つたかというと……戦闘系天職を持たない者で上がる限界は黒という話だからだ。

「ああ、そうするよ。それで、買取はここでいいのか？」

「構わないよ。あたしは査定資格も持つてるから見せてちようだい」

オバチヤンは受付だけでなく買取品の査定もできるらしい。優秀なオバチヤンだ。

南雲はバツクから素材を取り出した。その物としては、魔物の毛皮や爪、牙、そして魔石だ。カウンターの受け取り用の入れ物に入れられていく素材を見て、再びオバチヤンが驚愕の表情をする。

「こ、これは！」

恐る恐る牙を取り、隅から隅まで丹念に確かめる。息を詰めるような緊張感の中、ようやく顔を上げたオバチヤンは、溜息を吐き南雲に視線を転じた。

「とんでもないものを持ってきたね。これは…………樹海の魔物だね？」  
「ああ、そうだ」

南雲に限つて「うつかり奈落の魔物の素材をつ…………！」なんて事はない。こんな場所で奈落の魔物の素材なんて未知の物体を出してしまえば、一発で大騒ぎだ。オバチャンの反応からして樹海の魔物の素材でも充分珍しいようだが、此方の方が見たことがない物よりかはマシだろう

「…………あなたは懲りないねえ」

オバチャンが呆れた視線を南雲に向ける。どうやら変な想像をしていたらしい

「何のことかわからない」

大方の予想はつくが、別世界のテンプレチート主人公ならば奈落の素材を出して受付嬢が驚愕し、ギルド長登場！ いきなり高ランク認定！ 情報はすぐに広まり、モテモテハーレムをくとかなつていたかも知れないので、そういう男なら一度は考えてしまう

妄想をしていたのだろう

……例えばなのにシアから冷ややかな視線を浴び、それ以外の悪寒を感じた。「アンタもかい」とため息混じりの呆れた視線をオバチヤンから受けてしまつた。完全なるとばつちりである。なんでさ……

「樹海の素材は良質なものが多いからね、売つてもらえるのは助かるよ」

オバチヤンが何事もなかつたように話しを続けた。オバチヤンは空気も読めるようで、大変優秀なオバチヤンのようだ。

「やっぱり珍しいか？」

「そりやあねえ。樹海の中じやあ、人間族は感覚を狂わされるし、一度迷えば二度と出でれないからハイリスク。好き好んで入る人はいないねえ。亜人の奴隸持ちが金稼ぎに入るけど、売るならもつと中央で売るさ。幾分か高く売れるし、名も上がりやすいからね」

オバチヤンはチラリとシアを見る。おそらく、シアの協力を得て樹海を探索したのだ

と推測したのだろう。樹海の素材を出しても、シアのおかげで不審にまでは思われなかつたようだ。

それからオバチャンは、全ての素材を査定し金額を提示した。買取額は四十八万七千ルタ。結構な額だが、オバチャンが言うには中央に行けばもう少しだけ高くなるらしいが、それを断つて金を受け取り、門番の彼に言われた簡易な地図について聞いた

「ところで、門番の彼に、この町の簡易な地図を貰えると聞いたんだが……」

「ああ、ちょっと待つといで……ほら、これだよ。おすすめの宿や店も書いてあるから参考にしなさいな」

手渡された地図は、中々に精巧で有用な情報が簡潔に記載された素晴らしい出来だった。これが無料とは、ちょっと信じられないくらいの出来である。

「おいおい、いいのか？　こんな立派な地図を無料で。十分金が取れるレベルだと思うんだが……」

「構わないよ、あたしが趣味で書いてるだけだからね。書士の天職を持つてるから、それ

くらい落書きみたいなもんだよ」

このレベルの地図を落書き……しかも金は取らないって……オバチヤンの優秀さがやばかっただ。この人何でこんな辺境のギルドで受付とかやつてんの？ とツッコミを入れたいレベルだ

「そうか。まあ、助かるよ」

「いいってことさ。それより、金はあるんだから、少しはいいところに泊りなよ。治安が悪いわけじやないけど、その一人ならそんなの関係なく暴走する男連中が出そうだからね」

オバチヤンは最後までいい人で気配り上手だつた。南雲は苦笑いしながら「そうするよ」と返事をし、入口に向かつて踵を返した。ユエも頭を下げて追従する。  
「すまんが最後に聞きたい事があるんだが……」

「どうしたんだい？」

てつきり出ていくのかと思つたら質問してきて少しおどいたように聞いてきた  
「いや、その……”サーモンサンド”もしくは何でもいいんだが、サンドイッチは食事処

にあるのか?」

[...]

「えーと……」

「あら、ごめんなさいね。確かに地図にも書いておいたけど”マサカの宿”って所にあるはずよ」

「ありがとうございます」

俺はそれに心から感謝の気持ちを伝え、入り口へと向かつた。シアも頭を下げて俺の後を追う

食事処の冒険者の何人かがコソコソと話し合いながら、最後までシアを目で追つていた。のを確認しながら南雲たちを追うのだった

「ふむ、いろんな意味で面白そうな連中だね……」

後には、そんなオバチャンの楽しげな咳きが残された。

~~~~~

ギルドを出た俺たち二人はすぐ一人に追い付いた。南雲はユ工と一緒に貰った地図をみて泊まる宿を探していたので、オバチャンから教えてもらつた”マサカの宿”を勧めた。調べてみると、料理が美味くて防犯もしつかりしている。なにより風呂があるとのことで”マサカの宿”に泊まることになつた。少し高めだが、金はあるので問題ないと判断した

”マサカの宿”に到着し、入つてみると一階が食堂になつていたようで、複数の人間が食事をとつていた。南雲を先頭に入つて行くと、お約束のようにユ工とシアに視線が集まる。一々気にしていても仕方がないので、それらを無視<sup>スルー</sup>して、カウンターらしき場所に行くと、十五歳くらいで短髪少女が元気よく挨拶しながら現れた。

「いらっしゃいませー、ようこそ”マサカの宿”へ！ 本日はお泊りですか？ それともお食事だけですか？」

「宿泊だ。このガイドブック見て來たんだが、記載されている通りでいいか？」

南雲が見せたオバチャン特製地図を見て合点がいったように頷く女の子。

「ああ、キヤサリンさんの紹介ですね。はい、書いてある通りですよ。何泊のご予定ですか？」

女の子がテキパキと宿泊手続きを進めようとするが、南雲は何処か遠い目をしてボーとしている。どうやらオバチャンの名前がキヤサリンという名前だつたのが相当ショックだつたようだ。女の子の「あの～お客様?」という呼び掛けにハツと意識を取り戻した。

「あ、ああ、済まない。一泊でいい。食事付きで、あと風呂も頼む」

「はい。お風呂は十五分百ルタです。今のところ、この時間帯が空いてますが……」

女の子が時間帯表を見せる。南雲に続いて俺やユエやシアも見る

「久しぶりの風呂だしなあ……一時間で良いんじやないか?」

「だよなあ……一人もそれでいいか?」

「……ん、それだけあれば充分」

「お、お風呂……大丈夫です！ 頑張ります！」

「えつ、二時間も!?」

「このバカウサギは何を頑張るんだよ……二時間は取れないのか？」

「い、いえ……大丈夫です！」

「え、えくと……それで、お部屋は二人部屋が二つでよろしいですか？」

「ああ、二人部屋を二つで頼む」

南雲の返答に、女の子が宿泊手続きを行っていく。

「……シア、コウスケと二人きりの夜。頑張つて……」

「はい！ 教えを生かす時ですう」

「一体何を教えたんだ？」

「……何つて……ナニ？」

「ちよつ、ユエさん！ 他の人もいるのに駄目じゃないですか！ お下品ですよ！」

ユエの言葉を発端に、色々とややこしい話の流れになってきた。食事を取りながら聞き耳を立てていた男連中が、俺と南雲に対して嫉妬の眼を向け始める。

宿屋の女の子なんて顔を赤くしてチラチラと此方を見ながら小さな声で聞き取れないが何かぶつぶつ言っているようだ。

「……こんな事で驚いてたら”ピツー”とか”ピツー”もしなきやいけないんだから……それにシアは大きい、だから”ピツー”もできる」

「……はうう……でも、コウスケさんに私の処女<sup>初めて</sup>を貰つてもらうには強気に出ないとお

……

」

決してハウリア族が使っていたアレではなくユ工が使っているのはあつち系の”ピツー”である。二人の……というかユ工の大胆発言にシアはもう顔をゆでダコのように真っ赤にしてヤベエ発言をしている。

全く……

ゴチンツ！

バチンツ！

「ひう!?」

「はきゅ!?」

ユエには南雲からの鉄拳、シアには俺がデコピンをすると、二人の少女の悲鳴が響き渡つた。ユエは涙目になつて蹲り両手で頭を抱えている。シアは後ろに一回転した後、頭を押さえて床をゴロゴロのたうち回つてゐる。

「つたく、周りに迷惑だろうが、とんでもないことばかり言いやがつて……」

「……うう、ハジメの愛が痛い……」

「自業自得だバカヤロー！」

「お前もだぞシア、というか俺には好きな人いるつつたろ」

「遠慮しなくていいって言つてたからあゝというかもう少し、もう少しだけ手加減をおお……」

「疲れてるんだよ……」

カウンターの女の子に向き直る。彼女は俺の視線を受けるとビシッ！　と直立に

なつた

「騒がせて悪いな。部屋でゆっくりしたいんだが……手続きつて終わつたか？」

「……はつ、はい！……あれ？ 部屋でゆっくりシたい……つ！」

「はつ！ ま、まさか……お風呂を二時間も使うのはそういうこと!? 一時間交代でお互いの体で洗い合つたりするんだわ！ それから……あ、あんなことやこんなことを……なんてアブノーマルなつ！」

俺は別に変なことを言つていなかつた筈だが、何故か女の子はあわあわと誤解をしだす。

どうやら見かねたのか、女将さんらしき人がズルズルと女の子を奥に引きずつていく。代わりに父親らしき男性が部屋の鍵を渡しながら「うちの娘がすみませんね」と謝罪するが、その眼には「男だもんね？ 我慢できないよね?」という嬉しくない理解の色が宿つている。絶対、翌朝になれば「昨晚はお楽しみでしたね?」とか言うタイプだ。

何を言つても誤解が深まりそので、南雲に”念語”を送つて未だ蹲つているユエを担いで運んでもらい、俺はシアを肩に担ぐと、そのまま三階の部屋に向かつた。南雲

と別れ、部屋に入るとシアをベッドに寝かせると、自らもベッドにダイブして意識をシャツトダウンした。

まだ寝足りないが、夕食の時間になつたようで南雲が起こしにきた。気絶していたシアを起こすと、四人で階下の食堂に向かつた。俺の記憶が確かならチエツクインの時にいた客が全員まだいる。まじかコイツら

え、なんでいるの？」と動搖しかけたが、なんとか冷静を装つて席に着いた。「先程は失礼しました」と聞き覚えのある謝罪の声が聞こえ、声のした方を見ると昨日の女の子が顔を赤くしながら給仕に來た。謝つてはいるが、別のこと興味を示しているのが丸分かりだ。久しぶりに食べた”サーモンサンド（？）”は美味しかったが、なんだか落ち着かない食事だった。

風呂は風呂で、男一時間と女一時間で分けたのにも関わらず、ユエもシアも乱入してきた。ユエの裸を見られたくないのか、南雲が目潰しを放つてきたので、それを間一髪

で避けたり、シアが手で顔を隠しながら隙間から覗いて此方に突っ込んで来たのをお湯に沈めたり、その様子をこつそり風呂場の陰から宿の女の子が覗いていたり、のぞきがばれて女将さんに尻叩きされていたり……

夜寝るときも、当然のようにシアがベッドに入つてこようとしたのを影で拘束して放置しておいたので、ぐつすりと睡眠がとれた

朝起きて朝食を食べた後、南雲がユ工とシアに金を渡し、旅に必要なものの買い出しを頼んだ。チェックアウトは昼なのでまだ数時間は部屋を使える。なので、ユ工達に買出しに行つてもらつている間に、俺と南雲は部屋で用事を済ませることにする。

「用事つてなんですか？」

シアが疑問を素直に口にする。

「迷宮攻略に必要なことをだよ……じゃあまた昼に会おうぜ」

質問にそう答えると、二人は買い物に出掛けた

# おいでませ～ライセン大迷宮！（1）

あの後、買い物から戻ってきたシアに南雲から戦槌型アーティファクトが送られ、町を出た後（ユエシアのファンらしき人々の見送り付き）、俺を先頭にして南雲はユエと魔力駆動二輪に乗り、俺はシアと一緒に影バイクを走らせて、【ライセン大峡谷】を四日ほど進んだ

「死ね」

ザシユツ！ グシャツ！ ズパンツ！

「一撃必殺ですう！」

ズガンツ!! グチャツ！

「……邪魔」

ゴバツ!!

「うぜえ」

ドパンツ!! ブシュー!!

【ライセン大峡谷】を進む俺たちの前には、何度も殺しても懲りもせぬ魔物たちが襲ってくる。

シアは影バイクから飛ぶと、持ち前の筋力+身体強化された一撃で文字通りの一撃必殺、南雲から貰った大槌で魔物を叩き潰した。攻撃を受けた魔物は為す術もなくグチヤツと潰れて絶命する。

そのシアを影を操つて回収しながら相棒である黒刀で近づいてきた魔物を斬り捨てていく。回収したシアが「やりましたよ～コウスケさん！」と、腰に抱きついてくるが反応したらウザイし負けだと思い、そのことには触れずに黙つておき「ナイス」とだけ言つておく

南雲は言うまでもない。魔力駆動二輪を走らせながらドンナーで頭部を狙い撃つて  
いる。魔力駆動二輪を走らせながら”纏雷”を発動させ続けるのは相当魔力を消費す  
る行為なのだが、魔力切れを起こす様子もなく淡々と鬱陶しそうに魔物を殺している。

ユ工は横から来る敵が至近距離まで迫ると、俺たちに及ばずとも強大な魔力に物を言  
わせて強引に魔力を発動し、魔物たちを屠っていく。南雲からプレゼントされた魔晶石  
シリーズに蓄えられた膨大な魔力があるので、魔力切れを起こす心配はない。襲い来る  
敵たちは一概の例なく炭化して絶命していく。

ちなみに俺の影バイクは魔力で影を操り、その形態を維持しながら魔力を流し続けて  
走つてるので南雲以上に魔力を消費するが、魔力切れは起こさない。しかし精神的に  
は少しきついのが難点だ。

俺たちは、魔物たちの残骸を放置して「+????」を使って得た通りに進んでいく

「うん、もう一度だけ夜営をすれば目的地に着きそうだな……」

「本当ですかあ!? それにしても凄いですね？ その……なんでしたつけ？」  
 「あ～、unknowndar? 「+??」つてのは言いづらいからって南雲と二人で決めたやつ」

「そうそれです！ unkownです！ なんか、私の未来視なんて目じやない凄い力ですよね～何でも知りたいことが分かるんですから！」

「何でもってわけじゃないけどな……てか未来視も充分貴重で凄い力だからな？ お前が使いこなせてないだけで」

「ぐふう……」

俺の返しに後ろで少し落ち込んでいるシアを無視し、日が沈んできて丁度いい場所なので、南雲に念話を飛ばして止まるように伝えた。

俺と南雲はバイクをしまうと、夜営の準備を始める。まず、夜営テントを設置し、次に夕食の準備をする。宝物庫から町で揃えた食材と調味料、そして南雲が作った調理器具を出してもらう。

野営テントだが、金属製の骨組みに白い布が被せられただけに見えるが実は違う。南雲が作る物が普通なわけがないのだ。

まず、生成魔法により創り出した“暖房石”と“冷房石”が取り付けられていることにより、常に快適な温度を保ってくれる。その冷房石を利用して“冷蔵庫”や“冷凍庫”も完備されているのだ。さらに、金属製の骨組みには“気配遮断”が付加された“気断石”を組み込んでいるので敵に見つかりにくい……南雲にかかれば夜営でも快適なのだ。

そして調理器具だが……なんと火が要らないのだ。流し込む魔力量に比例して熱量を調整できるフライパンや鍋、そして魔力を流し込むことで“風爪”が付与された切れ味鋭い包丁などがある。もしもこれを売れば一生遊んで暮らせる金が手に入るだろう。まあ、買った者が魔力の直接操作が出来ないと扱えないので、普通の人が買った場合ただのフライパンと鍋なので買い損だろう……防犯対策もしてあるなんて……恐ろしい子！

ちなみに、その日の夕食はクルルー鳥のトマト煮である。クルルー鳥とは、空飛ぶ鶏のことだ。肉の質や味はまんま鶏である。この世界でもポピュラーな鳥肉だ。一口サ

イズに切られ、先に小麦粉をまぶしてソテーしたものを各種野菜と一緒にトマトスープで煮込んだ料理だ。そのスープにつけて食べる柔くしたパンはとても美味しい。

そんな大満足の夕食を終えると、いつも通り食後の雑談をする。テントの中にいれば、大抵の魔物が寄つてこないので比較的ゆつくりできる。たまに寄つてくる魔物は、テントに取り付けられた窓からハジメが手だけを突き出し発砲して処理する。そして、就寝時間が来れば、見張りを交代しながら朝を迎えるのだ。

そろそろ就寝時間だと寝る準備に入るユエとシア。最初の見張りは俺と南雲だ。取り敢えず俺は外に出て、いつも通りの素振りを行う。

ガサツ

「…………ん？ シアか」

「あ、コウスケさん」

「どうした？」

「え、えっと……ちょっとお花を摘みに……」

「なんだトイレかよ……そう言えばいいのに」

「もうっ！ ハジメさんもコウスケさんもデリカシーってものが無いんですか!?」

俺の発言にキツと睨みつけてくる。確かに女の子相手に悪かったかなーと思いつい「悪い」とだけ謝つておく。ぶんすかと怒りながら俺に見えないようにか少し離れた所へと向かつた

「おーい、南雲！ ユエー！」

「……ん」

「本当に迷宮が見つかるのか？」

シアが行つたのを確認すると、テントの中にいる二人に呼び掛ける。俺が呼びに来るのを知つていた二人は準備万端の格好で出て来てそう言う。

俺の「??」によれば、この場所でテントを張つて就寝になると、シアがトイレに行くと外に出て行き、迷宮の入り口を見つけてくる。とあるのだ

南雲が別にそこら探せばいいじやねえか……ともつともな事を言つたが、俺の力の証明……本音はマジだつたら面白いって事で「??」の通りにすることにしたのだ。

「コ、コウスケさん！ ハジメさん！ ユエさん！ 大変ですぅ！ こつちに来てくださいあーい！」

と、シアが、大声を上げた。三人で顔を見合わせて声がした方へ行くと、そこには、巨大な一枚岩が谷の壁面にもたれ掛かるように倒れおり、壁面と一枚岩との間に隙間が空いている場所があった。シアは、その隙間の前で、ブンブンと腕を振っている。何処か嬉しそうにしている事から俺と南雲が思つてていることは一緒だろう

マジだつたのか……あつたのね

「こつち、こつちですう！ 見つけたんですよお！」

「おい、少し声を落とせ」

「わかってるから、そんなに引っ張るな。服が破けちゃうだろ」

「……少し落ち着いて」

はしゃぎながら俺の事をするずる引つ張つていくシアに、ちょっとしたネタで返し、南雲は少し引き気味に、ユウは落ち着くように注意する。シアに導かれて岩の隙間に入ると、壁面側が奥へと窪んでおり、意外なほど広い空間が存在した。そして、その空間の中程まで来ると、シアが無言で、しかし得意気な表情でビシツと壁の一部に向けて指

をさしてムツフと、胸を張った。

### ボインツ

あ、胸が揺れた……そんな事はさておき、指先をたどつて視線を転じる。そしてそこにあるものを見て「はっ？」と思わず呆けた声を出し目を瞬かせた。

俺たちの視線の先、其処には、壁を直接削つて作つたのであろう見事な装飾の長方形型の看板があり、それに反して妙に女の子らしい丸っこい字でこう掘られていた。

“おいでませ！”ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪”

“や♪”マークが妙に凝つている所が何とも腹立たしい。

「……なるほど、これは先が思いやられる」  
「……コウスケは間違つてなかつた」

「そろそろいいか……」

南雲とユエ、二人の声が重なる。その表情は、まさに“信じられないものを見た！”という表現がぴったり当てはまるものだ。二人共、呆然と地獄の谷底には似つかわない看板を見つめている。

「ふ、ふくん！ やりましたよコウスケさん！ おトイ……ゴホッソ、お花を摘みに來たら偶然見つけちやいまして。大迷宮を見つけた私に何かご褒美ないんですか？ コウスケさくん！ ありますよね～？」

能天気なシアの声が響く中、俺はシアに教えていなかつた事を伝える。取り敢えずはシアに教えていた場所の説明から、この迷宮が、おちょくり度が高くてイラつくだろうが落ち着いて冷静にしていることやトラップが沢山あるので不用意に動かない、一ラスボスは巨大なゴーレムだということ

「……ぜ、全部知つてたのに教えてくれなかつたんですか～！」

「すまん……お詫びに俺が出来る範囲で何かしらご褒美とやらをやるから、迷宮攻略を

――

「しゃあっ！ 忘れないで下さいよ～！ その約束を！」

涙目で訴えていたシアに謝り、埋め合わせをする事を伝える。すると、たちまち元気になり「攻略がんばるぞー！」と注意して歩けという言葉を忘れたのか、其処ら中をペタペタ触つて回っている。

「……チヨロすぎだろアイツ」

「……ん、残念チヨロインポジ」

二人はどうやら此処が迷宮だと確定したようだつた。俺の技能 u n p o w n 「??」<sup>w</sup> が信用できると分かつたからだろうし、「ミレディ」その名は、オスカーの手記に出て来たライセンのファーストネームだ。ライセンの名は世間的に有名だが、ファーストネームは知られていない。故に、その名が記されたこの場所が【ライセンの大迷宮】であると確定付けている

「ん？　おいシア、そつちは——」

ガコンッ！

「ふきや!?」

「ぬおつ!?」

直感が反応してトラップに気がついた俺だつたが、シアを止める事は出来ず、手を伸ばしていた俺も一緒に壁がグルンッと回転して壁の向こう側へと送られた

ヒュヒュヒュ！

回転し終えた直後、無数の風切り音響いたかと思うと暗闇の中、何かが飛来する。“夜目”が使える俺からは正体は分かる。それは矢だ。漆黒の矢が無数に俺とシア目掛けて飛んできたのだ、トラップがあることは事前に知っていたので、それを容易くくわで斬り払う

「だから不用意に——」

「おい遠藤、大丈夫——」

ヒュヒュヒュ！

「念話しどきや良かつたわ」

「此方こそ確認取らなくて悪かつたな」

シアに注意しようとしたが、そこで南雲たちも此方側へ来てしまい、また矢が飛来する。それも当然のことく全て斬り捨てて、何でもなかつたように南雲と改善点を言い合う

床を見れば斬り捨てた矢が四十本程度ある。どうやら二十本ずつ飛んできていたようだ。それを確認すると、同時に周囲の壁がぼんやりと光りだし辺りを照らし出す。俺達のいる場所は、十メートル四方の部屋で、奥へと真っ直ぐに整備された通路が伸びていた。そして部屋の中央には石版があり、看板と同じ丸っこい女の子文字でとある言葉が掘られていた。

“ビビつた？　ねえ、ビビつちゃた？　チビつてたりして、ニヤニヤ”

“それとも怪我した？　もしかして誰か死んじやつた？　……ぶふつ”

「……」

「やべえ【??】ちゃん愛してる……本当にイラつくわ」

どうやら南雲とユエも教えたので分かつてはいたようだが、少し青筋を浮かべてい

ラツとした表情をしている。”ニヤニヤ”とか”ぶふつ”の部分が強調されているのも腹立たしい要因の一つだろう

そして、ふと、ユエが思い出したように呟いた。

「……シアは？」

「あ」

「シアはそこに……」

ユエの呟きで南雲も思い出したようで、周りを確認してシアを探す。俺は矢を斬る時に邪魔で横へ飛ばしたのを覚えてるのでそちらを指差す

俺の指を指す方にシアは……いた。壁に突っ込んで涙を流しながら……床を濡らして

「うう、ぐすつ、ゴウズゲざん酷いでずうう……見ないで下さいい、それとハジメざんもおお、ひつく」

ユ工が俺と南雲に後ろを向いているように言つて、南雲が宝物庫から着替えを出し、それを受け取ったユ工はシアの元へと歩いていく  
「お前、何したらあんな風になるんだよ……」

あれは俺でも可哀想だと一瞬思つたぞ？　と言う南雲に俺は弁明をする。

「いや、直感でシアが危ないと思つてな？」止めようとしたんだが、一緒に此方に来てしまつてさ……そしたら矢が飛んできて、「<sup>unknow</sup>????」でも入つた直後にシアが酷い目に合うつてなつてたから突き飛ばして避難させようとしたんだが……どうやら気づいて避けようとしてたらしく……」

「……なるほど、逃げようとした力とお前の突き飛ばした力が合わさつて壁に激突、漏らしたと」

「そうなるな」

「そう言えば花を摘みに行つて いる途中だつたな……」

しばらくすると、ユ工によしよしされながらシアが歩いてきた

「私、避けようとしたのにいい……」

「……シア、負けちゃダメ。コウスケのタイミングも悪かつたけど、先に済ませなかつたシアも悪い」

「うう、どうして先に済ませておかなかつたのですかあ、過去のわたじい～！」

女として絶対に見られたくない姿を、よりもよつて惚れた男の前で晒してしまつたことに未だ、涙を流すシア。ウサミミもペタリと垂れ下がつてしまつている。

「……コウスケ」

ユエによる一応謝つておけとの圧力に押されて謝ることにした。元々謝る気でいたんだがな……

「その、すまんな。お前が危ないと思つて……」

「コウスケさんは悪くありません……私が先に済ませておけば良かつたことですし

……」

和解（？）をして、シアの準備も整つた。さて、いざ迷宮攻略へ！　と意気込み奥へ進もうとして、シアが石版に気がついた。

顔を俯かせ垂れ下がった髪が表情を隠す。しばらく無言だったシアは、おもむろにドリュツケンを取り出すと一瞬で展開し、渾身の一撃を石板に叩き込んだ。ゴギヤ！　という破壊音を響かせて粉碎される石板。

よほど腹に立つたのか、親の仇と言わんばかりの勢いでドリュツケンを何度も何度も振り下ろした。

すると、碎けた石板の跡、地面の部分に何やら文字が彫つてあり、そこには……

“ざんねん♪ この石板は一定時間経つと自動修復するよお♪ プークスクス!!

”

「ムキイ——！」

シアが遂にマジギレして更に激しくドリュツケンを振い始めた。部屋全体が小規模な地震が発生したかのように揺れ、途轍もない衝撃音が何度も響き渡る。

発狂するシアを尻目に南雲はポツリと呟いた。

「ミレーデイ・ライセンだけは“解放者”云々関係なく、人類の敵で問題ないな」

「……激しく同意」

俺の説明した事など忘れ、冷静さの欠片も無くなつたシアが落ち着くまで数時間か  
かつてしまつたのは仕方のない事だろう

# おいでませ～ライセン大迷宮！（2）

シアが、最初のウザイ石板を破壊し尽くして数時間。なんとか落ち着かせることに成功させ、俺を先頭にして通路を進んでいる

シアが気の済むまで石板を叩き壊している時に暇だったので、南雲とユエを交えてライセンの大迷宮について確認程度に話し合つて、俺とシアが先導して南雲やユエが後ろに追従する形になつた。

これにはれつきとした理由がある。この場所は谷底よりも更に魔法がまともに使えないくなつているのだ。魔法特化のユエでも上級クラスの魔法でなければまともに使うのも難しく、その上級魔法でも威力が減衰しており、中級以下に至つては魔法を使つても一メートルで効果が出れば御の字、今まで魔物を強力魔法で一発で葬つてきたユエにとってはやりづらいだろう

そして南雲、こちらも多大な影響が出ているのだ。『空力』や『風爪』といった体の

外部に魔力を形成・放出するタイプの固有魔法は全て使用不可となつており、“纏雷”もその出力が大幅に下がつてしまつていて。ドンナー・シュラーケは威力が半分以下に落ちている。シユラーゲンも通常のドンナー・シュラーケの最大威力レベルしかない。また、魔晶石シリーズに蓄えた魔力の減りも馬鹿にできない。俺とシアは基本的に斬つたり殴つたりだから別に良いかもしないが、二人は俺たち以上に考えて使う必要がある。

「なあ遠藤……確かにこの大迷宮は大量の罠が張り巡らされてるって言つてたが……」「……何も無さすぎる」

「安全な道だから……大丈夫な筈なんだが、うん……俺まで心配になつてきた」

更に十分が経過し、嫌な予感が的中してしまつた。何故ならば、目の前に広がるのは斬り捨てられている無数の矢の残骸、そして見覚えのある水溜まりとヒビが入つた壁……二十分前までいた場所だつたからだ。

「ええつ!? こ、この場所つて……」

「……ん、嫌な予感が当たつた。最初の部屋」

「……おい、さつきあつた石板の反対方向に新しく……」

南雲の言葉通り、新しく石板が追加されていた。そこには……

”仕掛けに怯えながら進んだ先にあつたのは、スタート地点でしたあ！　ぶぶぶ～！”

”安全に通れる道なんてあるわけないじやん？”

”ねえ、ねえ、どんな気持ち？　どんな気持ちなの？　ねえ、ねえ”

「「「「……」「」」」

しばらく無言で文字を見つめていた四人だつたが、俺がため息をつくと三人は一斉に此方を見る

「はあ……これは流石にキレそうだわ」

「ま、まあまあコウスケさん！ 確かに罠一つない安全なルートだつたんですから……」

「……こんなの気にしないで行こう」

「まあ、予想できた事だしな」

冗談で言つた俺のキレる発言に、三人が慰めてくる。それに「冗談だ。気にしない」と返し、取り敢えず俺とシアが前衛で南雲とユエが後衛っていうのは変えずに俺の直感便りで慎重に進む事となつた。

~~~~~

南雲に”マークリング”（“追跡”の固有魔法のこと）任せて進むこと五分、とある広大な空間に出た。

そこは、階段や通路、奥へと続く入口が何の規則性もなくごちゃごちゃにつながり

合っており、まるでレゴブロックを無造作に組み合わせてできたような場所だった。

「これはまた……」

「ザ・迷宮つて感じだな」

「……ん、迷いそう」

「面倒くせえですう」

面倒そうに思いつつも、南雲は“マーキング”を、俺は直感と眼帯を取つて魔眼石を使いながら罠に注意して進む

「この鉱石は……”リン鉱石” っていうのか、へえ空気に触れると発光する……か」

「……ッ！　おい南雲そー」

南雲は薄青い光を放っている鉱物が気になつたようで、“鉱物系鑑定”を使って調べたらしい

聞きながら嫌な予感がして振り返ると共に止まるように言おうとして——

ガコンツ

という音を響かせて南雲の足が床のブロックの一つを踏み抜いた。そのブロックだけ南雲の体重により沈んでいる。「えつ？」と一斉にその足元を見た。

その瞬間、

シャアアアアアア！！

そんな刃が滑るような音を響かせながら、左右の壁のブロックとブロックの隙間から高速回転・振動する円形でノコギリ状の巨大な刃が飛び出してきた。右の壁からは首の高さで、左の壁からは腰の高さで前方から薙ぐように迫つてくる。

「はわわっ！　こ、コウスケさ!?」

「ふん、こんなもん回避するまでもない」

迫る刃に俺は突っ込み、まずは右の刃を斬り、そのまま流れるように移動して左の刃も斬り捨てる。

斬られた二つの刃はクロスするように飛んでいき、壁に突き刺さった。

「終わりか……？」

「どうだらうな……？」

「警戒を……ッ！ 南雲、ユ工を抱えて前方に回避しろ！」

第二陣を警戒して、注意深く辺りを観察する俺と南雲。何もなかつたので終わりだと思つたが、唐突に真上から嫌な予感がしたので、南雲にユ工を抱えて回避するよう言ひ、俺もシアを抱えて同じように前方に飛ぶ。

直後、今の今まで俺達がいた場所に、頭上からギロチンの如く無数の刃が射出され、まるでバターの如く床にスッと食い込んだ。やはり、先程の刃と同じく高速振動している。

冷や汗を流して足先数センチに落とされた刃を見つめる南雲。ユ工も硬直している。シアも一瞬だけ青ざめた表情をした後に俺に抱き抱えられているのに気がつき、デレデレし始めた。もうコイツは駄目かもしけない

「……完全な物理トラップか。どうりで魔眼石じやあ感知できないわけだ」

俺の魔眼石では感知できなかつたので、どうやら純粹に魔力を用いない物理トラップのようだ。意味がないなら魔眼石を晒している必要はないので眼帯を再度着け直す

「……危なかつた。ありがとうコウスケ」

「もう少し慎重に行くべきだつたな……悪かつた。にしてもあれを斬るとは流石だな」

「えへ……はきゅつ！」

「あの程度なら誰でも斬れるよ……それより先に行こう」

いつまでもイヤンイヤンしているシアをもはや定番となつたデコピンをし、先に進む  
ように促す。

「なあ遠藤、アイツは大丈夫だと思うか？」

順番を俺、南雲、ユエ、シアに変更して先に進んでいると南雲からそう話しかけられ  
た

「大丈夫だろ、ユ工も身体強化は化け物レベルだって認めてたし、この大迷宮では魔法は使い物にならない代わりに物理特化なら有利だし……馬鹿なのが欠点だがな」

「馬鹿なのは知ってるし、そつちじやなくてだな……俺とお前はオルクス大迷宮の魔物や鉱石を使つた防具や武器があるからこの程度の罠なら殺される心配なんて無い。ユ工も勿論そうだ”自動再生”があるしな」

「ああ成る程……」

南雲の言いたいことがわかつた。つまりは俺と南雲、ユ工は防具や固有魔法があるから罠程度では死ぬ危険はないだろう。だが、シアの手持ち戦力は身体強化の魔法と”ドリュッケン、動きやすさ重視の軽装だ。そして残念ながら”未来視”は未だに完全に使いこなせてはいない。

必然的に俺たち四人の中で一番危険なのはシアだ。今はデレデレしてる余裕なんてあるかもしれないが、その事に気がついた時シアのストレスが天元突破するであろうことだけは確かだつた。

「あれ？ コウスケさん、ハジメさん、何でそんな哀れんだ目で私を……」  
「強く生きろよ、シア……」

「ドンマイ、フォローはする」

「え、ええ？ なんですか、いきなり。何か凄く嫌な予感がするんですけど……」

~~~~~

今度こそ俺達四人は、トラップに注意しながら更に奥へと進む。それはもう本当に注意深く、大袈裟かも知れないが一步一歩進んでいる

オルクスでは大量に湧いて出てきた魔物だが、今のところ一切出てきていない。そもそもこの大迷宮は魔物のいない迷宮とも考えられるが、それは楽観が過ぎるというものだろう。それこそトラップという形で、いきなり現れてもおかしくない。

時間をかけて進み、やつと通路の先にある空間に出た。その部屋には三つの奥へと続く道がある。取り敢えず入り口に“マーキング”だけして貰い、俺達は階下へと続く階段がある一番左の通路を選んだ。

「うう、何だか嫌な予感がします。こう、私のウサミミにビンビンと来るんですよお」

階段の中程まで進んだ頃、突然、シアがそんなことを言い出した。言葉通り、シアのウサミミがピンツと立ち、忙しく右に左にと動いている。

「南雲——」

「お前、変なフラグ立てるなよ。そういうこと言うと『ガコン』……ほら見ろっ！」

「わ、私のせいじゃないすうツ!?」

「!? ……フラグウサギツ！」

進むほどに嫌な予感はあつたが、ついに俺の”直感”が警鈴を鳴らした。その事を伝えようと二人の会話に入ろうとして、嫌な音が響いたと同時に、いきなり階段から段差が消えた。かなり傾斜のキツイ下り階段だつたのだが、その階段の段差が引っ込みスロープになつたのだ。しかもご丁寧に地面に空いた小さな無数の穴からタールのようなく滑る液体が一気に溢れ出してきた。

「くつ、このつ！」

「……危なツ！」

俺はとすると、刀を床に突き立てて踏ん張り、南雲は咄嗟に靴に仕込んだ鉱石を鍊成してバイク状にする。どうやら義手の指先からもバイクを出して滑り落ちないよう堪えていた。ユウは、咄嗟に南雲に飛びついたので滑り落ちることはなかつた。流石この二人、阿吽の呼吸である。

しかしながら日も浅く、急な事態での対処が遅い人物が一人。言わずもがな、シアである。

「うきやああ!?」

段差が消えた段階で悲鳴を上げながら転倒し後頭部を地面に強打。「ぬうああ！」と身悶えている間に、液体まみれになり滑落。そのまま、M字開脚の状態で南雲の顔面に衝突した。

「バ）えつ！？」

その衝撃で義手のスパイクが外れてしまい、南雲は、右手にユ工を掴んだまま後方にひっくり返った。足のスパイクも外れてしまい、スロープの下方に頭を向ける形で滑り落ちていく。シアは、そんな南雲の上に逆方向で仰向けに乗つかっている状態だ。

一番前にいた俺は三人を止めようとしたが、タールのような物の予想以上の滑りやすさに、体勢を崩して転倒してしまった。突き刺さったままで刃が此方を向いている危険な刀を南雲たちが突っ込んでくる寸前で抜いて納刀、三人に押される形で滑っていく

「てめえ！ ドジウサギ！ 早くどけ！」

「しゅみません～、でも身動きがあ～」

滑り落ちる速度はドンドン増していく。南雲が必死に靴や義手のスパイクを地面に突き立てようとするが既に速度が出すぎていて、中々上手くいかない。ならばと、直接階段の鍊成を試みるが、迷宮の強力な分解作用により上手く行かない。

シアが、もがきつつも何とか起き上がる。南雲の上に馬乗りになつてゐる状態だ。

「ドリュッケンの杭を打ち付けろ！」

南雲がシアに指示を出す。シアの持つ大槌ドリュッケンには、幾つかのギミックが仕込まれており、その内の一つが槌の頭部分の平面から飛び出る杭である。一点突破の貫通力を上げる為の仕掛けだ。それを地面に突き立て滑落を止めようというわけだろう。

「は、はい、任せッ!? ま、前！ 道がつ！」

シアが背中の固定具からドリュッケンを外そと手を回した。と、直後、前方を見たシアが焦燥に駆られた声をあげる。

「つ！ ユエ！」

「んつ！」

咄嗟にハジメはユエの名を呼ぶ。それだけでユエは意図を正確に読み取つた。

「おいシア、しつかり掴まつてろ！」

「は、はい！」

シアは、馬乗りのままヒシツとハジメにしがみつく。

そして遂にスロープが終わりを迎へ、俺達は空中へと投げ出された。一瞬の無重力。その隙にユ工は魔法を発動した。

「〃来翔〃！」

「あ……」

風系統の初級魔法だ。強烈な上昇気流を発生させ跳躍力を増加させる魔法である。だが、この場は魔法の力が及ばない領域。ユ工の魔法は、ほんの数秒の間だけ浮かせる程度の効果しか發揮できなかつた。しかしハジメには十分だつたようで、右手にユ工を、首にシアをしがみつかせたまま、義手を天井に向けて掲げた。そして魔力を流すと

…

パシユ！

という空気が抜けるような音を響かせて義手の内手首から細いワイヤーが取り付けられたアンカーが飛び出し天井の壁に勢いよく突き刺さつた。そして、アンカーから返しが飛び出し完全に固定される。宙吊りになつてゐる三人だが、どうやら心配無さそうだ。

俺はというと、別段危険は無いようなので下に真っ逆さまに落ちていく。ユエのおかげか落下スピードはほんの少し抑えられていたので、苦もなく着地——グチャツ

「ん？」

どうやら着地の際に何かしらを踏み潰してしまつたようで下を見る。そこには虫型の魔物？ の死体、そして俺を避けるように黒い何かが蠢いていた。

カサカサカサ、ワシャワシワシヤ、キイキイ、カサカサカサ

その正体はおびただしい数のサソリだつた。体長は十センチくらいだ。ユエを封印していた部屋に置かれた魔物に比べればかわいいものだ。いや、そつちの可愛いでは無いし、別に気持ち悪いだとかそういういた嫌悪感も無いのだが、どうやらサソリは違うようで、仲間を踏み潰されて怒つたのか一斉に突っ込んできた

「あらよつと」

氣の抜けたような声と共に、その場から跳躍して南雲の足に捕まる。

「おつと……よお、人生初のサソリの海はどうだつた？」

「貴重な体験だつた……お前もどうだ？ 毒なんて効かないし危険はないぞ？」

「あのう、コウスケさん上を見てください」

「上？」

シアに言われ、天井に視線を転じる。すると、何やら発光する文字があることに気がついた。

“彼等に致死性の毒はありません”

“でも麻痺はします”

“存分に可愛いこの子達との添い寝を堪能して下さい、ブギヤー！！”

わざわざリン鉱石の比重を高くしてあるのか、薄暗い空間でやたらと目立つその文字。ここに落ちた者はきっと、サソリに全身を這い回られながら、麻痺する体を必死に動かして、藁にもすがる思いで天に手を伸ばすだろう。そして発見するのだ。このふざけた言葉を。

「いや、まあ……麻痺耐性もあるけどさ…………」

「「「…………」」」

何とも言えないミレディのウザさに俺たちは黙り込むしかなかつた。「相手にするな、相手にするな」と自分に言い聞かせ、何とか気を取り直すと周囲を観察する。

「……ハジメ、あそこ」

「ん？」

すると、ユエが何かに気がついたように下方のある場所を指差した。そこにはぽつかりと横穴が空いている。

「横穴か……どうする？　このまま落ちてきたところを登るか、あそこに行つてみるか」

「俺はあるの穴に行つても良いと思うが……」

「わ、私は、お二人の決定に従います。ご迷惑をお掛けしたばかりですし……」

「いや、そのお仕置きは迷宮出たらするから気にするな」

「逆になりますよお！　そこは『氣にするな』だけでいいじゃないですか」

「……図々しい。お仕置き二倍」

「んなつ、ユエさんも加わると!?　うう、迷宮を攻略しても未来は暗いですう……コウスケさあん」

南雲とユエの容赦のなさに嘆くシアは俺に助けを求めてくるが

「んじや南雲、彼処に行くつてことでいいな？」

「そうだな。なにより戻るより進む方が気分がいいし」

「……ん

「了解つと」

「ちょっ、コウスケさん!? 無視はひどー！」

手を離してサソリの海へと再度ダイブ、グチャヤと何匹かサソリを潰しながら着地し、すぐさま跳躍して移動していく。南雲の方はアンカーをもう一本射出し、ターザンの要領で移動していくようだ。

こうして俺らは無事に横穴へとたどり着き、警戒しつつも、この先に待ち構えているであろう嫌らしいトラップの数々を思い浮かべ、ウンザリとした表情をしながら通路を進むのだった

# おいでませ～ライセン大迷宮！（3）

あれから分かれ道もなく、警戒しながらも十分程度ただ直つ直ぐに続く道を歩き続けるコウスケ達。代わり映えのしない石造りの通路は、同じ場所を歩き続けているようにも錯覚してしまう。

なんとなく気分が悪くなってきた。と、それを見越してか代わり映えのしない通路が終わりを迎える。前方に大部屋が見えたのだ。

「遠藤、どう思う？」

「まあ……普通に考えて何かしらの仕掛けがあるのは間違いないな。嫌な予感しかない」

「だよなあ……でもまあ」

「……ん、進もう」

「どんなトラップでもぶつ潰してやるですう！」

四人の考えが纏まり、大部屋に足を踏み入れる。その部屋の奥には新しい通路への入り口がある。喜んだのも束の間、最後尾のシアが足を踏み入れた瞬間……ガコンッと嫌

な音が響く。俺の嫌な予感は的中、反応は真上からで……

「クソつ……天井だつ！ 急いであの入り口まで走——」

直後、天井が降ってきた。古典的で定番のトラップだが、魔法行使が難しいこの大迷宮での範囲トラップはキツイ

「くつ、シアも手伝ってくれ……南雲は鍊成で穴を開けてくれ！」

「は、はい！」

「あいよ」

”直感”的おかげで天井の変化に気づけたはいいが、奥の通路まで間に合わないと判断し、落ちてきた天井を支える事に切り替える。シアには手伝ってもらい、南雲には鍊成で穴を開けるように言つて難を逃れた

「さて、どうするか……俺の鍊成で奥の通路まで進むつてのがいいと思うが」

「いや、ここは俺に任せろ。南雲は刀を振れる程度に穴を広くしてくれ」

「刀を振れる程度つて……まさかお前……」

「そのまさかだ」

南雲の提案を断り、代わりに穴を少し広げてもらえるように頼む。南雲は俺の意図に気づいたのか呆れた顔で言つた通りに広げてくれた

「何をするつもりなんですか？」コウスケさん

「これだよ」

刀？

二人は疑問の表情を浮かべていたが、刀に手をかけ、もはや壁になつた天井と相対する。どうやら意図がわかつたようだが……南雲同様に出来るの？ 斬れるの？ といつた疑いの眼差しを向けられる。果たして入り口まで天井を斬り進められるのか

• • • •

{} {} {} {} {} {} {} {}

その数分後、コウスケ達が入つて来たのとは反対側の壁に面する通路。その壁が切り

刻まれ、人が通れるほどの穴が空いた。出てきたのはもちろん、コウスケ、ハジメ、ユ工、シアである。

「また、つまらぬものを斬ってしまった……」

「五右衛門かよ。まあ、魔力を温存できたのは良かつたが……チツ、”高速魔力回復”も役に立たないのか。回復が全然進まねえ」

「……取り敢えず回復薬……いっとく？」

「ありがたく貰うが、つつこまないからな」

「コウスケさんも一本、どうぞお～」

「……ありがとよ」

この大迷宮での鍊成は通常よりも多くの魔力を使うらしく、少し疲れた様子で壁にもたれて座る南雲。そこにユ工が手でおチヨコを使って飲むジエスチャードをして魔力回復薬を渡す、シアもポーチから魔力回復薬を取り出して渡していく。魔晶石から蓄えた分の魔力を補給してもいいが、意思一つで魔力を取り出せる便利な魔晶石は温存し、服用の必要がある回復薬の方がいいだろうと受け取って、一気に飲み干した。味はまんまり○ビタンDである。

先へ進もうかと思つたが、立ち上がつた南雲そのまま棒立ちはなつてとある方向を見つめている。俺らもそちらを見てみると、何時ものウザイ文を発見した。

“ふふー、焦つてやんのー、ダサーい”

”何人生き残れたの？ もしかしてえ、俺を置いて行くんだ！ とか人間ドラマしてたあ？ ド・ン・マ・イ♪”

どうやらこのウザイ文は、全てのトラップの場所に設置されているらしい。ミレ

ディ・ライセン……嫌がらせに努力を惜しまないヤツである。

てかマジでシャレにならんだろうコレ……本当にこんな場面あつたらぶちギレてるわ

「あ、焦つてませんよ！ 断じて焦つてなどいません！ ださくないですう！ というかシャレにならないんですよー！」

ウザイ文を見つけたシアが「ガルルウ！」という唸り声が聞こえそうな様子で文字に向かつて反論する。シアのミレディに対する怒りは振りきれんばかりのようだ。

「いいから、行くぞ。いちいち気にするな」

「……思うツボ」

「冷静について言つたろ？ その怒りはラスボス戦で晴らせ  
「ぐぬぬう、はいですう……」

その後も、進む通路、たどり着く部屋の全てに罠が待ち受けていた。突如、全方位から飛来する毒矢、硫酸らしき、物を溶かす液体がたっぷり入つた落とし穴、アリジゴクのように床が砂状化し、その中央にワーム型の魔物が待ち受ける部屋、ギロチンの刃のようなものが絶えず降つてくる部屋、そしてウザイ文。コウスケ達のストレスはマツハだつた。

それでも全てのトラップを斬り抜け、この迷宮に入つて一番大きな通路に出た。幅は六、七メートルといつたところだろう。結構急なスロープ状の通路で緩やかに右に曲がっている。おそらく螺旋状に下つていく通路なのだろう。

「おい」

「わかってる、トラップだろ」

「……油断なんてしない」

「進んだら罠に警戒、曲がつたら罠に警戒、部屋に入つたら罠に警戒、矢、毒、ギロチン……うへへ」

なんだか怒りではなくトラウマになりかけているシアをユ工に任せて、俺と南雲は警戒することに徹する。こんな如何にもな通路で何のトラップも作動しないなど有り得ない。

そして、その考えは正しかつた。もう嫌というほど聞いてきた「ガコンッ！」という何かが作動する音が響く。もうなんか、スイッチを押すとか関係なく入つて少し時間をおけば勝手に発動している気がする。

今度はどんなトラップだ？　と周囲を警戒するコウスケ達の耳にそれは聞こえてきた。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

明らかに何か重たいものが転がつてくる音である。

「「「……」」」

四人が無言で顔を見合させ、同時に頭上を見上げた。スロープの上方はカーブになつているため見えない。異音は次第に大きくなり、そして……カーブの奥から通路と同じ大きさの巨大な大岩が転がつて来た。岩で出来た大玉である。全くもつて定番のトラップだ。きっと、必死に逃げた先には、またあのウザイ文があるに違いない。

ユエヒシアが踵を返し逃げ出そうとする。俺は斬つてしまおうかと刀に手をかけたのだが、南雲の様子を見て止めにする

「……ハジメ、コウスケ？」

「ハジメさん、コウスケさん!? 早くしないと潰されますよ！」

二人の呼びかけに、南雲は答えない。それどころかその場で腰を深く落として右手を真っ直ぐに前方に伸ばした。掌は大玉を照準するように掲げられている。そして、左腕はググッと限界まで引き絞られた状態で「キイイイイ！」という機械音を響かせている。

南雲は、轟音を響かせながら迫つてくる大玉を真っ直ぐに見つめ、獰猛な笑みを口元に浮かべた。

「いつもいつも、やられっぱなしやあなあ！ 性に合わねえんだよお！」

義手から発せられる「キイイイイイ!!」という機械音が、南雲の言葉と共に一層激しさを増す。

そして……

ゴガアアアン!!!

凄まじい破壊音を響かせながら大玉と南雲の義手による一撃が激突した。南雲は、大玉の圧力によつて足が地面を滑り少し後退させられたがバイクを鍊成して踏ん張る、そして、南雲の一撃は衝突点を中心に大玉を破碎していく、全体に亀裂を生じさせた。大玉の勢いが目に見えて減衰する。

「ラアアアアア！」

南雲が左の拳を一気に振り抜き、大玉は轟音を響かせながら木つ端微塵に砕け散つた。

「あの大玉を木つ端微塵にすることは、流石は南雲だな！」

「はっ、俺がやらなかつたらお前が斬つてただろうが」

「ま、ストレス発散は大事だからな！」

「へいへい、譲つてくれてありがとよ」

軽口を言いながら先に避難していったシアとユエの所へ移動する。二人はそれをはしゃいだ様子で迎えてくる

「……流石ハジメ」

「ハジメさんのおかげでスッキリですう！ ミレディの”ピツー”め！ ザマアですう……う？」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

相当ストレスが溜まっていたのだろう。普段言わない“ピツー”を使つてまでミレディに文句を言つているシアだつたが、聞き覚えのある音に笑顔のまま固まる。同じく笑顔で固まる南雲と無表情ながら頬が引き攣つてゐるユエ。ギギギ……と、恐る恐る振り返る三人。次は俺の番か？　と刀に手をかけ、三人同様に背後を振り向いた俺の目に映つたのは……

――予想通り黒光りする金属製の大玉だつた。だが、先程の大玉よりも決定的に違う……何故なら、これは――

「うそん」

南雲も思わず笑顔を引き攣らせながらそう呟く。

「あ、あのコウスケさん。気のせいでなければ、あれ、何か変な液体撒き散らしながら転がつてくるような……」

「……溶けてる」

そう、こともあろうに金属製の大玉は表面に空いた無数の小さな穴から液体を撒き散らしながら追ってきており、その液体が付着した場所がシユワードという実にヤバイ音を響かせながら溶けているようなのである。

「よし、逃げるか」

斬ることは出来るが、酸らしき液体の影響でシアが無事では済まないかも知れない。それに二つ目が転がってきたのだ、次々と転がつてくるに違いない。そう判断した俺はそう一言だけ言い残して呆然としているシアを肩に担ぎ、全速力でスロープを駆け下りていく。

南雲はユ工と一緒に顔を見合わせ、クルリと踵を返すとユ工を抱え、コウスケを追つて一気に駆け出した。

お姫様抱っこすると

俺達の背後からは、溶解液を撒き散らす金属球が凄まじい音を響かせながら徐々に速度を上げて迫る。

「コウスケさん！　どうせならユエさんみたいに抱えて下さいよお！」

「余裕か！　……はあ、何時でも刀を使えるように片手をフリーにしたいんだよ。あと、舌噛むから話さない方がいいぞ！」

「たく、置いてくなよ」

「ああ、すまんすまん。俺達はともかくシアがあの液体に触れたらまずそうだし、先に行かせてもらつた」

「コウスケさん！　やっぱり私の事が大事でえ……っ!?　ん、～！」

そうこうしている内に通路の終わりが見えた。“遠見”で確認すると、どうやら相当大きな空間が広がつていてるようだ。だが見える範囲が少しおかしい。部屋の床がずつと遠くの部分しか見えないので。おそらく、部屋の天井付近にコウスケ達が走る通路の出口があるのだろう。

「真下に降りるぞ！」

「んつ」

「おうつ！」

「う、う、？」

コウスケ達は、スライディングするように通路の先の部屋に飛び込み、出口の真下へと落下した。

そして、

「げつ!?」

「んつ!?」

「ひんつ!?

「くそつ」

四人それぞれが呻き声を上げた。出口の真下が明らかにヤバそうな液体で満たされてプールになっていたからだ。

「んのやろうお！」

「嘗めるなよ！ クソツタレツ！」

南雲は、咄嗟に壁へとアンカーを撃ち込み、落下を防いだ。

俺はなどいうと、何度も南雲に世話になるわけにはいかないと思つた俺は、その場で思いきり足を振り抜き、その勢いで身体を壁へと飛ばす。壁そこへ刀を抜刀して突き立てた

直後、頭上を溶解液を撒き散らしながら金属球が飛び出していき、眼下のプールへと落下した。そのままズブズブと煙を吹き上げながら沈んでいく。

「“風壁”」

ユ工の魔法で飛び散った溶解液が吹き散らされる。しばらく、周囲を警戒したが特に何も起こらないので、南雲はようやく肩から力を抜いた。

「ぐすつ、ひつく、酷い……何で私だけこんなめにいい」「なんで泣いて——ああ……うん、すまん」

溶解液は此方に飛んできてはいない。だつたらなんでだ？　と思つたのだが……ヒビの入つた壁、額にできたタンコブ、そしてタンコブを擦つて泣いているシアを見て察した

「うう……お姫様抱っこしてくれていればこんな目には……」

「いや、してたらプールに落ちてたけど？　てかお前、嘘泣きじやねえか！」

眼下に落ちれば即死な状況（シアのみだが）にも関わらずギヤーギヤー騒ぐコウスケとシア。意外に余裕そうである。

「遠藤、早く降りてこいよ」

「ううい」

サソリプールでの時のようにアンカーを利用して振り子の要領で移動し、地面に着地していた南雲に言われ、それに返事を返す。

「ふう……なんとか助かつたな」

俺は一言そう呟くと、周囲を見渡す。部屋は長方形型の奥行きがある大きな部屋だつた。壁の両サイドには無数の窪みがあり騎士甲冑を纏い大剣と盾を装備した身長二メートルほどの像が並び立っている。部屋の一番奥には大きな階段があり、その先には祭壇のような場所と奥の壁に荘厳な扉があつた。祭壇の上には菱形の黄色い水晶のようなものが設置されている。

「まさかミレディの住処に着いた……のか？　いや、ミレディ<sup>アーティ</sup>のことだ。この周りの騎士甲冑が動いて襲つてくんとだろ」

「だよなあ……いかにもそうなるつて感じの配置だし」

「……大丈夫、お約束は守られる」

「それって襲われるつてことですよね？」　全然大丈夫じゃないですよ？」

嫌な予感を感じつつ話ながらも、微かな可能性に賭けて進み、コウスケ達が部屋の中央に辿り着くと、確かにお約束は守られた。

もはやこの大迷宮お約束となってしまったあの音である。

ガコン！

ピタリと立ち止まるコウスケ達。来ると思つていた四人はすぐさま戦闘体勢を取りつつ周囲を見ると、騎士達の兜の隙間から見えている眼の部分がギンッと光り輝いた。そして、ガシャガシャと金属の擦れ合う音を立てながら窪みから騎士達が抜け出てきた。その数、総勢五十体。

騎士達は、スつと腰を落とすと盾を前面に掲げつつ大剣を突きの型で構えた。窪みの位置的に現れた時点で既に包囲が完成している。

「はいはい、お約束ね。動く前に全部斬つておけばよかつたか。まあいいや……南雲、ユエ、シア、やるぞ」

「ＯＫ、次からは絶対壊す」

「んっ」

「か、数多くないですか？　いや、やりますけども……」

南雲はドンナーとシュラーケを構えた。少數VS多數であるこの状況では機関砲のメツエライが有効だが、この部屋にどれだけのトラップが仕掛けられているかわからぬ。無差別にバラまいた弾丸がそれらを全く作動させてしまつては目も当てられない。従つて、二丁のレールガンにしたのだ。

ユエは、コウスケの言葉に気合に満ちた返事を返した。この迷宮内では、自分が一番火力不足であることを理解している。だが足でまといになるつもりは毛頭ない。南雲のパートナーたるもの、この程度の悪環境如きで後れを取るわけにはいかないので。ましてや、シアがいるのだ。師匠として彼女に無様なところは見せられない。

一方でシアは、少々腰が引け気味だ。このメンバーで影響なく力を発揮できる一人とは言え、実質的な戦闘経験はかなり不足している。まともな魔物戦は谷底の魔物だけで、僅か数日程度のことだ。ユエやコウスケとの模擬戦を合わせても二週間ちょっとの戦闘経験しかない。もともとハウリア族という温厚な部族出身だったことからも、戦闘に対して及び腰になるのも無理はない。むしろ、気丈にドリュッケンを構えて立ち向かおうと踏ん張っている時点でかなり根性があると言えるだろう。

「シア」

「は、はい！ な、何でしよう、ハジメさん」

緊張に声が裏返っているシアに、ハジメは声をかける。

「お前は強い。俺達が保証してやる。こんなゴーレム如きに負けはしないさ。だから、下手なこと考えず好きに暴れな。ヤバイ時は必ず助けてやる」

「……ん、弟子の面倒は見る」

「は、ハジメさんが……デレた！ こんなのレアですよ!?」

「ああん？」

「ひいい!? じょ、冗談ですよお～」

シアは、ハジメとユエの言葉に思わず涙目になりつつも、今までのハジメの対応を思い返して信じられないのか変なことを言い出し、ハジメに睨まれてしまう。しかしその顔は認めてもらえていたのが嬉しいようで笑顔だった。

「んじやあ覺悟も決まつたらしいし、行くぞ」「思う存分暴れさせてもらいますよお!!

よーし！　かかつてこいやあ！　ですう！」

「いや、だから、何でそのネタ知つてんだよ……」

「……だあ」

「……つつこまないぞ。絶対つつこまないからな」

俺と南雲の疲れた心境を知つてか知らずか、五十体以上のゴーレム騎士は一斉に俺たちへと斬りかかってきた

# おいでませ～ライセン大迷宮！（4）

ゴーレム騎士達の動きは、二、三メートルはある巨体に似合わず俊敏だった。ガシャンガシャンと騒騒音を立てながら急速に迫るその姿は、装備している武器や眼光と相まってつて凄まじい迫力である。

そんなゴーレム騎士達に先手をとつたのは南雲だ。普段よりも半分以下の火力が出来ないとはいっても、対物ライフルの数倍もの威力がある弾丸はゴーレム騎士達に一切の容赦なく浴びせられる。

ドパン！　ドパン！

二丁のレールガンから放たれた弾丸はゴーレム騎士の目の部分を性格に撃ち抜き、衝撃で後方へ倒れる騎士達。それを飛び越えて後続にいる騎士達が南雲達へと迫る。南雲は包囲されないようレールガンを発砲し、隊列を乱していく。

そんな激しい銃撃を盾と大剣と仲間の体で凌ぎながら、遂に南雲の目前へと迫った数体の騎士だったが、いち早く気がついたシアが上段に構えていた大槌を遠慮容赦の一切ない全力の一撃で振り下ろす

「でえやあああ!!」

ドオガアアア!!

凄まじい衝撃音を響かせながら盾で防御していたゴーレム騎士をその防御ごとペシャンコに押し潰した。だが、渾身の一撃を放つたため、地面にめり込んでしまったドリュッケン。シアには次の行動に移るまでに隙が出来てしまつた。それを逃すはずもなくゴーレム騎士が大剣を振りかぶるとシアを両断するべく迫り来る。

特訓の成果か、それにしつかりと反応していたシアは、柄を捻つてドリュッケンの頭の角度を調整してトリガーを引く

ドガソツ!!

そんな破裂音を響かせながら地面にめり込んでいたドリュッケンが跳ね上がった。その勢いを殺さず、その場で一回転すると、大剣を振り下ろそうと迫っていた騎士の腹部分に叩きつけた。

「りやああ!!」

そのまま気合いの声と共に一気に振り抜く。直撃を受けた騎士は、体をくの字に曲げてぶつ飛んでいき、後ろから迫っていた騎士達を巻き込んで地面に叩きつけられた。騎士の胴体は、原型を止めないほどひしやげており身動きが取れなくなっている。

「ユエがカバーしてるし大丈夫か」

危なくなつたらカバーしようとゴーレムを相手にしながら横目でシアの戦闘を見ていたコウスケは、ユエが南雲の作つた武器で援護に入つたのを見て、目の前の敵を斬ることに集中することにした。

まず、目の前の騎士が振り下ろしてきた大剣を刀で受け流し、そのまま斬り上げる。二つに斬り裂かれた騎士には目もくれず、続けて背後から迫っていた二人の騎士を大剣を振り下ろす前に上半身と下半身を泣き別れさせる。落ちていた大剣を拾い上げると、全力で斜め後ろに向けてぶん投げると、投げた大剣はシアの死角から接近していた騎士に当たつて吹き飛んでいった。

いくら倒しても湯水のごとく湧いてくる騎士達は大迷宮のせいで溜まりにたまつたストレス解消には持つてこいだつた。しかもまともな対人戦（??）なので、感覚を取り戻すには丁度いい

「遠藤、コイツらの核なんだが——」  
「ん？　ああ、すまん今から確認する」

オスカーの住処を調べていた時に、ゴーレムは体内にある核が動力源であり弱点だと知つていたのだが……戦闘に集中していたせいか魔眼石で核の場所を探すことを忘れ

てしまつていた。

「……ん？」

眼帯をずらして核の場所を探したが、それらしい反応は無い、視えたのはゴーレムから発せられる微量な魔力だけだった。

「その反応だとやつぱり核は無かつたか」

「やつぱり？ 心当たりでもあつたのか？」

「シアが最初にぶつ潰した騎士があつたろ？ あの残骸が無くなつててな。あそこまで潰れてたら核も一緒に潰れてる筈なのに再生してたんだよ」

「なるほど……なら核が無いコイツらは誰かに操られて動いてるつてか？」

「そうなるとキリがないからな。騎士は無視して扉まで突破するぞ！」

「まあそれが一番だな」

「……ん、わかつた」

「ど、突破ですかあ？」

「了解です！」

南雲の合図と共に、ユエとシアが一気に踵を返し祭壇へ向かつて突進する。南雲はドンナー・シュラークを連射して進行方向の騎士達を蹴散らし、俺は他の邪魔になりそうな騎士連中を斬つて進む。南雲は後方から迫つてくる騎士達に向かつても手榴弾を二個投げ込んだ。背後で大爆発が起こり、衝撃波と爆風で騎士達が次々と転倒していく。

俺の斬撃と南雲の射撃によつて進行方向にいた敵がいなくなり、残りもシアのドリュッケンでの体ごと大回転させて吹き飛ばし、技後の硬直したシアを狙つた攻撃をユエの”破断”が飛来して切り裂いていく

余裕がある俺と南雲が殿を務め、後方から迫つてくる騎士達を足止めしている隙にシアが祭壇の前で陣取り、続いてユエが祭壇を飛び越えて扉の前へ到着した

「ユエさん！　扉は!?」

「ん……やつぱり封印されてる」

「あう、やつぱりですかっ！」

見るからに怪しい祭壇と扉、そしてミレディの性格からして何も無しで通れるなど

思つていなかつたので封印は想定内。だからこそ、落ち着いて封印を解くためにゴーレム騎士達を相手取つたのだ。案の定の返答に文句を垂れつつ階段を上がつてきた騎士を殴り飛ばす

「封印の解除はユエに任せる。俺と遠藤、シアはユエの解除が終わるまで騎士共の進行を妨害するぞ」

如何にもな祭壇と黄色の水晶なんて物が置かれているのだから、正規の手順で封印を破る方がきっと早い。南雲は瞬時にそう判断して、戦闘では燃費の悪いユエに封印の解除役を任せた

「ん……任せて」

ユエは、二つ返事で了承し祭壇に置かれている黄色の水晶を取り、背後の扉に振り返ると解除を試みている

南雲の手榴弾によつて動けなくなつていた騎士達だが、どうやら再生が終わつた

らしく一斉に突撃してきた。南雲<sup>が</sup>ドンナー・シュラーグで銃撃して数体を相手取り俺はその他の騎士を斬り伏せ、<sup>斬り漏らし</sup>撃ち漏らしの数体をシアが殴り潰していく

「ハジメさん。さつきみたいにドパツと殺つちやえないんですかあ！」

なんど殴り飛ばしてもしぶとくわらわら集まつてくるゴーレム騎士達に、シアが手榴弾の使用を南雲にお願いする。

「あほう。あれはちゃんとトラップが確実にない場所を狙つて投げたんだ。階段付近は、何が起ころか分からぬいだろうが」

「こんなにゴーレムが踏み荒らしているんですし大丈夫ですよ」

「いや、ミレディ・ライセンのことだ。ゴーレムにだけ反応しない仕掛けとかありますか？」

「うつ、否定できません……」

少しづつだが連携が取れてきて冷静になれたのか、雑談をかわしながらゴーレム騎士達を弾き飛ばしていくコウスケ達。無限に突撃してくる騎士達に呆れながらも、これも

剣の鍛練だと思い気合いを入れて斬り込む

「でも、ちょっと嬉しいです」

「ああ？」

「ん？」

「また一体、ゴーレム騎士を叩き潰し蹴り飛ばしながら、シアがポツリとこぼした。

「ほんの少し前まで、逃げる事しか出来なかつた私が、こうしてコウスケさんやハジメさんと肩を並べて戦えていることが……とても嬉しいです」

「……ホント物好きなやつだな」

「……良かつたな」

「えへへ、私、この迷宮を攻略したらコウスケさんにご褒美でキスしてもらうんだ！」  
「すう」

「なんで自然と死亡フラグに繋げたの!? おバカヒロイン（仮）から悲劇のヒロインに

チエンジとか荷が重すぎるから止めとけって！」

「それは、『絶対に死なせないぜ愛しのマイハイ☆』という意味ですね？」  
コウスケさ

んつたら、もうつ！」

「あれ？　俺つてそんな戯言いったつけ……おかしいなあ」

「最近、コイツのポジティブ思考が恐ろしくなってきたんだが……ま、遠藤がんばれ」「ハジメさんも私とコウスケさんの関係を応援してくれているなんて……うへへ」

「あーうん、はい」

そんなやり取りをしながら騎士達の進行を防ぐこと数分。ある意味、イチャついていると見えなくもない二人の間に、ぬうっと影が現れた。ユ工だ。

「……私とハジメが我慢してるんだがら、いちやいちゃ禁止」

「いや、してないけど！」

「ぬふふ、そう見えました？　照れますねえ！」

「……どうだつた？」

俺とシアを交互に見たユ工は不機嫌そうな眼差しを向ける。南雲に聞かれた事と、そんな状況ではないと思い直したようで得意気に任務達成を伝えてくれた。

「……開いた」

「早かつたな、流石ユエ。シア、遠藤、下がれ！」

「はいっ！」

「オッケー！」

ユエの言うとおり後ろを確認すると、封印が解かれて扉が開いているのが確認できた  
リ奥は特に何も無さそうだが、俺の直感が反応はしているので嫌なトラップがあるのだ  
ろう。ユエの報告を聞いた南雲からの指示で撤退をする。最初にユエが、続いてシアが  
扉の向こうへと入り、いつでも閉められるように二人でスタンバる

俺が入ったのを確認した南雲は、置き土産にと手榴弾を数個放り投げると、二人は扉  
を閉める。ゴーレム騎士達が逃がすものかと扉の前までガシャガシャと殺到するが、手  
榴弾が爆発し強烈な衝撃で吹き飛ばされただろう。

部屋の中は、遠目に確認した通り何もない四角い部屋だつた。てつきり、ミレディ・ラ  
イセンの部屋とまではいかなくとも、何かしらの手掛けりがあるので？　と考えてい  
たようで、三人は少し拍子抜けしている。

「これは、あれか？　これみよがしに封印しておいて、実は何もありませんでしたってい  
うオチか？」

「……ありえる」

「いや、とんでもなく嫌な予感はしてるから警戒はしておいてくれ」

「ですよね……け、警戒ですう！」

俺の言葉にがっかりしていた三人は、武器を構えて何処からでも攻撃がきてもいいよ  
うに備える

ガコン！

「「「!?」」」

仕掛けが作動する音と共に部屋全体がガタンッと揺れ動いた。そして、コウスケ達の  
体に横向きのGがかかる。

「つ！？　何だ！？　この部屋自体が移動してるのであるのか！？」

「……そうみたツ!?」

「うきや!?　あ、コウスケさん……ありがとうございます……うへへ」

南雲が推測を口にすると同時に、今度は真上からGがかかる。急激な変化に、ユ工が舌を噛んだのか涙目で口を抑えてぶるぶるしている。俺は刀を地面に突き刺して体を固定すると、ついでにシアの体を反対の手で支える

部屋は、その後も何度も方向を変えて移動しているようで、約四十秒程してから慣性の法則を完全に無視するようにピタリと止まつた。俺とシアは勿論のこと、南雲は途中からスパイクを地面に立てて体を固定していたので急停止による衝撃にも耐え、ユ工も南雲の体に抱きついていたので問題はない。

「ふう、ようやく止まつたか……ユ工、大丈夫か？」

「……ん、平気」

「シア、大丈夫か？」

「大丈夫です！　逆にコウスケさんの体に抱きつけたので元気百倍ですう！　ううつ

ぶ」

警戒しながらも南雲はスパイクを解除して立ち上がった。俺も刀を抜いて周囲を観察するが特に変化はない。先ほどの移動を考えると、入ってきた時の扉を開ければ別の場所ということだろう。

「元気百倍じゃなくて気分の悪さMAXじゃねえか。横になつて休んでろ」

空元気だつたようで今にも吐きそうな様子のシアを横にさせて、二人と一緒に周囲を確認していく。そして、やつぱり何もないようなので扉へと向かつた。

「嫌な予感つて部屋が搔き回された事なのか？」

「そうじやねえの？　さて、何が出るかな？」

「……操つてたヤツ？」

「その可能性もあるな。ミレディは死んでいるはずだし……一体誰が、あのゴーレム騎士を動かしていたんだか」

「……何が出ても大丈夫。ハジメは私が守る……勿論コウスケとシアも」

「…………」

いつも通り場所を問わず二人はイチャイチャしだした。南雲は優しい手付きで、そつとユエの髪を撫でる。ユエも甘えるように寄り添つて気持ち良さそうに目を細めてい

る。

「……コウスケさん、前から言おうと思っていたのですが、ハジメさんとユエさんって唐突に二人だけの世界作りますよね……はつ！　これを出来るようにしろっていうユエさんからの指導の一環！　勉強になりますう！　うっふ」

吐き気を堪えながらも頑張つてユラユラ立ち上がり、俺に質問してきておきながらブツブツと自己完結してシアは床に沈んだ。しかしそこで終わらないのがシア、諦めきれなかつたのか、手と足を使いながらコウスケの元へと近づこうとホラー映画に出てきそうな動きで這いずつてくる

「……前から言おうと思っていたんだが、時々出る、お前のそのホラーチックな動きやめてもらえないか？　何ていうか、背筋が寒くなる上に夢に出てきそうなんだが」「……シア、今の動きは減点」

「な、何てことを。少しでも傍に行きたいという乙女心を何だと、うふ。私もユエさんみたいにナデナデされたいだけですう。コウスケさん、私を抱きしめてナデナデして下さい！　うえ、うっふ」

「すまんが今にも吐きそうな顔で、そんなこと言われても困るんだけど……そ、そういうのは」褒美だろ？ 外に出たらな

「……ふふ」

シアが根性でコウスケ達の傍までやつて来て、期待した目と青白い顔でコウスケを見上げる。コウスケはそつと、視線を逸らして扉へと向き直る。背後で「言質をとれましたあ！ うえっふ」という声が聞こえるが何とかスルーした。

扉の先は、ミレディの住処か、ゴーレム操者か、あるいは別の罠か……嫌な予感はしているので警戒しつつも不敵な笑みを浮かべて扉を開いた。

そこには……

「……何か見覚えないか？ この部屋」

「……物凄くある。特にあの石板」

「嫌な予感つてこれかよ……」

扉を開けた先是、別の部屋に繋がっていた。その部屋は中央に石板が二つ立つており

左側に通路があり、斬られた黒い矢のようなものまである……見覚えがあるはずだ。なぜなら、その部屋は

「最初の部屋……みたいですね？」

やつとで復活したらしいシアが、思つていても口に出したくなかった事を言つてしまふ。だが、確かに、シアの言う通り最初に入つたウザイ文が彫り込まれた石板のある部屋だつた。よく似た部屋ではない。それは、扉を開いて数秒後に元の部屋の床に浮き出た文字が証明していた。

“ねえ、今、どんな気持ち？”

“苦労して進んだのに、行き着いた先がスタート地点と知つた時つて、どんな気持ち？”

？

“じょか～もう二回目だよね☆キャピツ”

“ねえ、ねえ、どんな気持ち？ 二回も同じ日にあつた時つてどんな気持ちなの？”

ねえ、ねえ”

「「「「……」「」」

コウスケ達の顔から表情がストンと抜け落ちる。能面という言葉がピツタリと当てはまる表情だ。四人とも、微動だにせず無言で文字を見つめている。すると、更に文字が浮き出始めた。

“あつ、言い忘れてたけど、この迷宮は一定時間ごとに変化します”

“いつでも、新鮮な気持ちで迷宮を楽しんでもらおうというミレディちゃんの心遣いです！ ビシッ”

“嬉しい？ 嬉しいよね？ お礼なんていいよお！ 好きでやつてるだけだからあ

！”

“ちなみに、常に変化するのでマッピングは無駄です”

“ひよつとして作っちゃつたの？ 苦労しちゃつたあ？ ざんねん！ 全て無駄なのでしたあ～プギヤア～”

「は、ははは」

「フフフフ」

「フヒ、フヒヒヒ」

「クククツ……えひやひやひやッ！　いいね。いいね。最ツ高だねエ！　いいセンスしてやがんじやねえかよミレディ・ライセンのクソツタレがよオ！」

「え、あの……コウスケさん！」

「……コウスケ？」

「え、遠藤……てか遠藤か？　深淵卿の方なのか？」

シアはあれだが、流石のハジメとユエの二人も頭にキているのか、壊れたような笑い声を響かせる。だが、それ以上に頭にキてる男がいた。最初に振り出しに戻つてしまつたのは自分のせいであり、二度も同じ目に遭つた原因である自分とミレディに対しても人以上にぶちギレた様子のコウスケだ。普段言わないような事を叫び散らしている

凄まじく興奮している人が傍にいると、逆に冷静になれることがある。ハジメとユエ、シアの現在の心理状態はまさにそんな感じで、狂つたように笑いながら時々「ミレディぶち殺す」とか、血走った目をして青筋まで浮かべているコウスケ

シアは「え、コウスケさんですよね？　大丈夫なんですかあ！」と、驚きつつも心配

の声を上げ

ユエは普段から考えられないコウスケに若干戸惑いながらも心配している  
ハジメはハジメで、遠藤なのか……はたまた深淵卿が出てきたのだろうか……と、ほ  
んの少しだけ心配になりつつも妙なことを気にしている

しばらくして再び迷宮攻略に乗り出したコウスケ達。ギロチントラップや大玉が転  
がつてきたり等の危険なトラップから金たらい、トリモチ、変な匂いのする液体ぶつか  
けetcなどの地味なトラップまで、様々なラインナップのトラップを文字通り斬り進  
んで行くコウスケを先頭にした三人は「遠藤（コウスケ）を怒らせないようにしよう」と  
心に決めてコウスケの後に続いて行つた